

## 第4章 倉谷荒田遺跡の調査

### 第1節 遺跡の立地と層序

#### 1 遺跡の立地と環境(第2・3図、P.L.7・8)

倉谷荒田遺跡は、大山北麓から日本海に派生する丘陵上及び谷部に所在する。丘陵は、大山北麓が多数の中小河川による浸食を受け、放射状に開析されたことにより形成されたものである。平成21年度に丘陵平坦部分を調査しており、今回の調査では丘陵の東側の斜面部及び谷部分を調査した。谷部北側にはカナクソ溜池と呼ばれる池があり、谷底にはこの溜池へとつながる流路が南北方向に延びていた。この流路を隔てて東側の丘陵が後述する豊成叶林遺跡である。調査地の標高は丘陵頂部で約63m、谷部で約55mである。調査前の状況は山林であり、調査地内の北西-南東方向には農道が通っている。

#### 2 調査地内の土層堆積(第31～33図、P.L.10)

土層堆積の確認は、各調査区の壁面及び調査地内に土層観察用のベルトを設定して行った。A-A'は調査地北壁、B-B'は調査地中央、C-C'は調査地南壁である。平成21年度調査時の基本層序としてI～VI層が明らかになっており、今回調査時にあたって、連続性をもつ部分については層名を継承している。新たに認識した層についてはVII層以降の層名を付し、細分される場合は層名の後にa・bを付して表記した。

I層：表土。にぶい黄褐色を呈する。しまり、粘性ともに弱い。

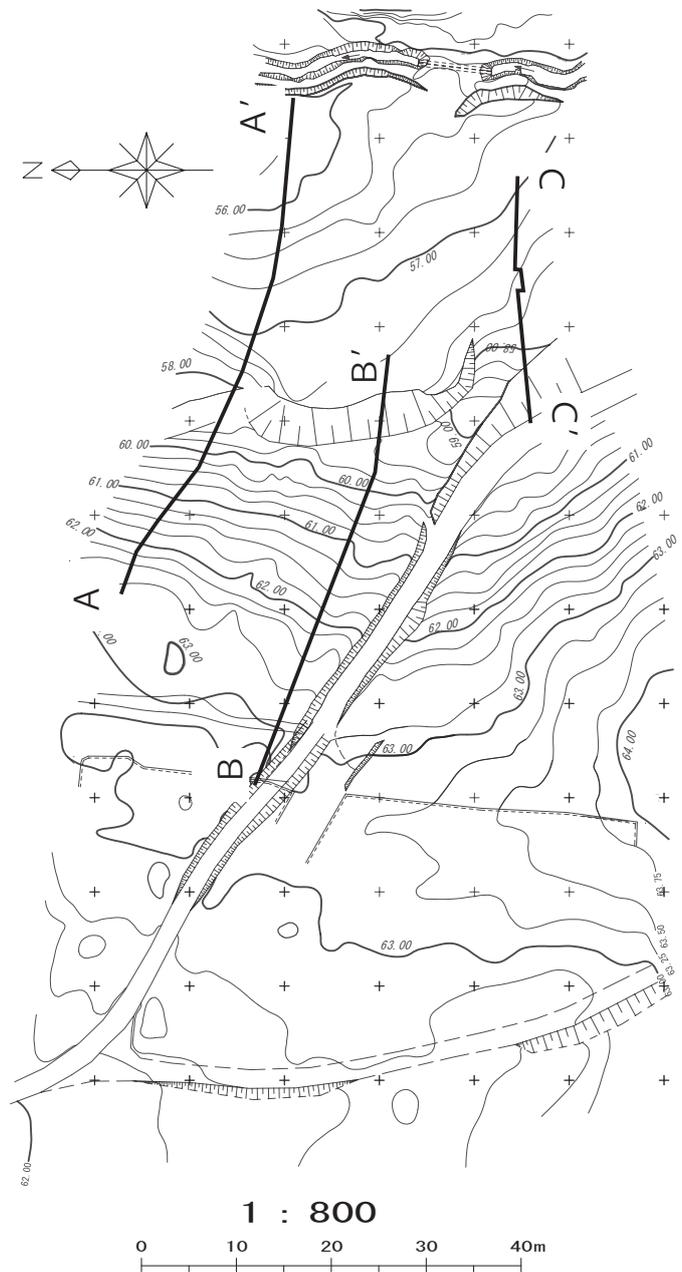
Va層：平成21年度調査時のV層。黒褐色土(10YR3/1)。遺物を含まない。

Vb層：黒褐色土(10YR2/2)。粘性なし。ややしまる。遺物を含まない。

VI層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム層までの漸移層。

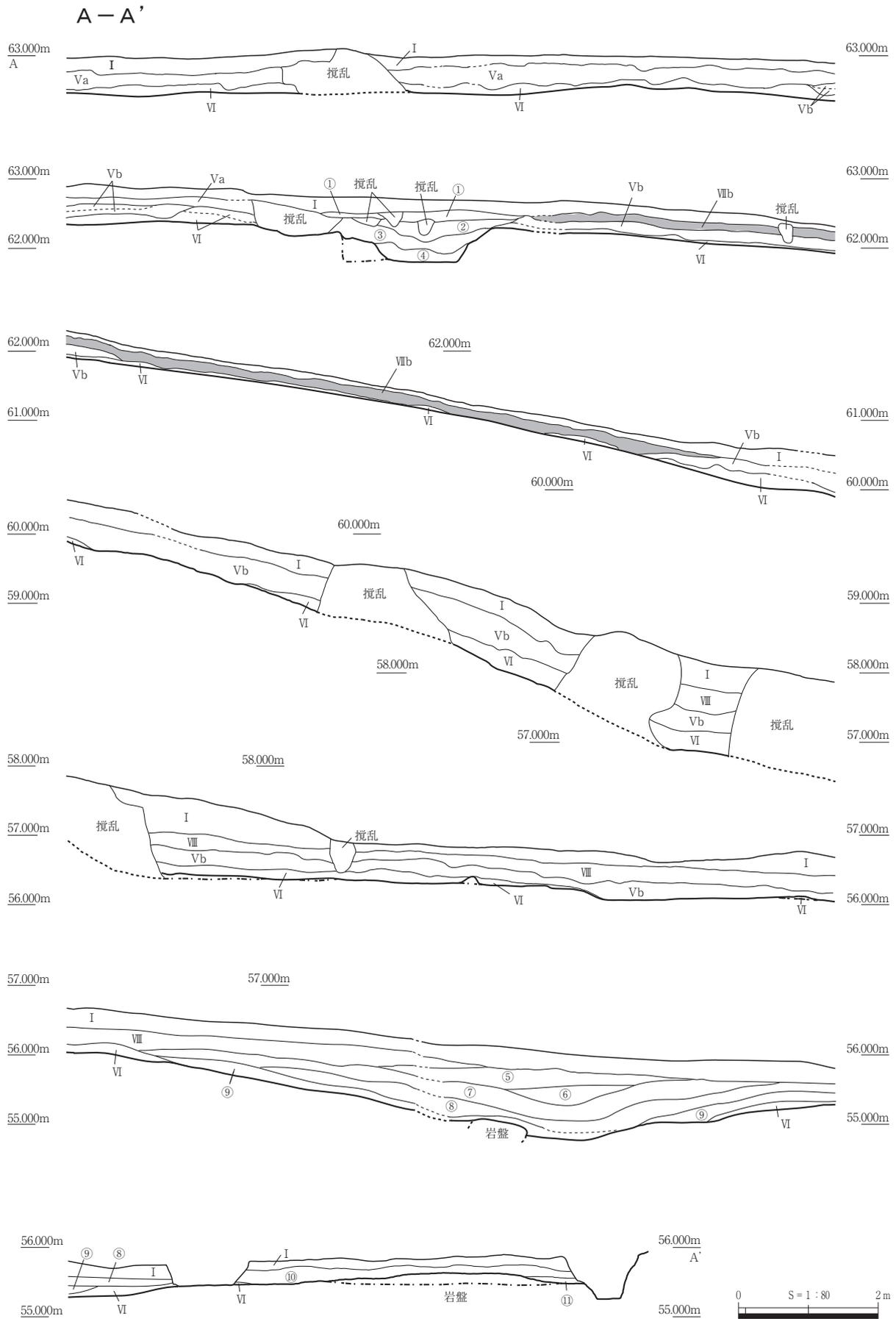
VIIa層：暗灰褐色土(10YR3/1)。粘性ややあり。しまりややあり。弥生時代中期から古墳時代前期の遺物包含層。

VIIb層：暗褐色土(10YR3/3)。粘性ややあり。しまりやや弱い。弥生時代中期から古墳時代前期の遺物包含層。

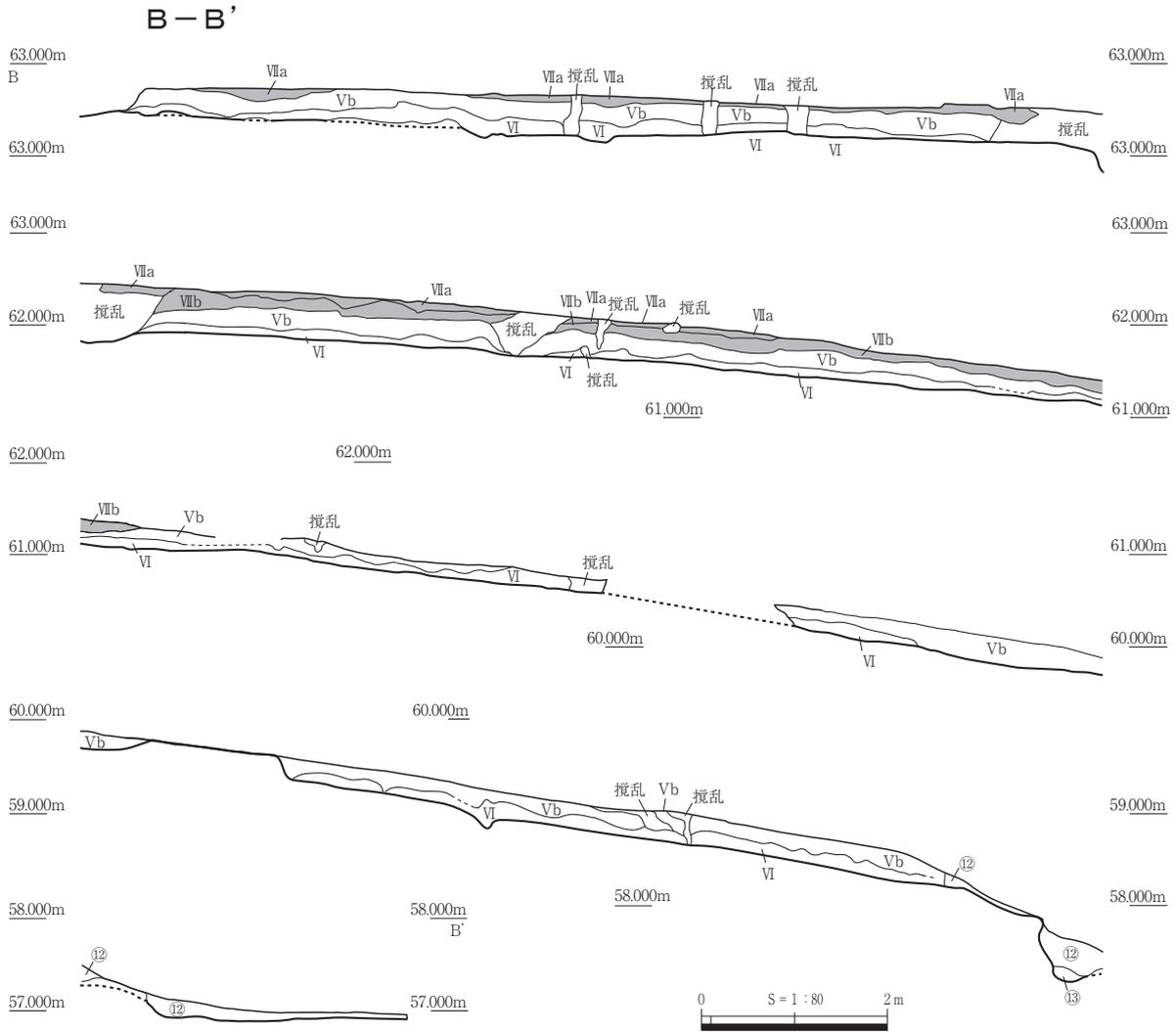


第31図 調査前地形及び土層断面位置図

第4章 倉谷荒田遺跡の調査

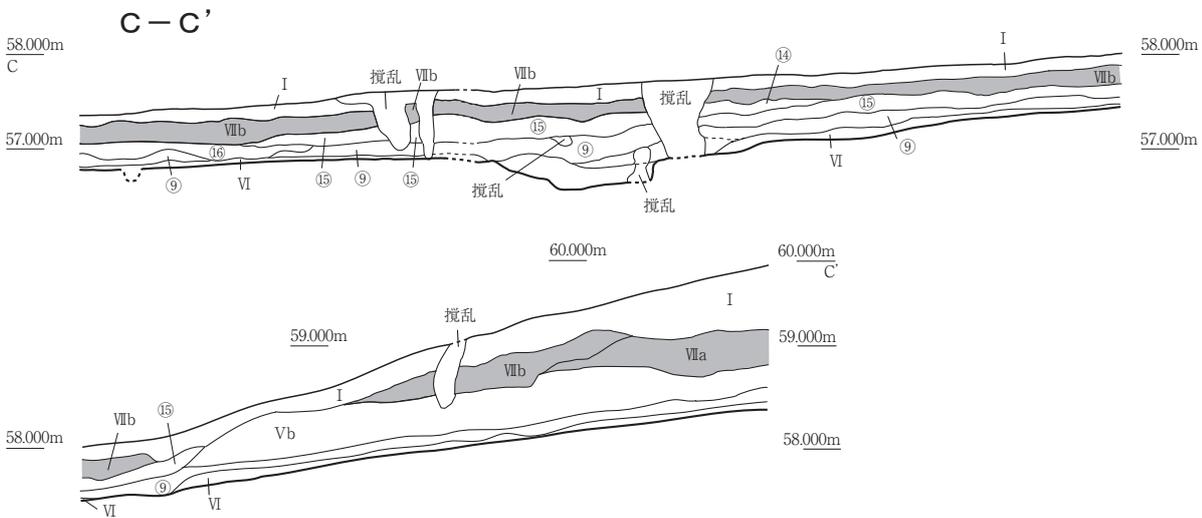


第32図 調査地内土層断面(1)



- ① 灰黄褐色土 (10YR6/2) 粘性なし。もろい。径1~2cmの小石を含む。
- ② 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性なし。ややしまる。径2~3mmの炭化物を含む。
- ③ 褐色土 (10YR4/4) ややしまる。粘性あり。径2~3mmの暗黄褐色土 (10YR6/6) ブロックを含む。
- ④ 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性あり。ややしまる。径5~6cmの褐色土 (10YR4/4) ブロックを含む。
- ⑤ 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性なし。しまり弱い。径2~3mmの砂粒を含む。
- ⑥ 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性なし。ややしまる。径2~3mmの砂粒を含む。
- ⑦ 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし。ややしまる。径2~3mmの砂粒を含む。
- ⑧ 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性なし。ややしまる。

- ⑨ 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性なし。ややしまる。
- ⑩ 灰褐色土 (10YR4/1) 粘性なし。しまりなし。径2~3mmの礫を多く含む。
- ⑪ 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性なし。ややしまる。径2~3mmの礫を含む。
- ⑫ 暗灰褐色土 (10YR3/3) 粘性ややあり。しまり弱い。5mm以下の黄色粒含む。近現代の攪乱土 (セメント瓦出土)
- ⑬ 暗黄褐色土 (10YR7/6) 粘性ややあり。しまり弱い。黒褐色土が斑状に混ざる。攪乱土。
- ⑭ 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性ややあり。しまりあり。
- ⑮ 暗褐色土~黒褐色土 (10YR3/3~3/2) 粘性ややあり。しまりあり。
- ⑯ 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性ややあり。しまりあり。



第33図 調査地内土層断面(2)

## 第4章 倉谷荒田遺跡の調査

Ⅷ層：黒褐色土(10YR2/3)粘性なし。しまりなし。5～6mmの礫を含む。

調査の結果、調査地東側の斜面部裾から谷部へかけ大きく削平されていることが明らかになった(調査地中央B-B'断面図4～5段目)。痕跡から重機を利用したとみられ、本来存在していたはずの遺構・遺物が失われていると推定する。また、谷部は現在の流路よりも西側まで広がっており、暗褐色土・黒褐色土・黒色土が堆積している(⑤～⑨層)。

### 第2節 調査の概要

倉谷荒田遺跡は、平成21年度に遺跡の丘陵頂部を調査しており、今回調査地はそこから下る斜面と谷に、遺跡がどのように展開しているかを明らかにすることが調査の課題であった。ここでは平成21年度の調査も併せて概要を述べる。

#### 平成21年度調査の概要

縄文時代、弥生時代、古墳時代、近世以降の遺構・遺物を確認している。検出した遺構は竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、土坑7基である。

縄文時代の遺構は落とし穴を3基検出しており、底面にピットを有するものと有さないものがあった。

弥生時代の遺構は中期後葉の竪穴住居跡1棟(SI4)を検出した。床面には中央ピットを伴うものの、柱穴をもたない特徴的な形態を示すものである。遺構内からは土器・石器の他に鉄器も出土しており、鉄器導入期の資料である。また、埋土上層から弥生時代後期から古墳時代前期の完形に近い鑄造鉄斧が出土している。

古墳時代の遺構は中期の竪穴住居跡2棟(SI3・SI5)を検出した。SI3は柱穴を伴っていない。床面には被熱により赤色化あるいは硬化した痕跡があり、被熱した台石も出土していることから、小規模な鍛冶が行われていた可能性も考えられる。SI5は平成23年度引き続いて調査を行っている。

#### 平成23年度調査の概要

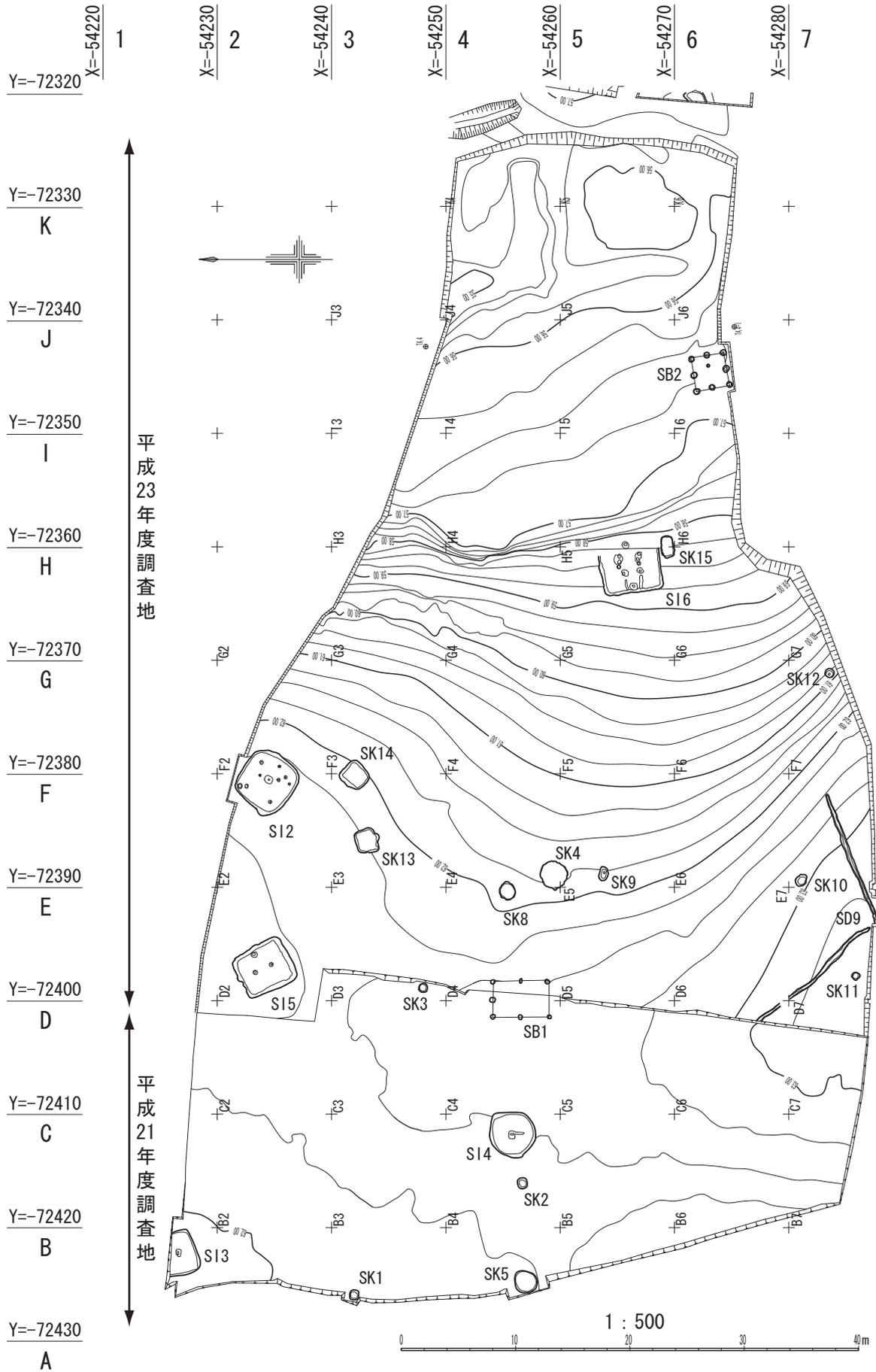
縄文時代、古墳時代を中心とする遺構・遺物を確認した。遺構は縄文時代の土坑6基、古墳時代前期の竪穴住居跡2棟、土坑1基、古墳時代中期の竪穴住居跡1棟、古墳時代後期以前の掘立柱建物跡1棟、時期不明の溝1条、土坑2基を検出した。縄文時代の土坑6基のうち4基は落とし穴と判断しており、底面ピットを有するものと有さないものがあった。古墳時代前期の竪穴住居跡のうち1棟(SI5)は、平成21年度に引き続き調査したものである。平成21年度に確認している弥生時代の遺構は検出していない。

遺構外からはこれらの遺構の時期の他に、中世の土器、陶磁器、鉄滓が出土している。中世の遺物については調査地東側の谷部分から多く出土している。遺物は総量でコンテナ11箱であった。

### 第3節 縄文時代の調査

#### 1 概要

縄文時代の遺構としては、落とし穴4基(SK9～12)、土坑2基(SK4・8)を確認した。主にVb層上面もしくはV層掘り下げ中、またはVI層上面で、黒色～黒褐色土の広がりとして検出した。これ



第34図 倉谷荒田遺跡遺構配置図

## 第4章 倉谷荒田遺跡の調査

らの遺構は黒あるいは黒褐色系の土で埋没しており、いずれも本来はV b層を掘り込んだものと推測できる。放射性炭素年代測定結果(第7節)や埋土の特徴をもって縄文時代の遺構と判断した。遺構外からは縄文土器や石鏃などが出土している。落とし穴が分布していることから、当地は狩猟の場として利用されていたと考えられる。

### 2 土坑

#### SK4 (第35図 P L.11)

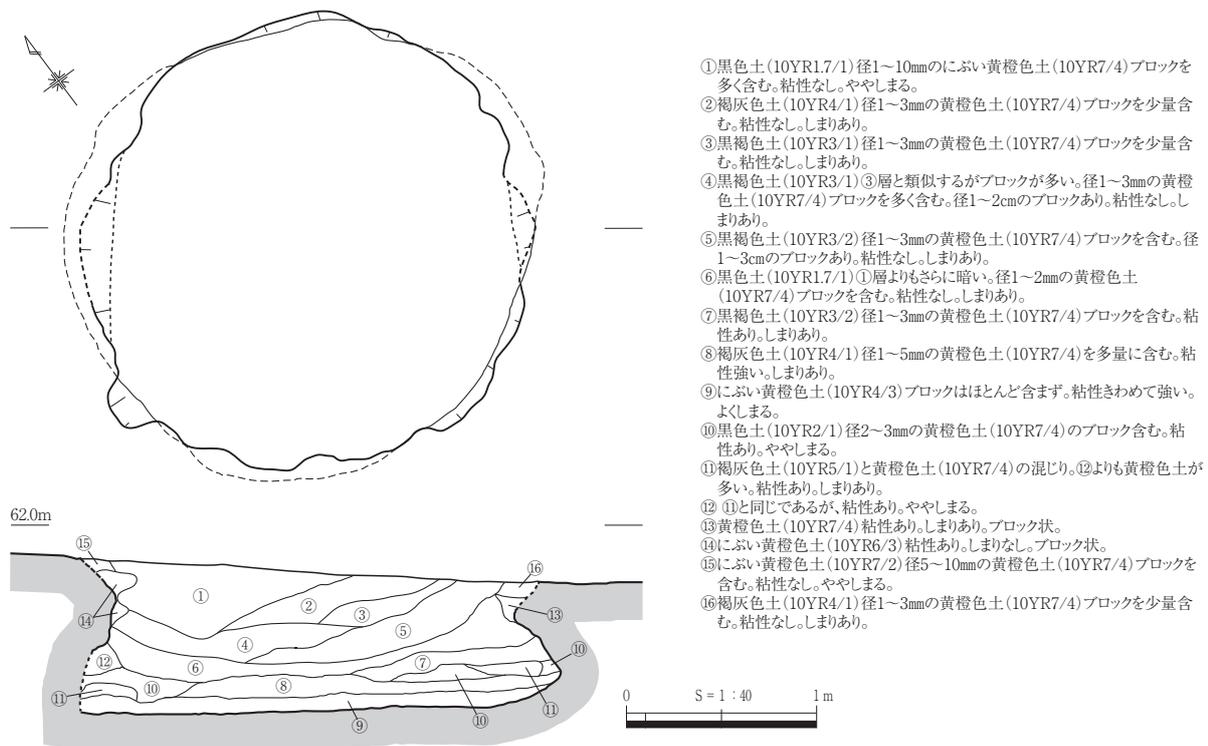
E 4グリッドの南西隅、標高61.2mの東向き緩斜面上に位置する。平成21年度の調査で遺構の一部を調査している。掘り方の一部分をV b層上面で認識できたが、大部分はVI層上面で黒～黒褐色土の円形の広がりとして検出した。

平面形は円形、断面形は浅いフラスコ状を呈する。掘り込みの上面は2.21～2.45mの円形であり、検出面から0.20m付近の深さで最大0.37mすぼまる。底面は径2.30～2.52mで、検出面よりも若干大きい。検出面からの深さは最大で0.81mを測る。埋土は16層に分けられ、上～中層は黒～黒褐色系を主体とする。底面上にはにぶい黄褐色土が広がる。黄褐色土は粘性・しまりが強いものの貼底ではない。

遺物は出土していない。埋土から縄文時代の土坑と考える。遺構の性格は判然としないが、フラスコ状を呈する断面形から、貯蔵穴の可能性も考えられる。

#### SK8 (第36図、P L.11)

D 4グリッド中央東端、標高61.7mの東向き緩斜面上に位置する。地山上面で、黒色土の不整な円形の広がりを検出した。



第35図 SK4

平面形は不整な円形、断面形は長方形を呈する。掘り込みの上面は径1.35~1.59m、検出面からの深さは0.54mを測る。埋土は6層に分けられ、黒~黒褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。埋土から縄文時代の土坑と考える。北西2.5mにSK 4が位置しており、相互の関連性も考えられるが判然せず、遺構の性格は不明である。

SK 9 (第37図、P L .12)

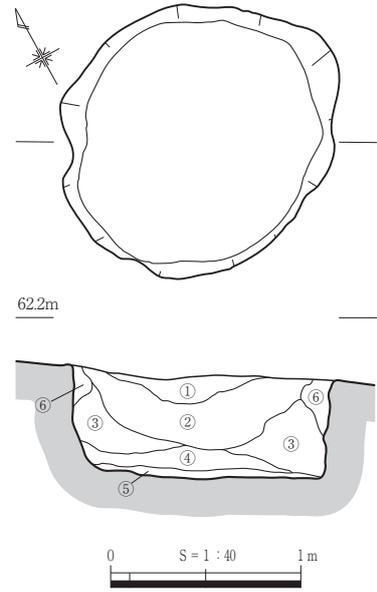
E 5 グリッドの中央西端、標高62.1mの北東向き緩斜面上に位置する。VI層上面で不整な楕円形の黒色土の広がりを検出した。遺構の掘り方の一部についてはV b層上面で確認することができ、本来はこの面から掘り込まれていたと考える。

平面形は不整な楕円形、径は0.75~1.23mを測る。底面のやや東寄りに中央ピットを伴う。検出面からの深さは1.22m、底面ピット底までを含めると1.59mを測る。埋土は7層に分けられ、黒~黒褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。形態的な特徴や埋土から縄文時代の落とし穴と考える。

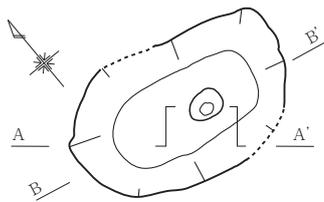
SK10 (第38図、P L .12)

E 7 グリッドの北西隅、標高62.9mの北東向き緩斜面上に位

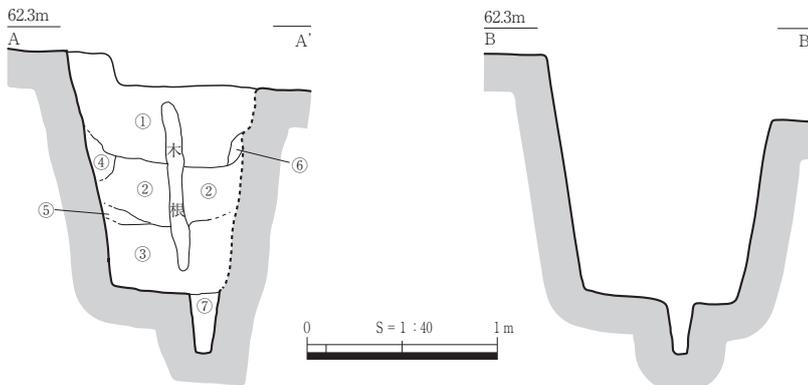


- ①黒色土(10YR2/1)径1~3mmの黄橙色土ブロック(10YR8/8)を含む。粘性なし。しまりあり。
- ②黒色土(10YR1.7/1)径1~3mmの黄橙色土ブロック(10YR8/8)を含む。粘性なし。しまりあり。
- ③黒褐色土(10YR3/1)径1~3mmの黄橙色土ブロック(10YR8/8)を多く含む。粘性なし。よしまる。
- ④にぶい黄橙色(10YR7/4)径1~5mmの黄橙色土ブロック(10YR8/8)を多く含む。粘性あり。よしまる。
- ⑤④と同じ。硬くしまる。
- ⑥褐色土(10YR4/1)径2~3mmの黄橙色土ブロック(10YR8/8)を含む。粘性なし。もろい。

第36図 SK 8



- ①黒色土(10YR1.7/1)1~2mmの白色砂を含む。粘性なし。ややしまる。
- ②黒色土(10YR2/1)白色砂を含まない。①よりやや明るい。明黄褐色土(10YR7/6)ブロック径3~5mmを含む。粘性なし。ややしまる。
- ③黒褐色土(10YR3/1)暗褐色土(10YR7/6)ブロックを含む。粘性なし。ややしまる。
- ④暗褐色土(10YR3/3)明黄褐色土ブロック径2~3cmを多く含む。粘性なし。ややもろい。
- ⑤黒色土(10YR2/1)明黄褐色土ブロック2~3cmを多く含む。粘性なし。もろい。
- ⑥黒色土(10YR1.7/1)粘性なし。もろい。
- ⑦黒褐色土(10YR3/1)明黄褐色土(10YR7/6)ブロック径5~6mmを多量に含む。粘性なし。もろい。



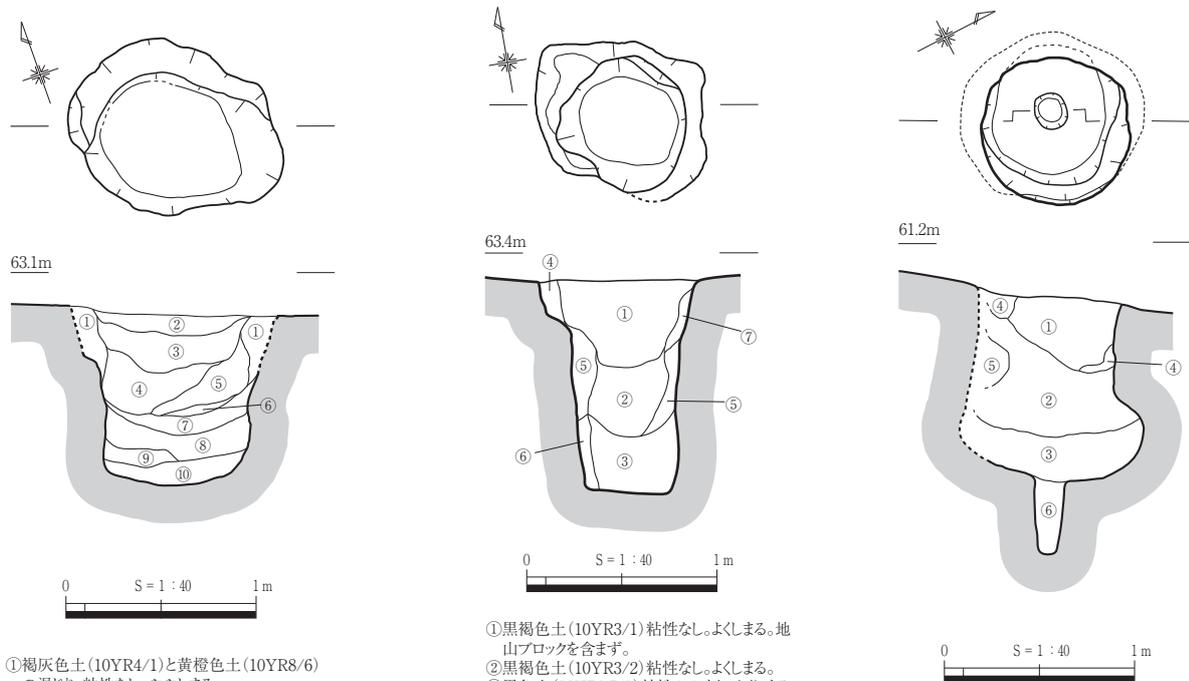
第37図 SK 9

## 第4章 倉谷荒田遺跡の調査

置する。VI層上面で黒色土の不整な円形の広がりを検出した。

平面形は楕円形、径は0.89~1.05m、検出面からの深さは0.93mを測る。埋土は10層に分けられ、黒~黒褐色土を主体としつつ、部分的に灰~黄褐色系の堆積も確認できた。底面ピットはない。

遺物は出土していない。埋土最下層から採取した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施し(第7節、試料No.10)、縄文時代早期前半頃(8790±30yrBP-IAAA-112264)との結果を得た。形態的な特徴や埋土、放射性炭素年代測定結果から縄文時代早期前半の落とし穴と考える。



- ① 褐灰色土(10YR4/1)と黄褐色土(10YR8/6)の混じり。粘性なし。ややしまる。
- ② 黒色土(10YR2/1)径1~5mmの黄褐色土(10YR9/8)ブロックを少量含む。粘性なし。ややしまる。
- ③ 黒褐色土(10YR3/1)径1~5mmの黄褐色土(10YR7/8)ブロックを含む。径1cmのブロックあり。粘性なし。しまる。
- ④ 黒色土(10YR1.7/1)①より暗い。径1~2mmの黄褐色土ブロックを含む。粘性なし。しまる。
- ⑤ 灰黄褐色土(10YR4/2)径5~10mmの黄褐色土ブロックを少量含む。粘性なし。しまる。
- ⑥ 灰黄褐色土(10YR5/2) ブロックを含まず。粘性なし。しまる。
- ⑦ 浅黄色土(2.5Y7/6)ブロック含まず。粘性なし。しまる。
- ⑧ 浅黄色土(5Y7/4)⑥よりさらに黄色味が強い。粘性なし。しまる。
- ⑨ にぶい黄褐色土(10YR7/3)粘性なし。よくしまる。ブロックを含まないローム状の土。
- ⑩ 黒褐色土(10YR2/2)ブロックを含まず。粘性なし。よくしまる。

第38図 SK10

- ① 黒褐色土(10YR3/1)粘性なし。よくしまる。地山ブロックを含まず。
- ② 黒褐色土(10YR3/2)粘性なし。よくしまる。
- ③ 黒色土(10YR1.7/1)粘性ややあり。よくしまる。
- ④ 灰黄褐色土(10YR4/2)粘性なし。よくしまる。
- ⑤ 褐灰色土(10YR4/1)と②の混じり。粘性あり。よくしまる。
- ⑥ 褐灰色土(10YR4/1)と③の混じり。粘性あり。よくしまる。
- ⑦ 灰黄褐色土(10YR3/2)粘性なし。よくしまる。

第39図 SK11

- ① 黒褐色土(10YR3/1)径2~3mmの明黄褐色土(10YR7/6)を含む。径1~2cmの礫を含む。粘性なし。ややしまる。
- ② 黒色土(10YR1.7/1)①より黒味が強い。ブロックほとんどなし。径1~2cmの礫を含む。粘性なし。ややしまる。
- ③ 黒色土(10YR1.7/1)径2~3mmの明黄褐色土(10YR7/6)粒を多く含む。粘性なし。ややしまる。
- ④ 明黄褐色土(10YR7/6)径2~3mmのブロック。黒褐色土(10YR3/1)が混じる。粘性なし。しまりなし。
- ⑤ 明黄褐色土(10YR7/6)と黒色土(10YR1.7/1)が混じる。径2~3mmの明るいブロック。粘性なし。しまりなし。

第40図 SK12

表13 縄文時代土坑一覧

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	底面規模(cm)	底面P規模(cm)	深さ(cm)	深さ計(cm)	性格
S K 4	円形	221~245	81	230~252	-	-	-	貯蔵穴
S K 8	円形	135~159	54	125~137	-	-	-	土坑
S K 9	楕円形	75~123	122	41~82	15~19	31	159	落とし穴
S K 10	楕円形	89~115	93	60~77	無	-	96	落とし穴
S K 11	円形	73~105	114	44~49	無	-	114	落とし穴
S K 12	円形	75~80	97	89~98	17~19	39	136	落とし穴

SK11(第39図、P L .12)

D7グリッドの南西、北に下る狭い丘陵のほぼ中央に位置する。VI層上面で黒褐色土の不整な円形の広がりを検出した。

平面形は不整な円形、径は0.73~1.05m、検出面からの深さは1.14mを測る。埋土は7層に分けられ、黒~黒褐色土を主体とする。底面ピットはない。

遺物は出土していない。形態的な特徴や埋土から縄文時代の落とし穴と考える。

SK12(第40図、P L .12)

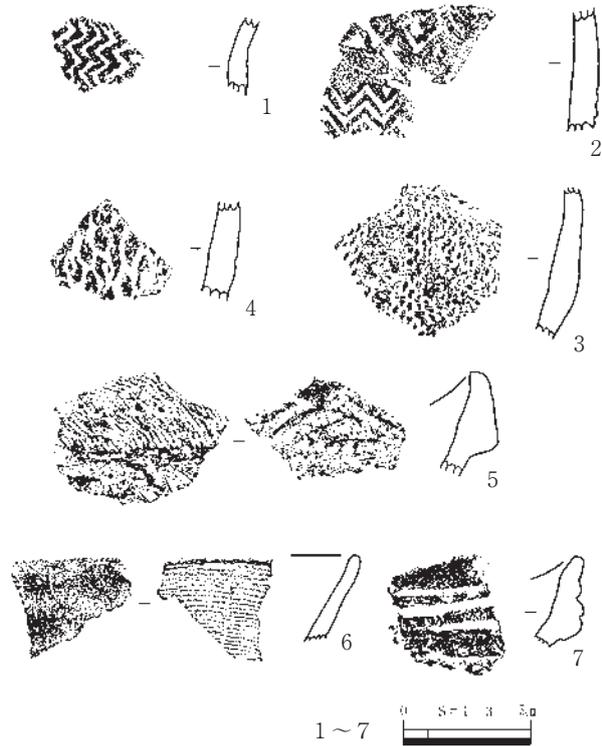
F7グリッドの中央東端、標高61.0mの北東に向かう斜面に位置する。V b層掘削中に確認し、黒褐色土の円形の広がりを検出した。

平面形は円形、断面形は底部にかけて袋状に膨らむ。底面ほぼ中央に底面ピットを伴う。径は0.75~0.80mを測る。検出面からの深さは0.97m、底面ピット底まで含めると1.36mを測る。埋土は底面ピットも含めて6層に分けられ、黒~黒褐色土を主体とする。

遺物は出土していない。底面ピットから採取した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施し(第7節、試料11)、縄文時代前期半ば(5140±30yrBP-IAAA-112265)との結果を得た。形態的な特徴や埋土、放射性炭素年代測定結果から縄文時代前期中葉の落とし穴と考える。

3 遺構外出土遺物(第41図、P L .21)

遺構外から、土器(1~7)・石器(S1・S2)が出土している。1~4は押型文土器、5・7は波状口縁部、6は粗製土器、S1は黒曜石製の平基式石鏃、S2はサヌカイト製の凹基式石鏃である。1は縦位、2は横位の山形文が施文されている。3・4はポジティブな楕円文で、3は4よりやや粗大な楕円文である。1~4は斜面地周辺の黒褐色土及び黒色土、S2はG5グリッドの暗褐色土中から出土した。他は谷部の自然流路にともなう黒色土中からの出土である。

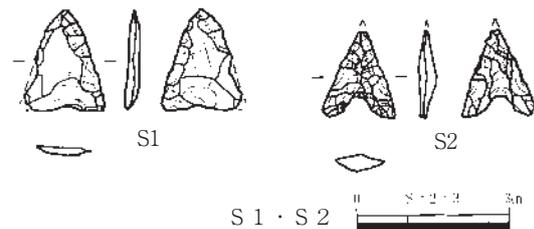


第4節 弥生時代から古墳時代の調査

1 概要

弥生から古墳時代の遺構としては、古墳時代前期の竪穴住居跡2棟(SI2・SI5)、土坑1基(SK13)、古墳時代中期の竪穴住居跡1棟(SI6)、古墳時代後期以前の掘立柱建物跡1棟(SB2)を検出した。

平成21年度調査で確認したSI3を含め、古



第41図 縄文時代遺構外出土遺物

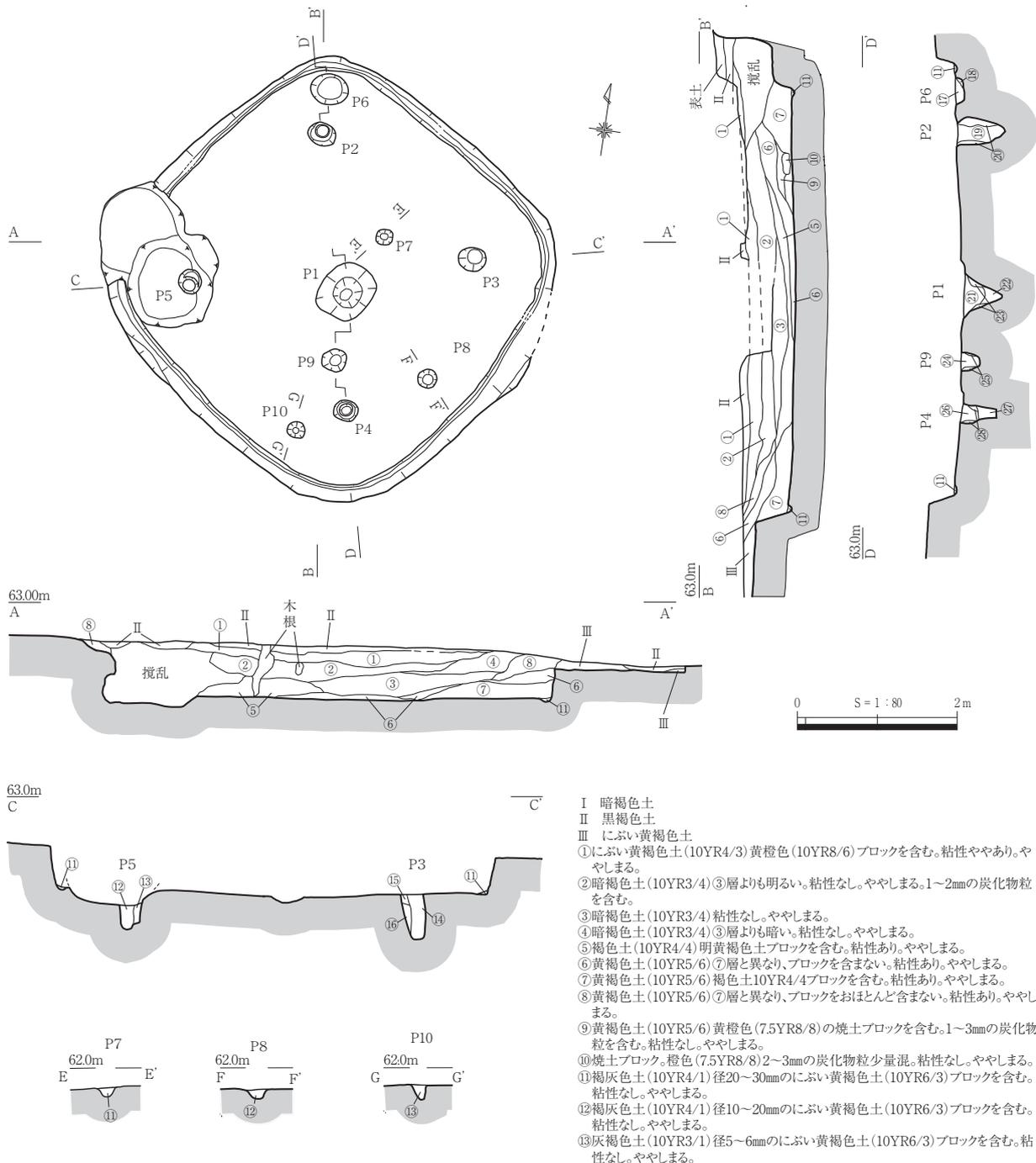
## 第4章 倉谷荒田遺跡の調査

墳時代前期に丘陵尾根上に竪穴住居跡が分布しており、古墳時代中期以降には谷付近の低地に分布が移っている。古墳時代前期の竪穴住居跡は調査地北側に分布が偏っており、集落の中心は調査地よりさらに北側に広がっていたものと推測する。なお、今年度の調査地では新たな弥生時代の遺構は検出しておらず、平成21年度に確認している弥生時代の集落は今回の調査地である東向き斜面側には広がっていなかったと考える。

### 2 竪穴住居跡

SI2 (第42～44図、P L.13・14・21・22・32)

E 2～F 2グリッド、標高62.6mの北に向かう狭い丘陵の東側に位置する。西へ約8.5mにはSI5、



第42図 SI2

南西へ約5.3mにはSK13がある。平成20年度の確認調査で遺構の一部を検出し掘り下げを行った。平面的にはVI層上面で黒褐色土及びにぶい黄褐色土の不整な方形の広がりとして検出した。一部でVb層上面からの掘り込みを確認しており、本来はこの面から掘り込まれた遺構と考える。

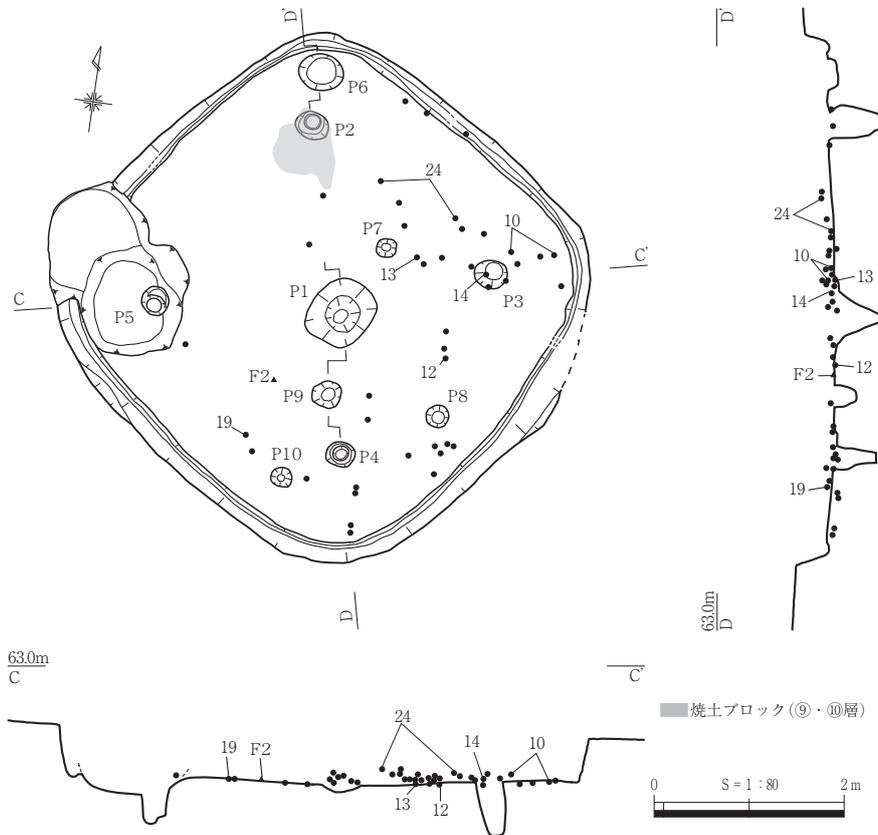
平面形は隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。規模は長軸4.94m、短軸4.82m、検出面からの深さは0.69mで、床面積は17.9㎡である。遺構の北隅と西隅付近に攪乱を受けており、遺構の一部は破壊されていた。床面までの埋土は10層に分層でき、ロームブロックを含む暗褐色から黄褐色を主体とした土が堆積している。埋土のうち、焼土ブロック⑩層及び焼土ブロック及び炭化物を含む⑨層は、調査時に明瞭に検出できた。これらの層は床面とは接しておらず、住居廃絶後に堆積したと考える。床面には貼床は施されていない。中央ピットは長軸0.71m、短軸0.63m、深さは床面から0.50mを測る。中央ピットの断面形は尖底状を呈し、これに伴う周堤は確認していない。

主柱穴は4つ(P2～P5)で、いずれも床面の四隅付近に位置する。柱間は、P2～P5が2.55mであるが、他は2.50mで揃っている。主柱穴の規模は、直径0.29～0.38m、深さは上部が攪乱されているP5を除き、0.50～0.61mである。柱の立て替えは行われていない。住居壁際には壁溝があり、西側の一部で攪乱されている箇所を除き全周する。壁溝は断面U字状で幅5～13cm、最大の深さは6.1cmを測る。

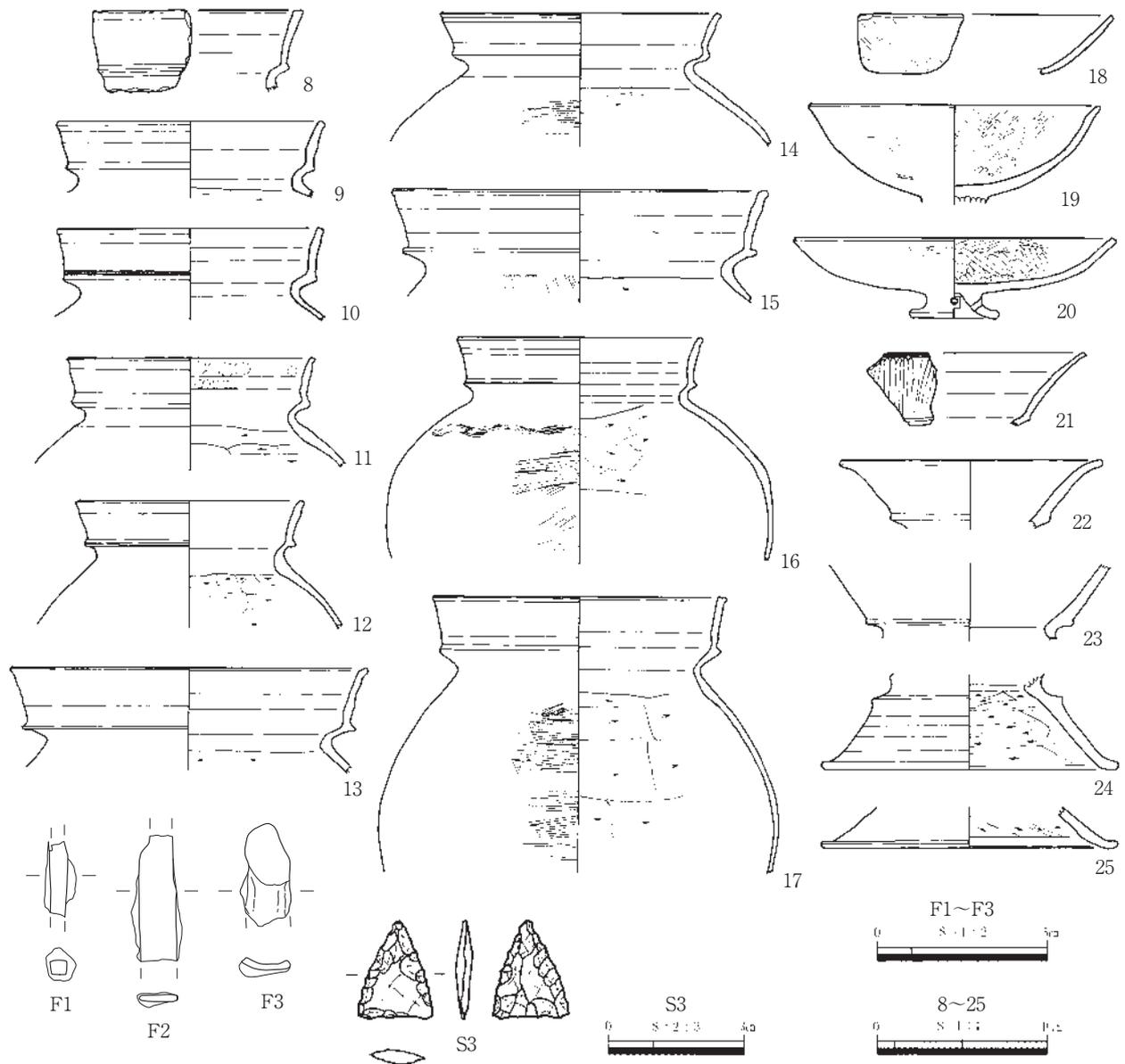
出土遺物は埋土最下層の⑦層を中心に住居の東側から多く出土

表14 SI2ピット一覧

番号	径 (m)	深 (m)	備考
P 1	0.63～0.71	0.50	中央ピット
P 2	0.29～0.35	0.61	主柱穴
P 3	0.30～0.38	0.57	主柱穴
P 4	0.29～0.33	0.42	主柱穴
P 5	0.30	0.31	主柱穴
P 6	0.39～0.49	0.11	-
P 7	0.21～0.22	0.11	-
P 8	0.24	0.10	-
P 9	0.29～0.31	0.23	-
P 10	0.21～0.23	0.21	-



第43図 SI2遺物出土状況



第44図 SI2出土遺物

した。土師器(8~25)、石器(S3)、鉄器(F1~3)を図化した。8~17は甕、18・19は高坏、20は低脚坏、21~25は器台である。F1は棒状、F2・3は板状を呈しており、用途は不明である。S3は黒曜石製の無茎式石鏃である。

出土遺物の時期はいずれも古墳時代前期中葉(天神川Ⅲ期)の範疇に収まっており、住居の廃絶時期もこの時期と考える。

**SI5**(第45~48図、P.L.15・23・24・31)

D2グリッド中央やや西、北に延びる狭い丘陵のほぼ中央、標高62.7m付近の平坦地に位置する。東へ約8.5mにSI2がある。遺構の西側半分程度は平成21年度の調査範囲にあり、すでに床面まで調査を行っている。Vb層上面で、Vb層よりやや色調の薄い黒褐色土の広がりを検出した。

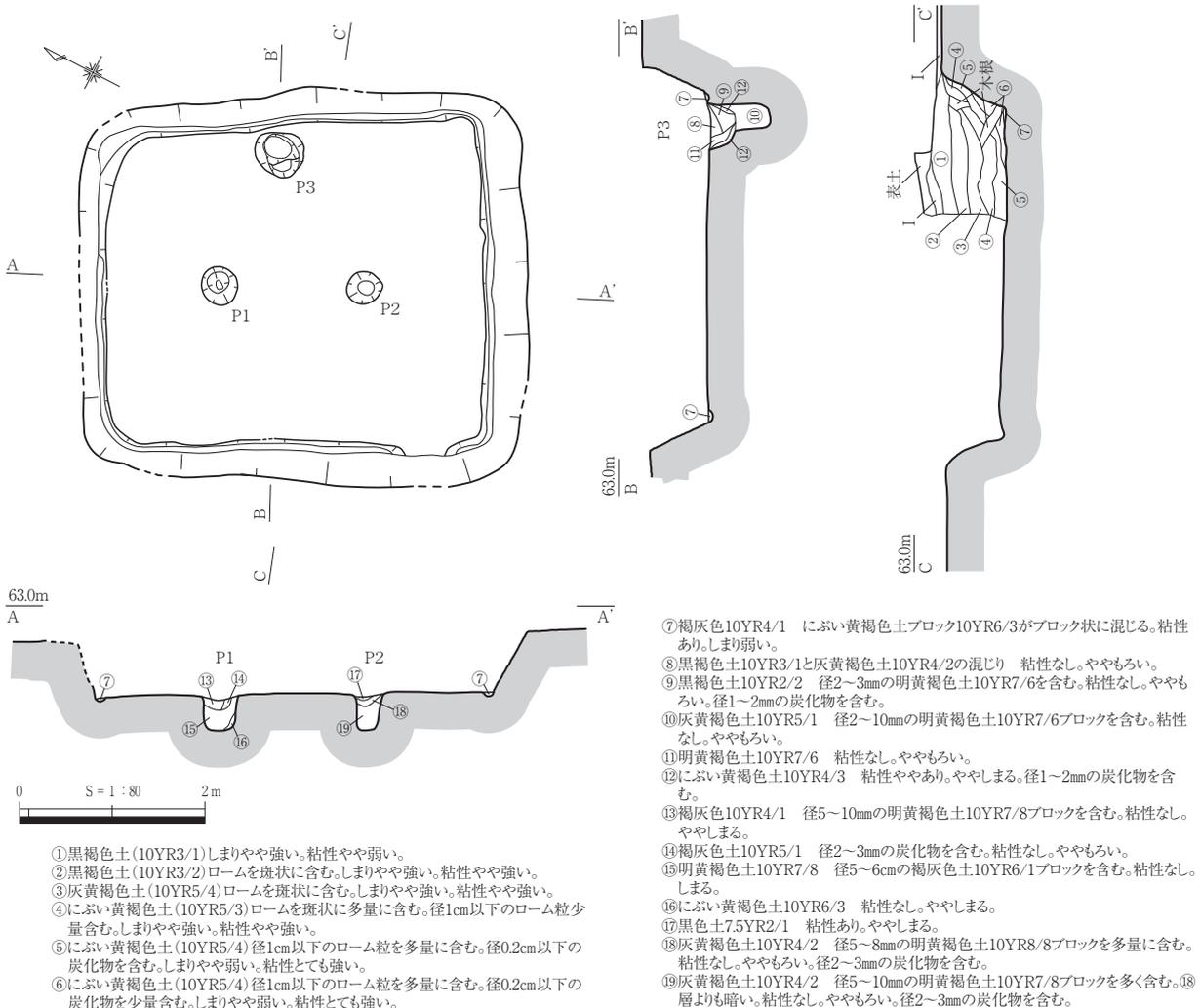
平面形は方形を呈する竪穴住居跡である。規模は長軸4.83m、短軸4.28m、検出面からの深さは0.60mで、床面積は13.8㎡である。埋土は19層に分層でき、上層は黒褐色土、下層はにぶい黄褐~黄橙色

土を主体とする。床面には貼床は施されていない。住居壁際には幅5～12cm、深さ3～8cmで断面U字状の壁溝が全周する。

主柱穴は2つで、住居の東西軸中央に約1.6m間隔で位置する。規模は、径0.35～0.42m、深さは0.41～0.43mで、ほぼ同規模である。柱の建て替えは行われていない。また、東壁付近にP3が位置する。径0.48m～0.53m、床面からの深さは0.68mで主柱穴よりもやや内側に傾いている。埋土⑩層は上層に切られており、P3は再掘削が行われている可能性もある。P3の機能は判然としないが、被熱痕跡や炭化物などは埋土や周囲にみられず、補助柱もしくは壁際に設えられた構造物の痕跡と考える。

なお平成21年度調査において、主柱穴間の住居ほぼ中央の床面上では炭化物層を検出しており、炉跡の可能性を指摘している。今回調査の結果、焼土面や被熱により硬化した状況は確認していない。下部構造も存在していないことから、恒常的な炉としての機能はなかったと考える。

埋土中からは、土器(26～40)、鉄器(F4～F15)、石器(S4・S5)が出土している。平成21年度調査で出土した既報告遺物についてもここでは併せて掲載した。土器には土師器(26～35)と弥生土器(36～40)があり、土師器のうち、26～31は甕、32は高坏、33は器台、34は低脚坏、35は小型丸底壺である。また、弥生土器のうち36・37は高坏、38は壺又は甕の底部片、39・40は壺である。S4は磨石、S5は台石である。F4は鉋、F5は袋状鉄斧、F6は無茎鉄鏃、F9は刀子か。F7・F8・F10は板状不



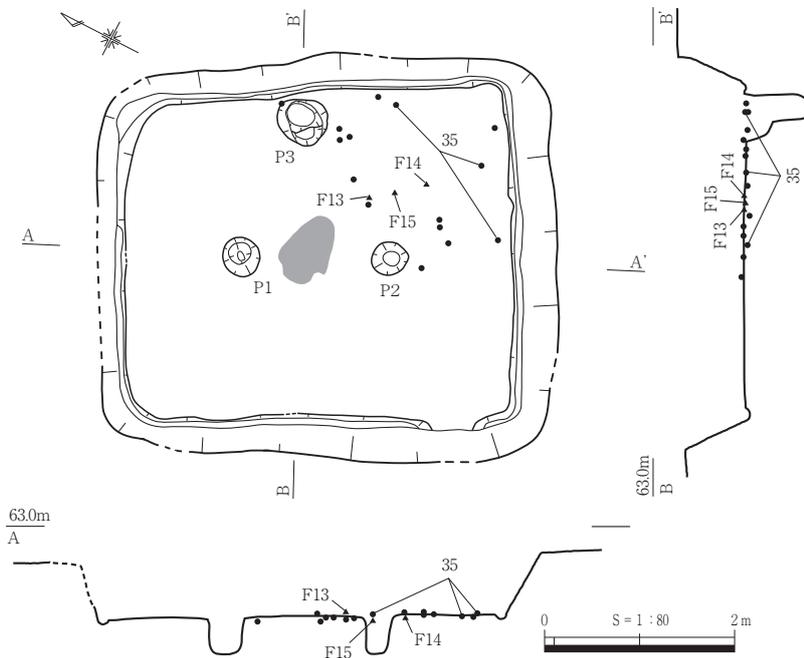
第45図 S15

第4章 倉谷荒田遺跡の調査

明品、F11～F15は棒状不明品である。

これらのうち床面に接する⑤層からは32・34・36～38・S4・F5～F10・F12～F15が出土しており、③・④層からは25・27～31・39・S5・F4・F11、さらに上層である①・②層から26・35が出土した。

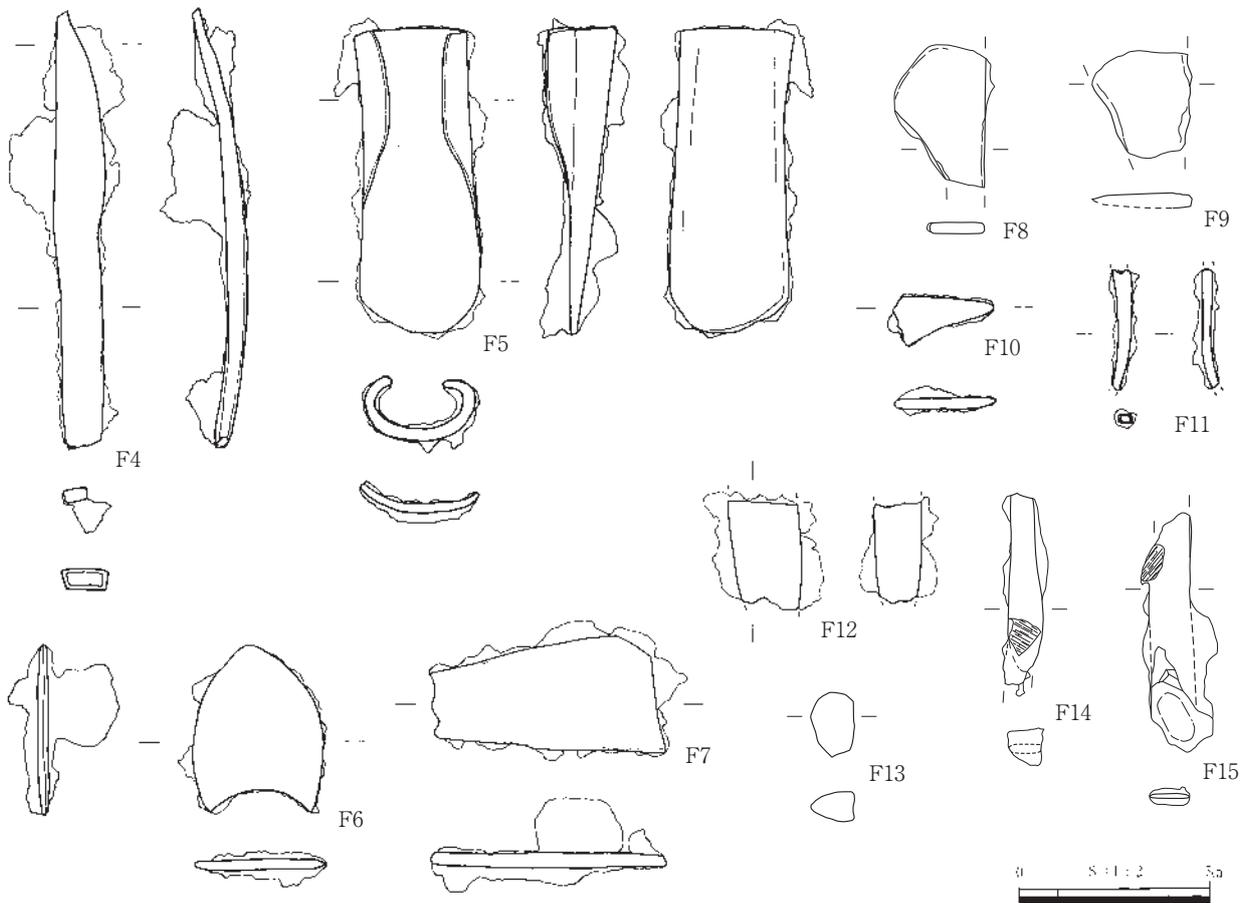
遺構の時期は、埋土中層出土の30が古墳時代前期後葉(天神川IV期)に下るものの、床面直上出土土器や他の土器は古墳時代前期中葉(天神川III期)であることから、住居の廃絶時期もこの時期と考える。



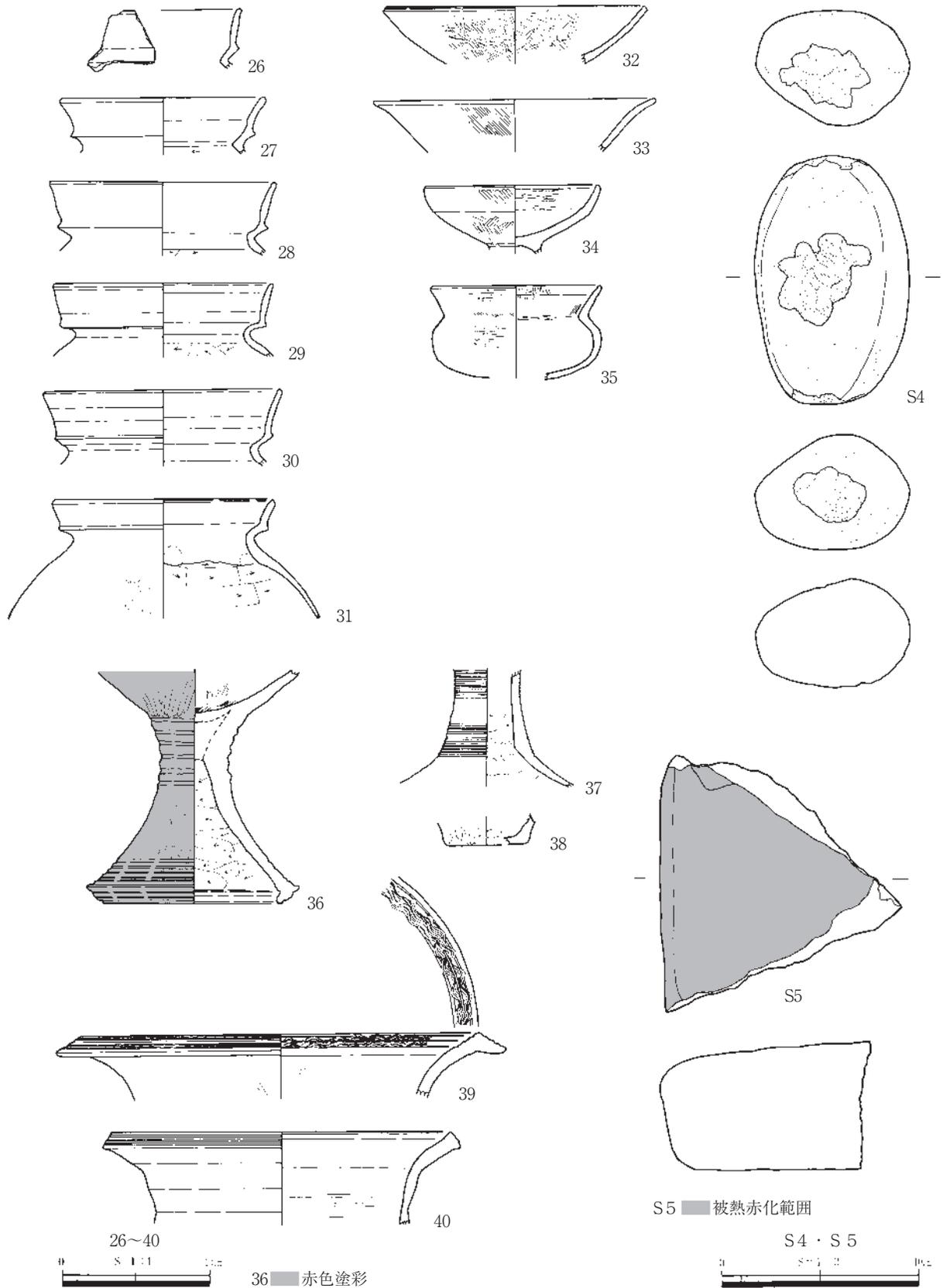
第46図 SI5 遺物出土状況

表15 SI5ピット一覧

番号	径 (m)	深 (m)
P 1	0.39～0.42	0.41
P 2	0.35～0.41	0.43
P 3	0.48～0.53	0.68



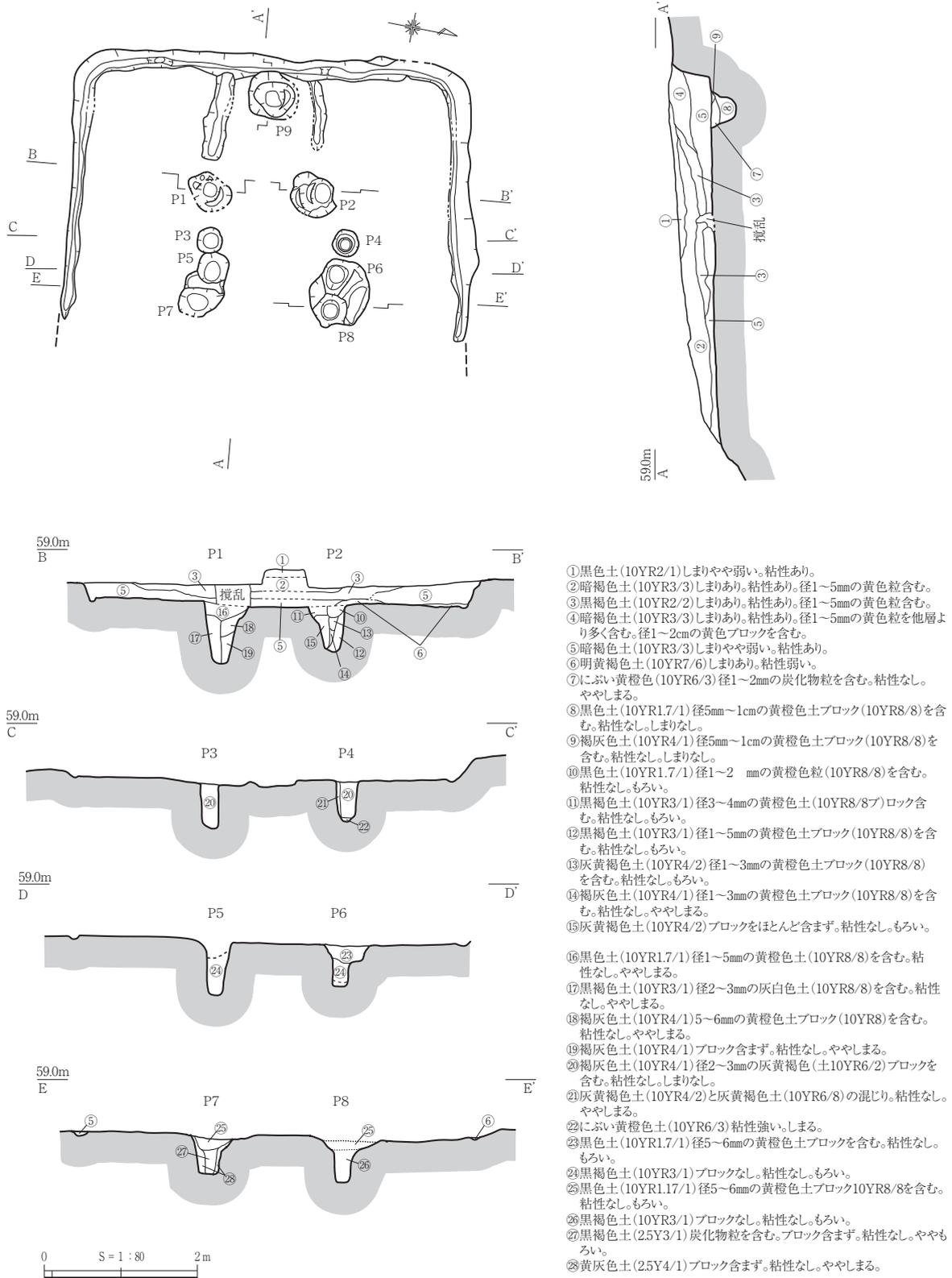
第47図 SI5 出土遺物(1)



第48図 SI5出土遺物(2)

SI6 (第49～52図、P L .16・17・24・25・32)

G5グリッドの東側、東向きの丘陵の谷近く、標高58.8m付近に位置する。周辺には同時期の遺構は確認していない。V b層を掘削中に確認し、不整な長方形の暗褐色～黒褐色土の広がりを検出した。平面形が方形を呈する竪穴住居跡で、住居の北側を中心に木の根状の攪乱坑が多数掘り込まれ、床面



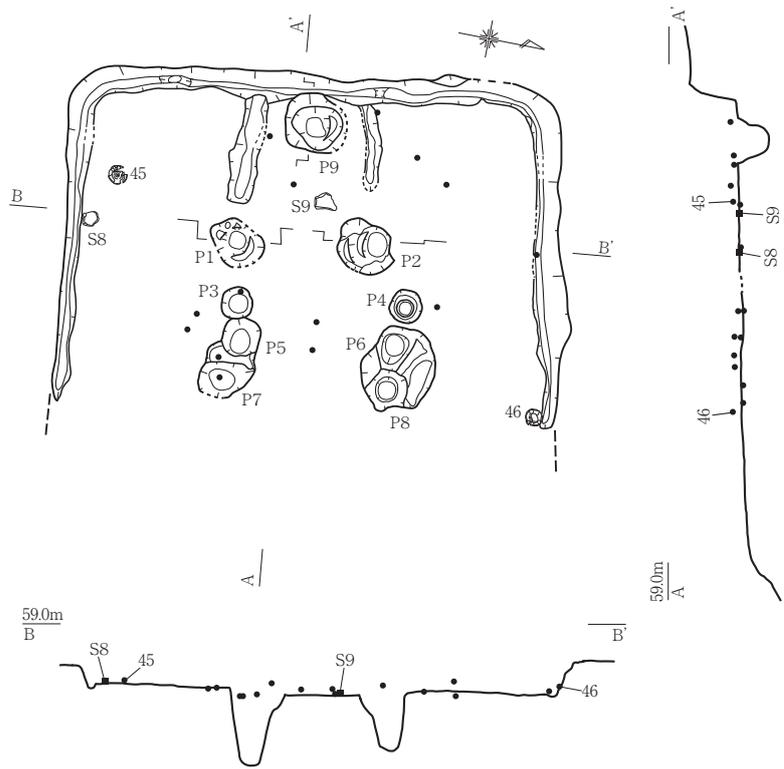
第49図 SI6

も凹凸が顕著であった。また、住居東側際が後世に大きく攪乱されており、遺構の東辺を確認することはできなかった。

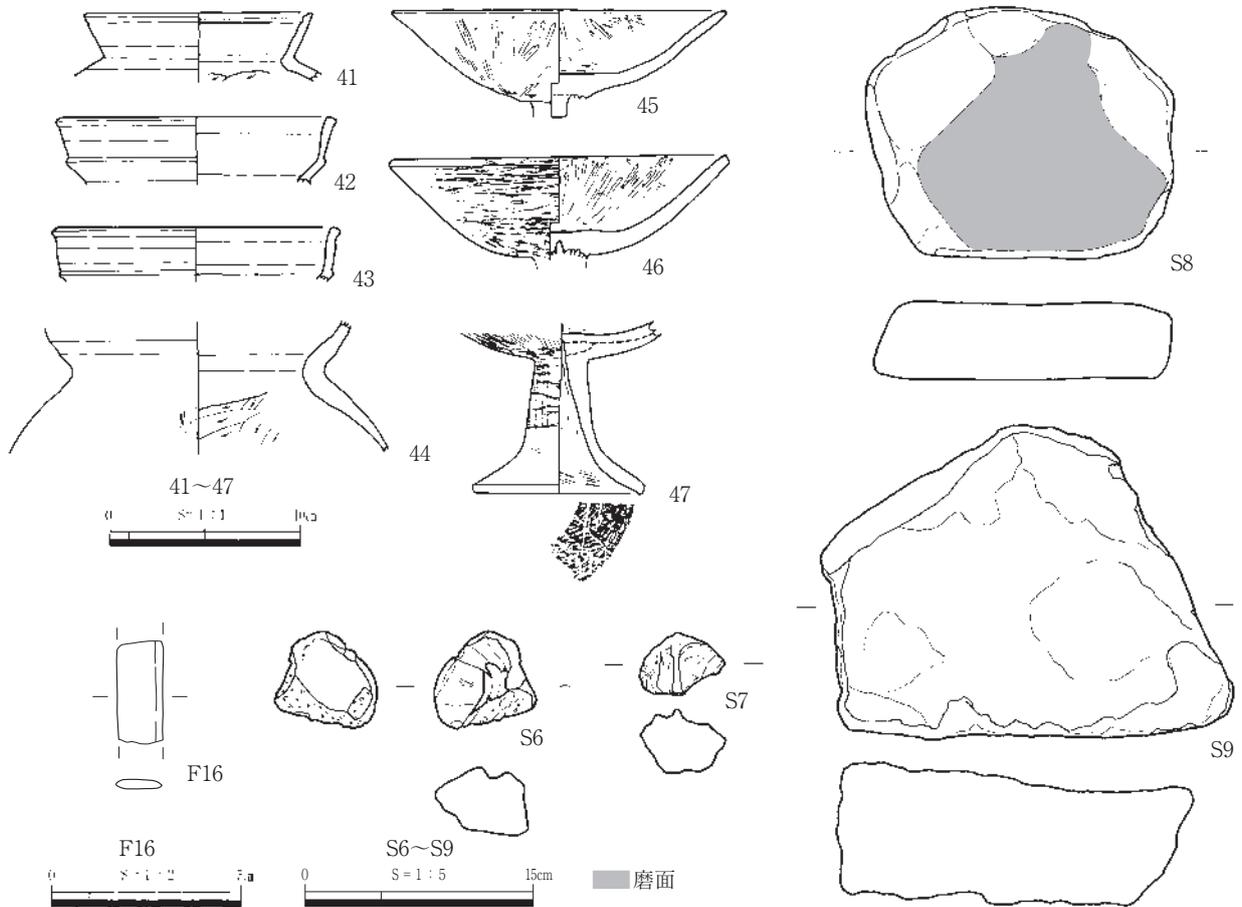
規模は、南北5.32m、東西3.60m以上、検出面からの深さは最大で0.43m、床面積は16.2㎡である。埋土は28層に分層でき、暗～黒褐色土

表16 SI6ピット一覧

番号	径 (m)	深 (m)	備考
P 1	0.33	0.59	-
P 2	0.35~0.37	0.58	-
P 3	0.39~0.41	0.70	-
P 4	0.38~0.49	0.54	-
P 5	0.48~0.61	0.80	-
P 6	0.57~0.67	0.62	-
P 7	0.40~0.61	0.50	-
P 8	0.40~0.44	0.59	-
P 9	0.60	0.33	特殊ピット



第50図 SI6遺物出土状況



第51図 SI6出土遺物

#### 第4章 倉谷荒田遺跡の調査

を主体とする。床面に貼床は施されず、壁溝も東側については検出できなかった。検出できた壁溝は幅4～17cm、深さは最大で8.8cmを測る。

床面中央に8本の支柱穴(P1～P8)を確認した。東西方向に2列にピットが並んでおり、南北で対になるものとする。また、西壁際にP9を検出した。P9を挟んで南北に東西方向に溝を伴う。この溝は幅15～25cm、床面からの深さ9.6cmで、長さは北側が0.81m、南側が1.17mを測る。P9は掘り方の上面がやや角張る不整な円形状を呈し、断面形はやや東に内傾する。埋土には炭化物を含んでいる。

P5とP7、P6とP8は検出時にはそれぞれ一つのピットとして検出し、掘り下げの結果、上部の浅い掘り込み以下は異なるそれぞれ2基ずつのピットであった。また、P1・2・5～8の埋土は黒色もしくは黒褐色であるのに対し、P3・P4は褐灰色と異なっており、前者が4本柱、後者が2本柱

として住居が構築されていたことが推定できる。P1・2・5～8のピットの肩が乱れ浅い窪みとなっていることなどから、P1・2・5～8が先行し、後にP3・P4へと変遷したと考える。P5・P6と、P7・P8の前後関係は埋土の切り合いからは判然としないが、P1・P2との位置関係からP1・P2・P7・P8が当初の支柱穴であったと推定する。P5・P6はP7・P8に代わって設けられたか、もしくはP7・P8に添えて設けられたものであろう。P9とその南北の溝は、第2段階以前の存否について確定できない。

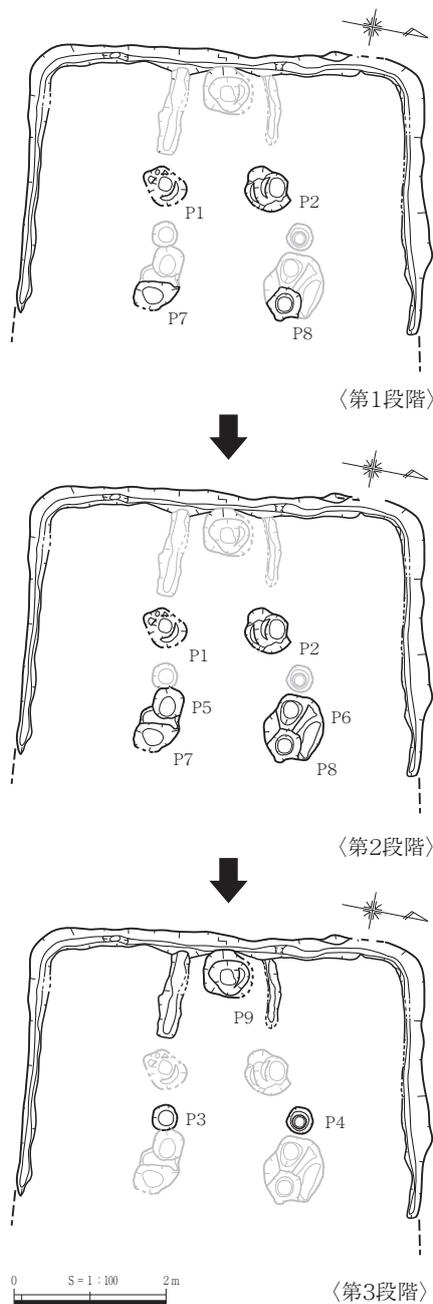
以上のように、SI6は計3段階の変遷があったと整理できる。支柱穴は、第1段階で4本(P1・P2・P7・P8)、第2段階で4ないし6本(P1・P2・P5～P8)、第3段階で2本(P3・P4)である。以下、古い順に「第1段階」「第2段階」「第3段階」として各段階について述べる。

##### [第1段階]

P1・P2・P7・P8の4本を支柱穴とする。径0.4～0.67m、床面からの深さは0.5～0.8mでややばらつきがある。掘り方はいずれも上面が乱れており、主体となる埋土はいずれも黒色土である。柱穴間距離は、P7-P8間が1.7m、ほかはいずれも1.5mである。

##### [第2段階]

P1・P2・P5～P8を支柱穴とする。P5・P6は第1段階の柱に加えて追加されたか、P7・P8を代替するものと推定する。P5・P6は径0.34～0.49m、検出面からの深さは0.54～0.70とやや異なるが、埋土はいずれも黒褐色土である。上面を黒色土で覆われている。柱穴間距離は、1.65mを測る。



第52図 SI6変遷図

[第3段階]

P3・P4を主柱穴とする。P3は第2段階のP5と接しているものの切り合い関係はない。径0.33～0.37、検出面からの深さは0.58～0.59mで、ほぼ近似する。掘り方は円筒状で、埋土も褐灰色土である。柱穴間距離は1.78mを測る。

遺物としては、土師器(41～47)、石器・軽石(S6～S9)、鉄器(F16)が出土している。41～44は甕、45～47は高坏、S6・S7は軽石、S8・S9は台石、F16は鉈である。

出土した土器は、いずれも古墳時代中期前葉(天神川V期)であることから、住居の廃絶時期もこの時期と考える。

表17 竪穴住居跡一覧

( )は残存値

遺構名・段階	形状	規模(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	柱数	柱間(m)	柱穴以外のピット	壁溝	床面直上遺物	時期
SI2	隅丸方形	4.82×4.94	17.9	4本	2.50～2.55	中央ピット	有	有	古墳時代前期中葉
SI5	方形	4.28×4.83	13.8	2本	1.6	壁際ピット	有	有	古墳時代前期中葉
SI6 第1段階	-	-	-	4本	1.5～1.7	不明	不明	無	不明
SI6 第2段階	-	-	-	4～6本	1.65	不明	不明	無	不明
SI6 第3段階	方形	3.2×5.32以上	(16.2)	2本	1.78	溝を伴う壁際ピット	有	有	古墳時代前期中葉

3 掘立柱建物跡

SB1 (第53図)

C4とD4グリッドの境、北に下る狭い丘陵のやや東側に位置する。平成21年度の調査でP1～P6を調査し、桁行2間×梁行2間の掘立柱建物を想定していた。今回の調査で新たにP7をVI層上面で検出した。なお、P3に対応する南側の柱穴は確認していない。

桁行2間(4.90m)、梁行1～2間(3.06m)の南北に主軸をもつ掘立柱建物で、主軸はN-2°-W、平面積は14.99m<sup>2</sup>である。柱穴の掘り方の規模は直径0.33～0.50m、検出面からの深さは最大で0.57mを測る。

平成21年度の調査で、P6から弥生土器小片が出土している。平成21年度調査でV層から掘り込まれていることを確認しており、古墳時代以前の建物跡と考える。

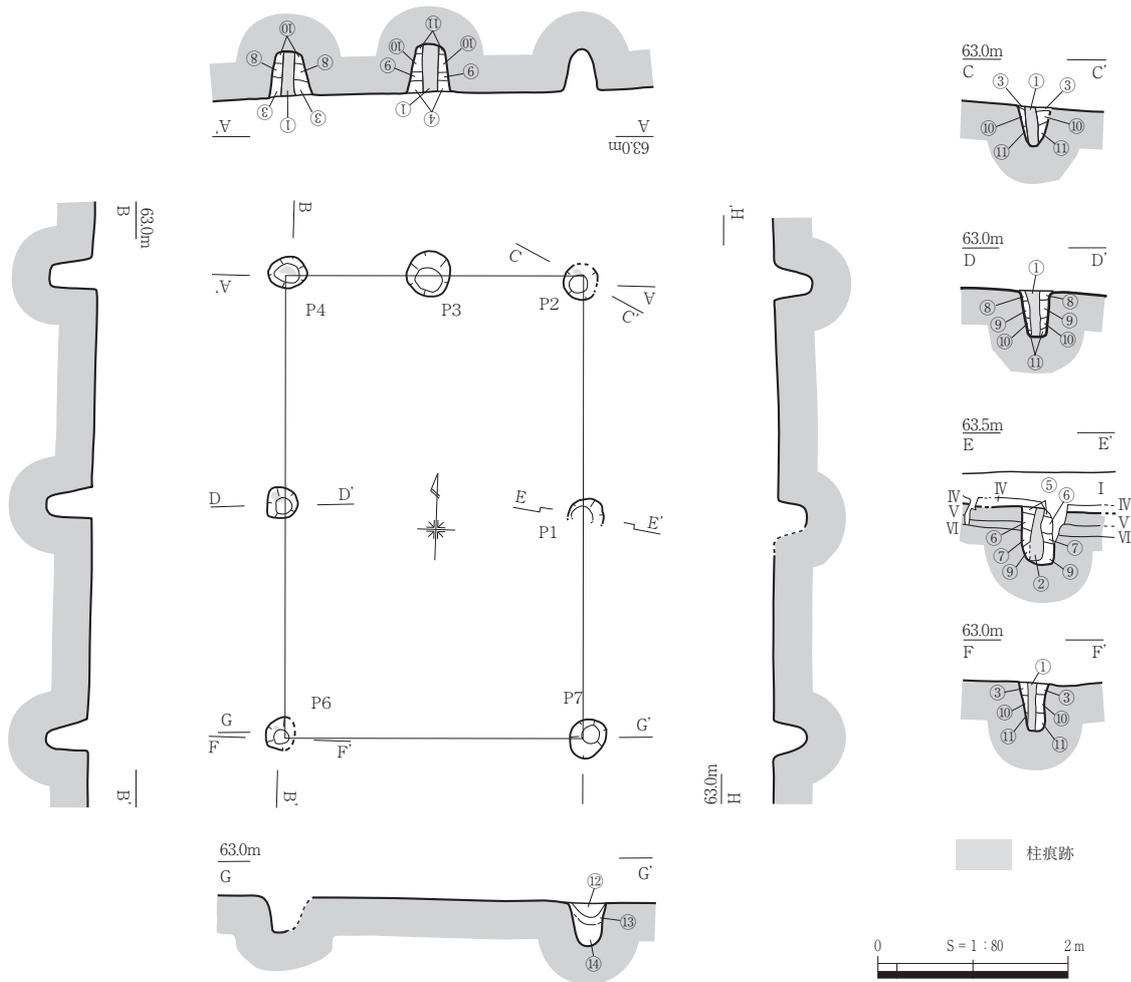
SB2 (第54図、P L .18)

I6グリッドほぼ中央、標高56.7～56.8mの、北東に向かう谷地形の緩斜面に位置する。VI層上面で検出した。

桁行2間(南北:2.88m)、梁行2間(東西:2.85m)のほぼ正方形の掘立柱建物跡である。主軸はN-11°-W、平面積は8.21m<sup>2</sup>を測る。柱穴の掘り方の規模はP9を除き直径0.47～0.61m、深さは最大で0.49mを測る。いずれの柱穴においても土層断面で柱痕は確認していないが、掘り方の底面に柱が据えられた痕跡を確認した。P9は直径0.25m、深さ0.33mと他に比べて小さいことから補助的な柱と考える。

遺物は出土していない。図化できないほどの小片だが、覆土から古墳時代後期の須恵器甕片が出土

第4章 倉谷荒田遺跡の調査



- ① 黒褐色土 (10YR3/1) 径0.2cm以下炭化物含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
- ② 黒褐色土 (10YR3/1) 径0.5cm以下のローム粒少量含む。径0.5cm以下の炭化物少量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
- ③ 黒褐色土 (10YR3/2) 径0.5cm以下のローム粒含む。径0.5cm以下の炭化物少量含む。しまり強い。粘性やや強い。
- ④ 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒を斑状に多量含む。しまりとても強い。粘性やや強い。
- ⑤ 黒褐色土 (10YR3/2) ロームを斑状に少量含む。しまりやや弱い。粘性やや強い。
- ⑥ 黒褐色土 (10YR2/3) ロームを斑状に含む。しまり強い。粘性やや強い。
- ⑦ 黒褐色土 (10YR2/3) ⑥に酷似 (⑥よりロームを多量含む)
- ⑧ 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒少量含む。しまり強い。粘性やや強い。
- ⑨ 灰黄褐色土 (10YR4/2) ロームを斑状に多量含む。しまり強い。粘性やや強い。
- ⑩ 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径0.5cm以下のローム粒多量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
- ⑪ 黒褐色土 (10YR2/2) 径0.5cm以下のローム粒多量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
- ⑫ 黒褐色土 (10YR3/1) 径0.3~0.5cmの黄褐色土 (10YR8/8) ブロック含む。径4cmのブロックあり。径0.1~0.3cmの炭化物含む。粘性なし。よくしまる。
- ⑬ 黒褐色土 (10YR3/1) 径0.5~2cmの黄褐色土 (10YR8/8) ブロック多く含む。径0.1~0.4mmの炭化物含む。粘性なし。よくしまる。
- ⑭ ⑬に似黄褐色 (10YR6/3) 径0.3~0.4mmの炭化物含む。粘性なし。ややもろい。

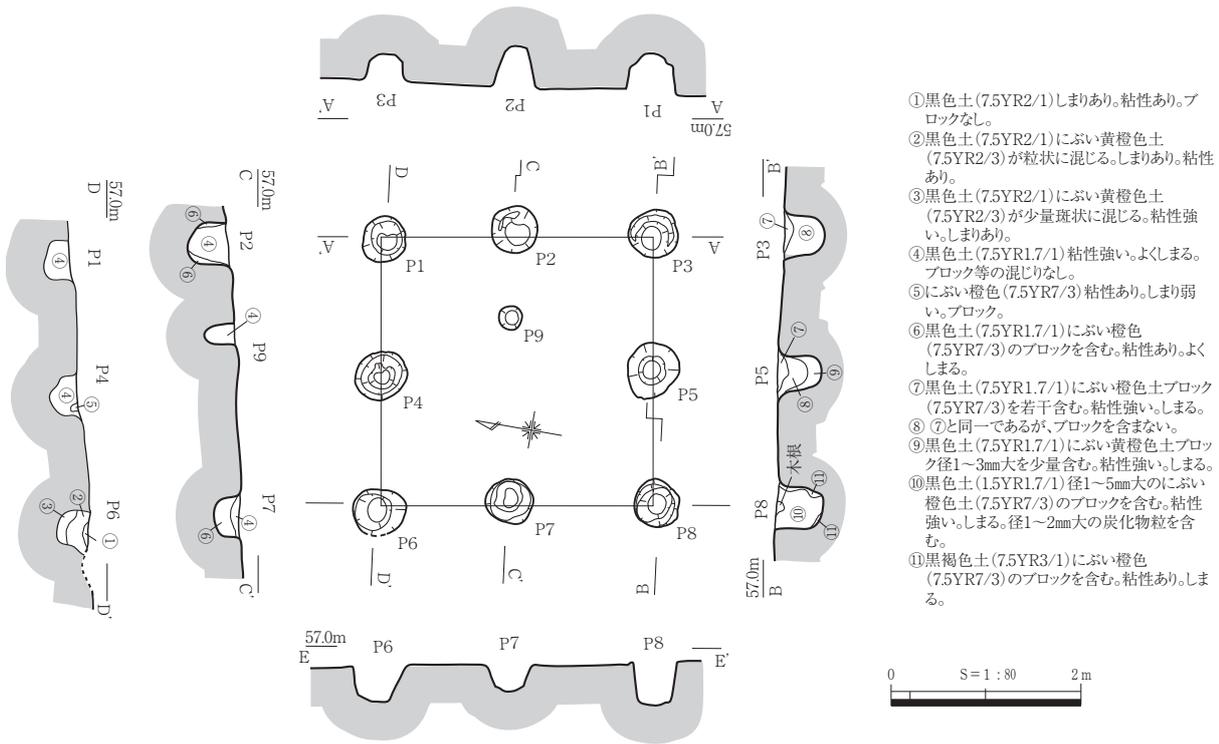
第53図 SB1

表18 SB1ピット一覧

番号	径 (m)	深 (m)
P 1	0.40	0.57
P 2	0.40	0.37
P 3	0.43~0.50	0.51
P 4	0.34~0.43	0.49
P 5	0.33~0.38	0.49
P 6	0.37	0.40
P 7	0.39~0.43	0.44

表19 SB2ピット一覧

番号	径 (m)	深 (m)
P 1	0.48~0.51	0.29
P 2	0.50	0.45
P 3	0.52	0.43
P 4	0.50~0.55	0.33
P 5	0.53~0.61	0.48
P 6	0.58	0.39
P 7	0.47~0.50	0.29
P 8	0.50~0.52	0.49
P 9	0.25	0.33



第54図 SB2

しており、古墳時代後期以前の掘立柱建物跡と考える。

#### 4 土坑

##### SK13(第55 ~ 57図 P L .18・19・26・27)

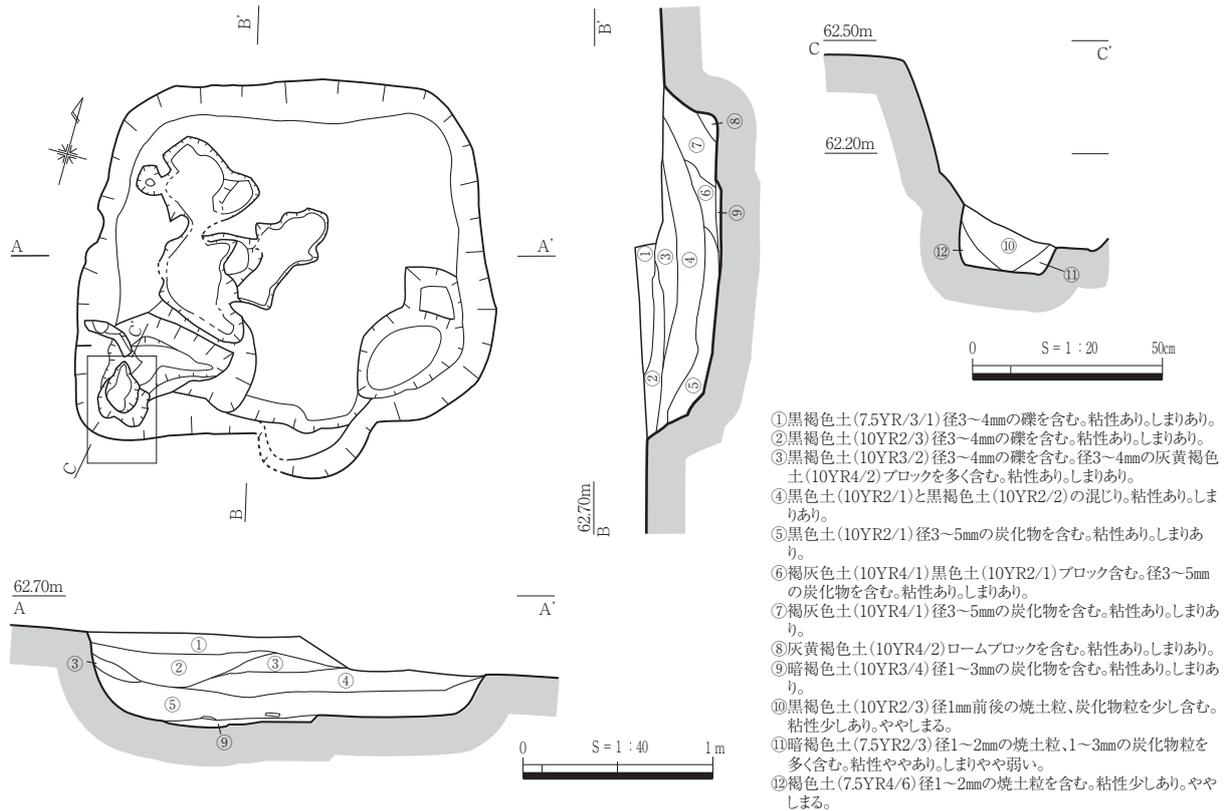
E 3グリッドの北西、標高62.5mの東に向かう緩斜面、ほぼ同時期のSI 2の南西6.5mに位置する。平成20年度の確認調査で遺構の一部を検出しており、V b層上面で方形状の黒褐色土の広がりを見出した。

平面形は不整な方形、長軸2.11m、短軸1.85m、検出面からの深さは0.50mを測る。埋土は12層に分けることができ、黒から黒褐色土を主体とする。底面の一部では炭化物及び焼土が分布している。底面上及び最下層からは多数の土器が出土した。出土遺物の中には表面や破面に剥離した痕跡をもつものがあり、被熱によって破損した結果と推定する。煮沸具以外でも剥離痕はみられ、火の中に土器などを破棄した結果と考える。遺構の南西隅にはやや内径するピット状の小穴があり、内側壁面が赤く変色していた。被熱した痕跡とみられる。

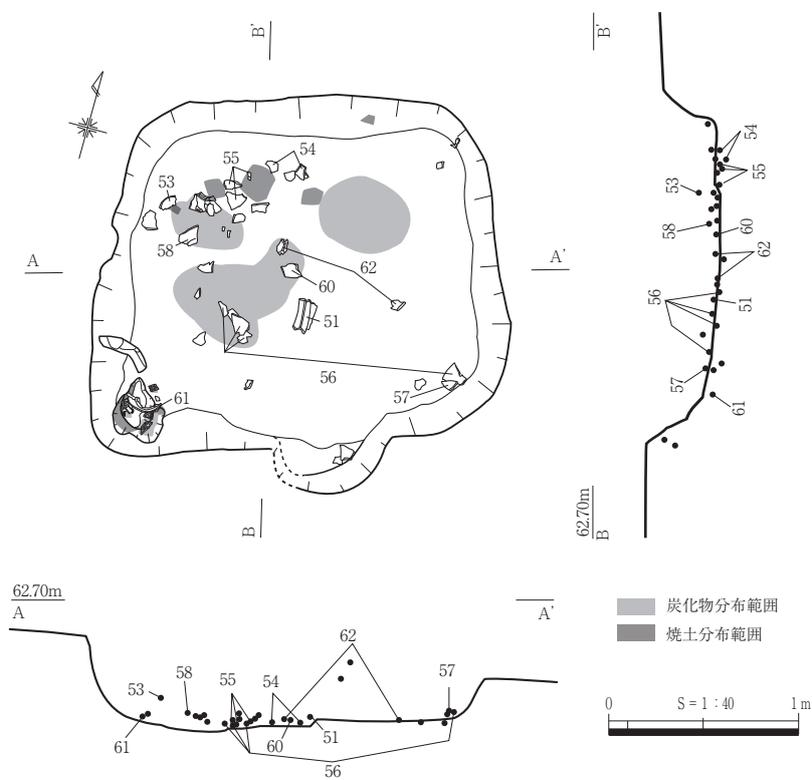
出土遺物は、弥生土器(48)及び古墳時代前期の土師器(49~63)がある。48は弥生時代中期の甕もしくは壺。埋土中層以上から出土しており、遺構の埋没過程で混入したものと考えられる。土師器はすべて埋土下層や床面上から出土した。49・51は甕、50は壺、52~56は高坏、57~63は鼓形器台である。石器や鉄製品は出土していない。

遺構の上部構造や性格は明確にしがたいが、被熱痕跡のある小穴の存在や、床面に焼土や炭化物が分布していたことから、本来的に火を用いる場であったと推測する。

遺構の時期は、出土した土師器が古墳時代前期中葉(天神川Ⅲ期)であることから、土坑の廃絶時期もこの時期と考える。



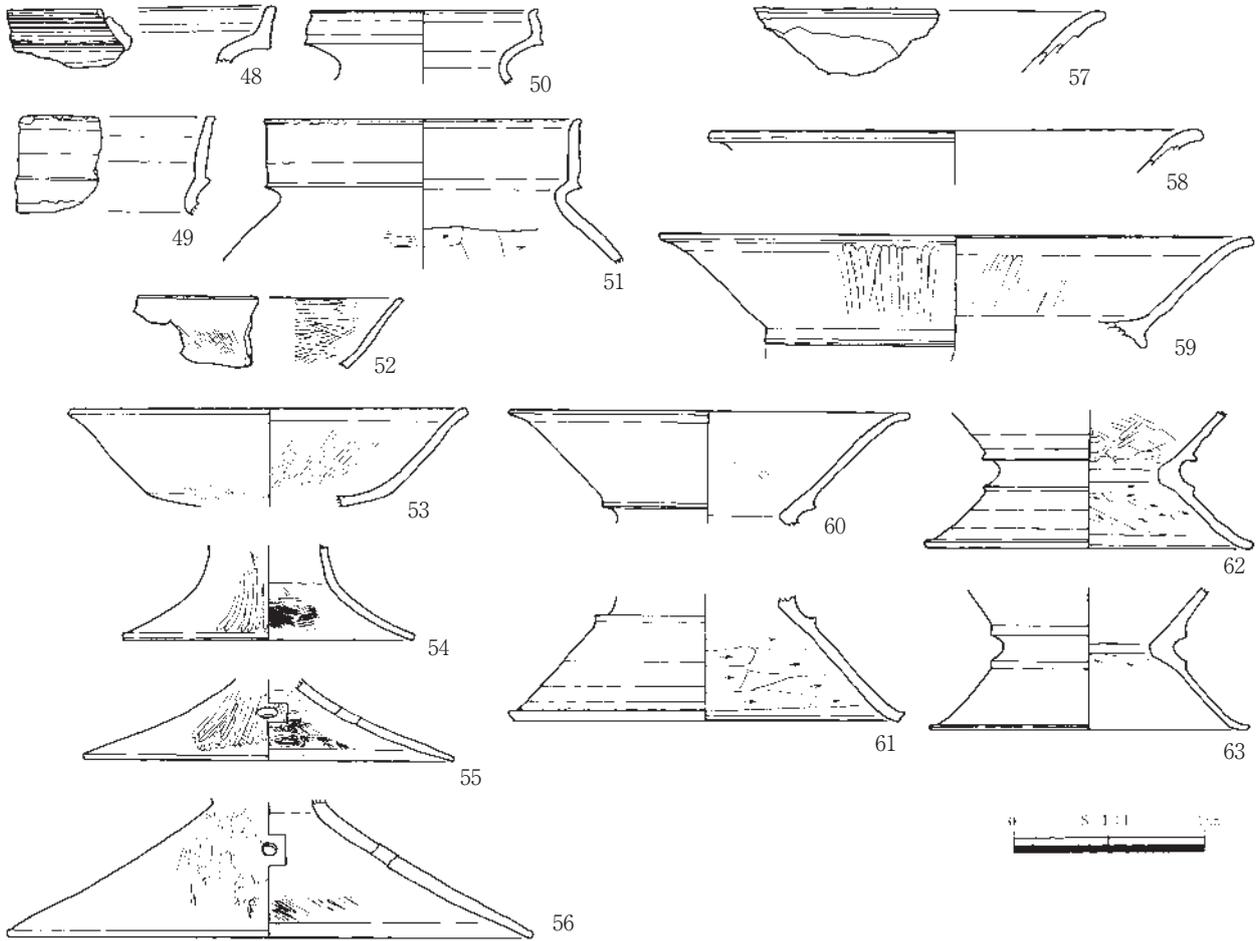
第55図 SK13



第56図 SK13遺物出土状況

表20 古墳時代の土坑一覧

遺構名	平面形	規模(m)	深さ(m)	底面規模(m)
SK13	方形	1.85×2.11	0.50	1.48~1.79



第57図 SK13出土遺物



写真2 SK13調査風景(北西から)



写真3 SK13遺物出土状況(北西から)

5 遺構外出土遺物(第58図 P L .28・29・32)

調査地西側の丘陵上のⅦa・Ⅶb層と谷部の自然流路内埋土から弥生土器(64~68・71)、土師器(69・70・72~83)、須恵器(84~87)、鉄器(F17)が出土している。

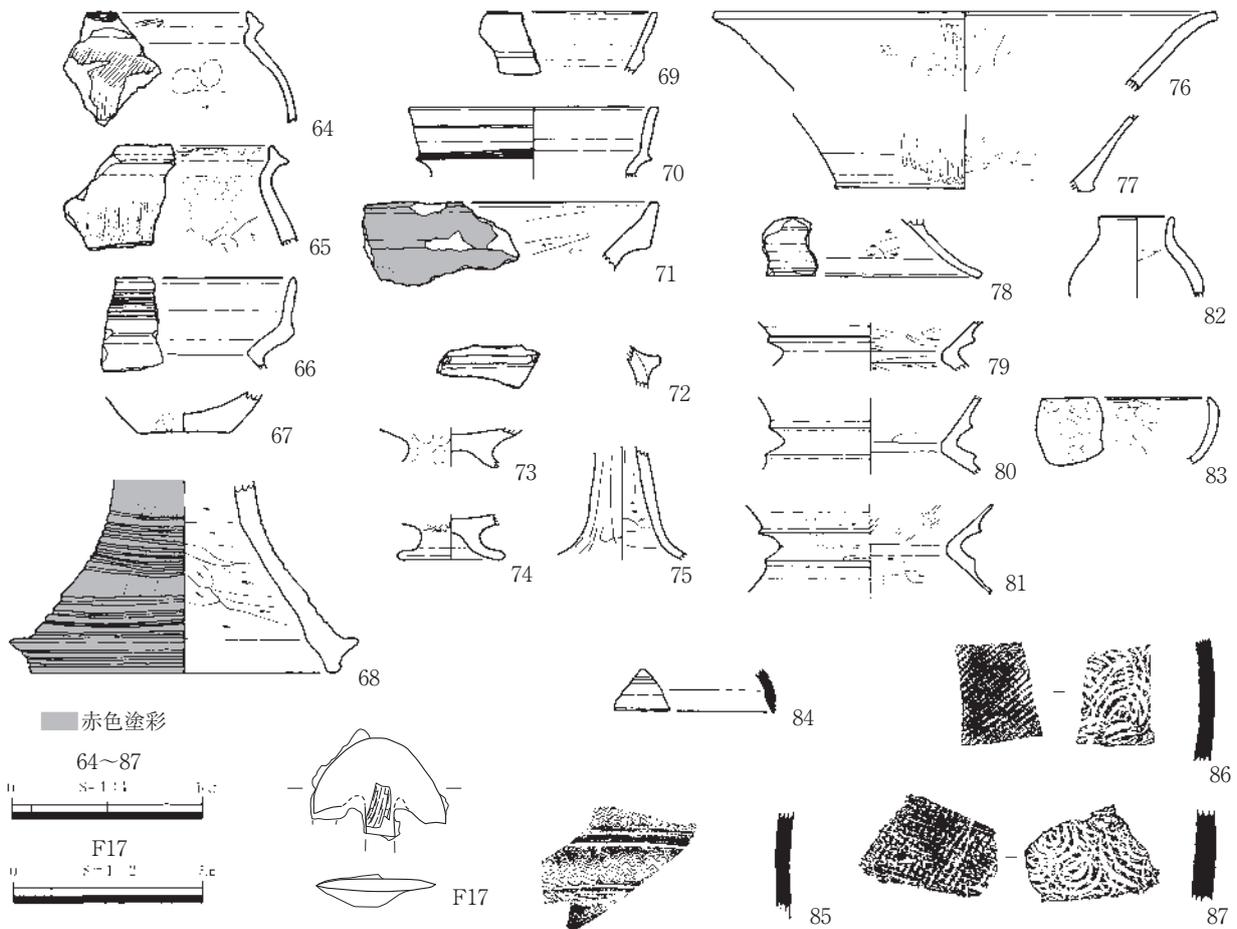
Ⅶa・Ⅶb層からの出土遺物(64~66・70・72~74・76~82・87・F17)は弥生時代中期・後期、古墳時代前期の土器が主体をなす。古墳時代の須恵器87と鉄鏃F17も出土している。弥生時代の土器には、中期の甕(64)及び高坏(68)、後期の甕(66)などがある。古墳時代の遺物は、中期の甕(69)、低脚坏(73・74)、器台(76~81)、手づくね土器(82・83)、有茎式の鉄鏃(F17)がある。

谷部の自然流路に堆積していた黒色土からの出土遺物(67・69・71・75・83~86)は弥生土器、古墳時代前期の土師器などに加え、古墳時代中~後期の須恵器も含まれ、古墳時代において西側丘陵よりも時期幅の大きな組成を示している。弥生時代の土器は、弥生土器の底部(67)、後期の口縁部(71)である。古墳時代の土器は、中期の高坏(75)、手づくね土器(83)がある。中期から後期にかけての須恵器は、坏蓋(84)、壺(85)、体部片(86・87)である。

第5節 古代から中近世の調査(第59~64図 P L .29・30・33)

1 概要

今回の調査では、古代以降の遺構は確認していない。調査地東側の谷部を流れる自然流路内及びその周辺から中世以降の土器と陶磁器、鉄関連遺物が出土した。この自然流路の東側に位置する豊成叶

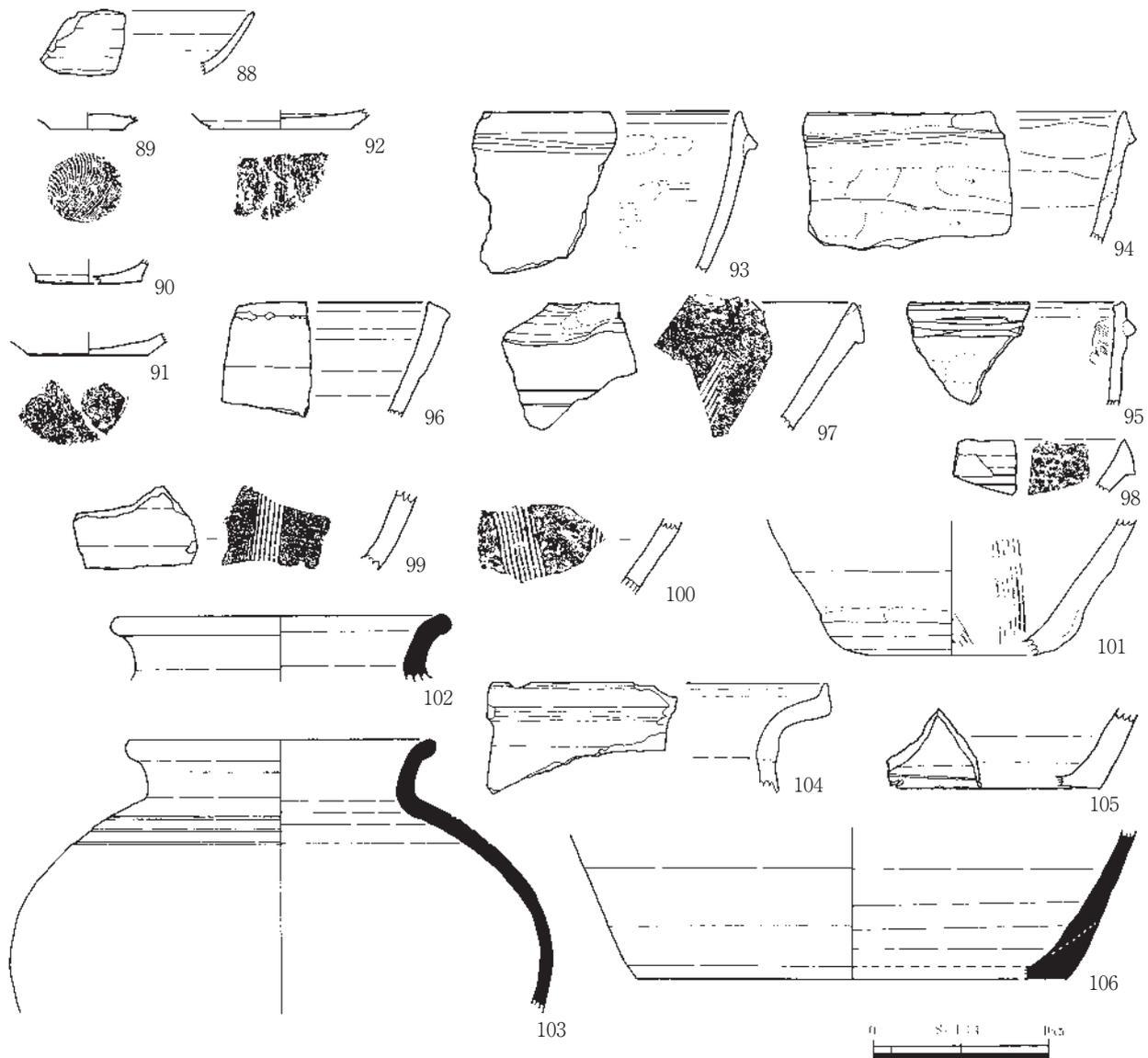


第58図 弥生時代~古墳時代遺構外出土遺物

林遺跡では、中世の遺構を確認しており、当遺跡内出土の中世の遺物は豊成叶林遺跡との関係が考えられる。また、鉄製品を除く鉄関連遺物についても自然流路内の黒色土から多く出土している。炉壁や流出溝滓が丘陵の斜面部(H3グリッド西側)からも出土していることから、製鉄炉や排滓場が近隣に所在していたと推測する。

自然流路埋土及びその周辺から出土した遺物で図化したのは、土器及び陶器(88~106)、磁器(107~112)、鉄製品(F18~F23)、鉄滓などの鉄関連遺物(F24~F60)である。これらのうち、自然流路の東側にあたる谷部に広がる黒色土からは、土器及び陶磁器(90・92・101~107・109~112)が出土した。

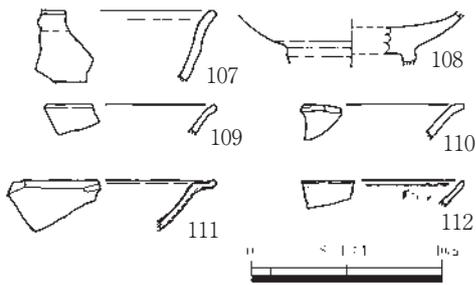
土器は、土師質土器の小皿(89)、坏(88・90~92)、瓦質土器の羽釜(93~95)・播鉢(101)、須恵器の壺(102・103)・底部(106)である。陶器は、備前鉢(96~98)、越前の甕(104)である。いずれも鎌倉から室町前期のものであるが、土師質土器は、88が深い碗状の器形であることから、平安後期に遡る可能性もある。ほかはいずれも13~14世紀代、93・94が14~15世紀代。備前は96が14世紀中葉、97・98が14世紀末から15世紀前葉、越前(104)は13世紀後葉の所産である。



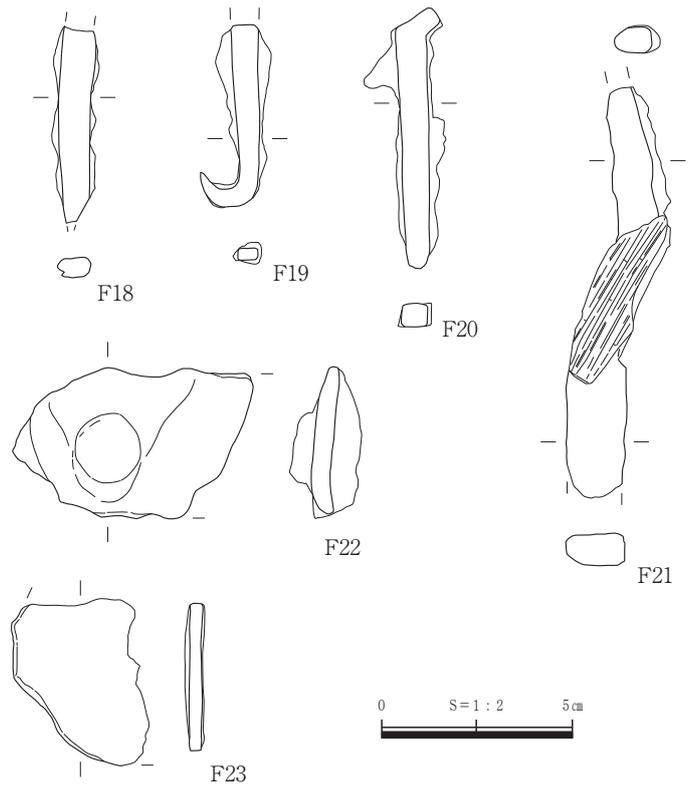
第59図 中世遺構外出土遺物(土器・陶器)

磁器は、107が龍泉窯産の無紋碗で、14～15世紀、108・109は龍泉窯産の無紋の皿または小型碗で、13～14世紀、110は龍泉窯産の無紋の皿で、13～14世紀である。これらの中世遺物の下限は15世紀前葉となり、この時期が黒色土堆積時期の下限となる。

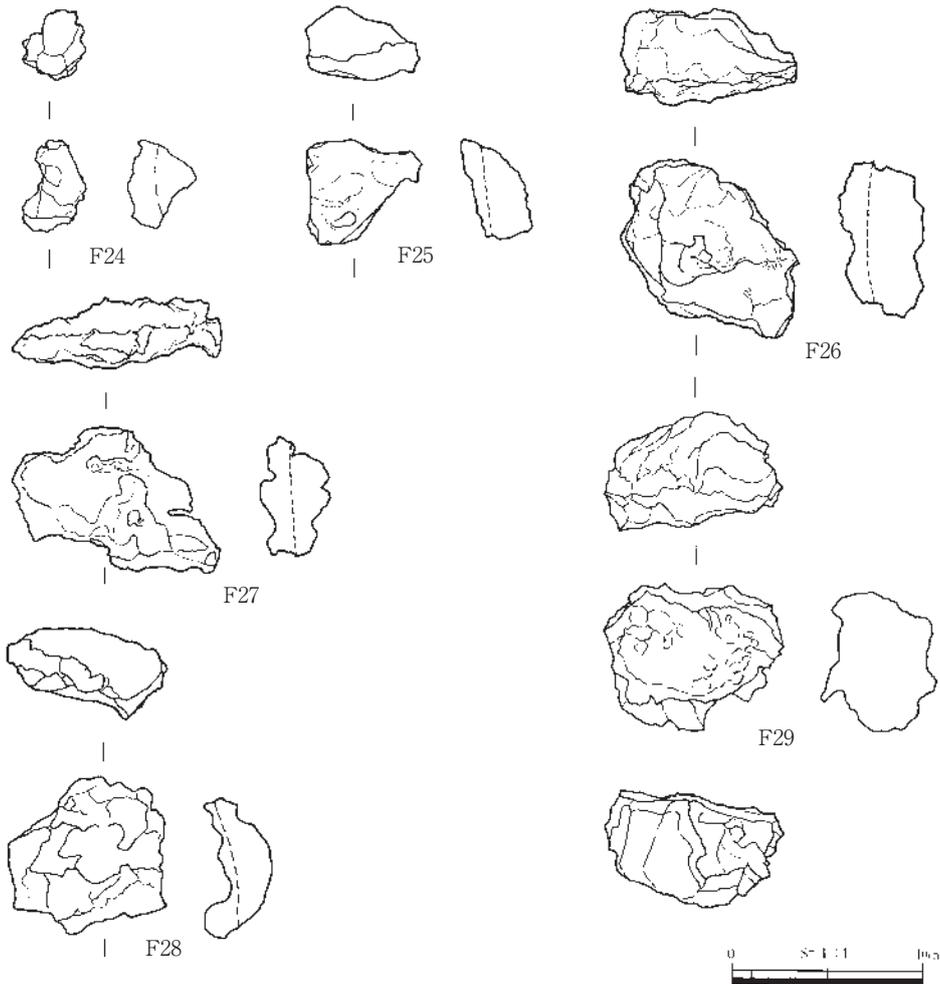
鉄製品はF18～21が鍛造品、F22・23が鋳造品である。F18は棒状不明品、F19は



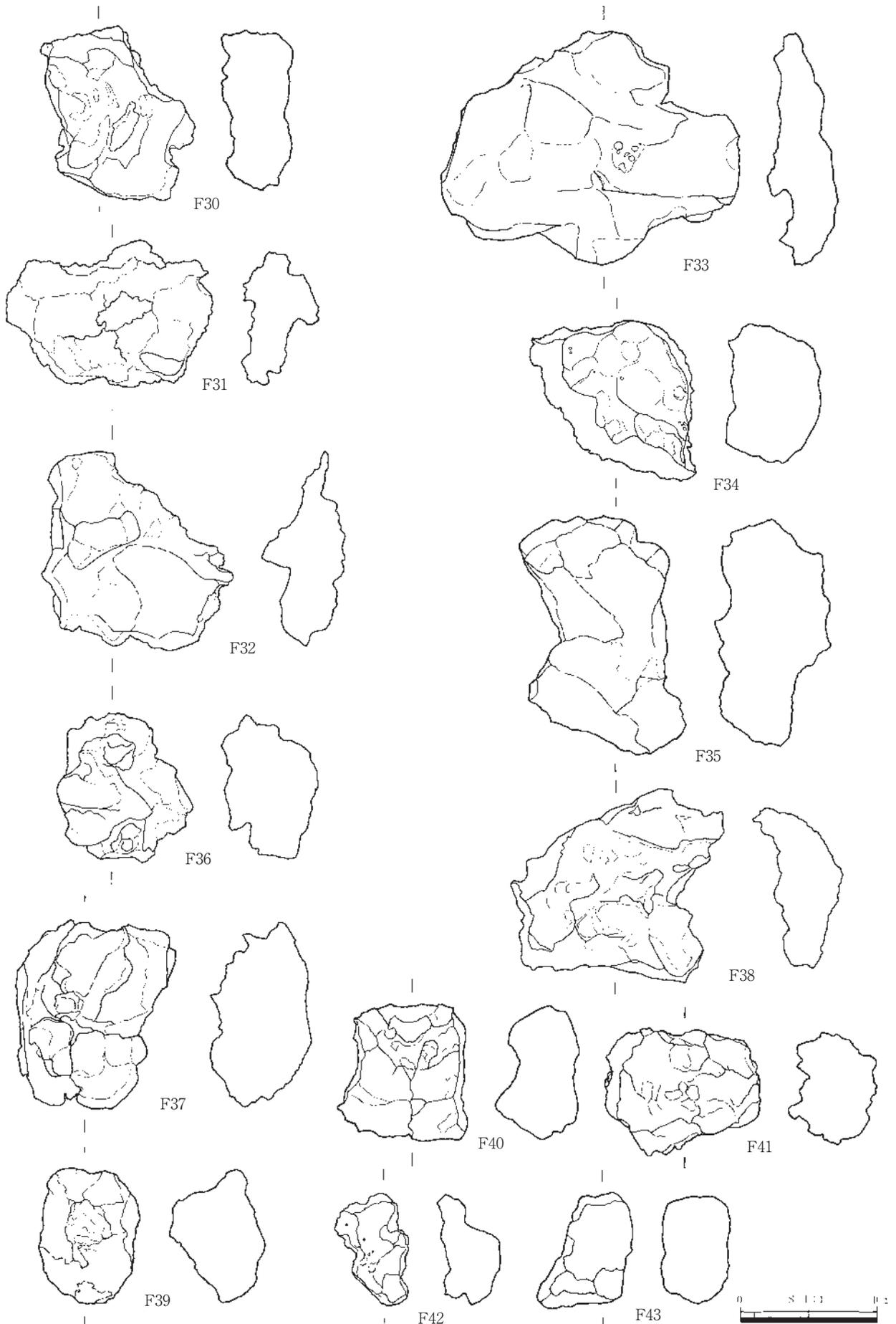
第60図 中世遺構外出土遺物(磁器)



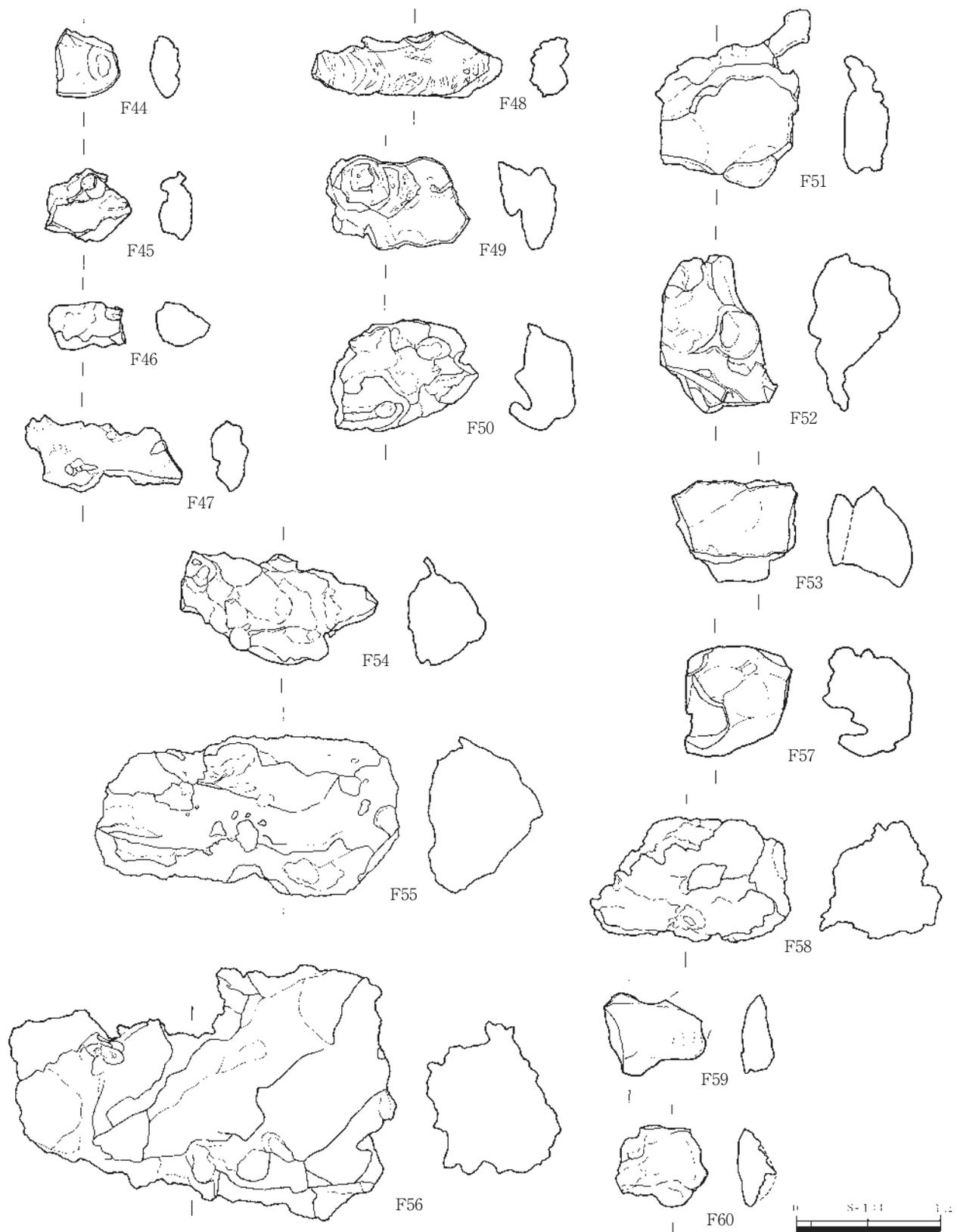
第61図 古代～中近世遺構外出土遺物



第62図 遺構外出土鉄関連遺物(炉壁)



第63図 遺構外出土鉄関連遺物(炉底塊)



第64図 遺構外出土鉄関連遺物(流出溝滓・流出孔滓・流動滓)

釣針、F20は釘、F21は鉤か、F22・23はいずれも鉄鍋である。F18・19は古墳時代、F20は小型であり中世、F21は古墳から中世、F22・23は体部片のみで、中世の所産である。鉄関連遺物は、F24が通風口部、F25～29が炉壁でF29については炉壁を補修した部分である。F30～35は炉底塊で、F30～33は薄手、F34・35は厚手である。工具痕が目立つ。F36～38は炉底塊～流出溝滓、F39～43は炉内滓で、うちF42・43は鉄を含んでいた。流出溝滓はF44～53で、F44～F48は細いもの、F49～52は中程度、F53は重層のものである。F54～56は流出孔～溝滓、F57・58は流出孔滓、F59・60は流動滓である。鉄関連遺物の様相より古代から中世初頭頃の製鉄炉が近隣に存在していたとが推定でき、谷部の削平によって失われているが、谷部に排滓場の一角が位置していた可能性があるだろう。

## 第6節 時期不明の遺構・遺物

### 1 概要

出土遺物がなく、埋土の状況や検出面などでは時期を特定することができない遺構について、時期不明の遺構として扱う。土坑2基(SK14・SK15)、溝1条(SD9)を検出した。をこのうち、SK14については形状は古墳時代前期の土坑SK13に平面形は類似するものの埋土が異なる。SK15は類似する掘り方や埋土をもつ遺構は本遺跡には認められない。SD9は鈍角に屈曲する溝である。

SK14・15はV層上面、SD9はVI層上面で検出しているものの、いずれも出土遺物がなく被覆している無遺物層の時代も明確ではないため、時期不明の遺構として報告する。

### 2 溝

#### SD1 (第65図、P.L.20)

調査地の南西隅でL字状の溝を確認した。屈曲部は検出していないが、埋土や規模から一連の遺構と判断した。走行方向から2つに分け、北西－南東方向の溝をSD1a、北東－南西方向の溝をSD1bとして報告する。

#### SD1a

C6グリッドの南東からD7グリッド中央を南東にかけて延びる。VI層上面で暗褐色土の帯状の広がりとして検出した。

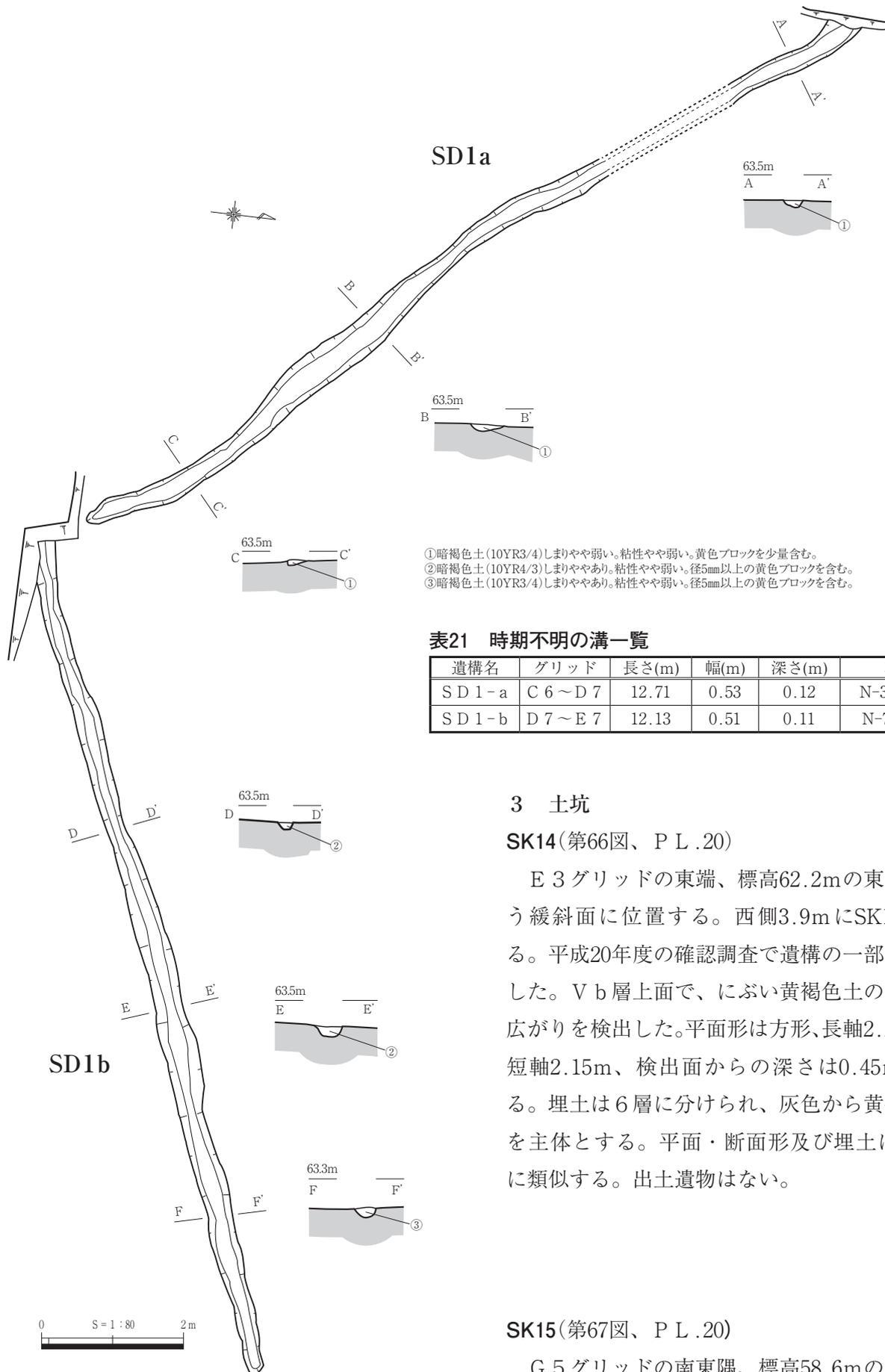
最大幅は0.53m、深さは最大0.12m、長さは12.71m、主軸はN-39°-Wを測る。埋土は暗褐色土の単層である。攪乱土中から須恵器小片が1点出土している。

#### SD1b

D7グリッド南東からE7グリッド中央～東にかけて延びる。VI層上面で暗褐色土の帯状の広がりとして検出した。

最大幅は0.51m、深さは最大0.11m、長さは12.13m、主軸はN-70°-Eを測る。埋土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

埋土が同一で、検出面も同じであることから、これら2条の溝は、D7グリッド南でコーナーをもつと考える。ただし、調査地南壁際であるため、確認はできていない。両者の溝は直角ではなく、やや鈍角(109°)に開く。



- ①暗褐色土(10YR3/4)しまりやや弱い。粘性やや弱い。黄色ブロックを少量含む。
- ②暗褐色土(10YR4/3)しまりややあり。粘性やや弱い。径5mm以上の黄色ブロックを含む。
- ③暗褐色土(10YR3/4)しまりややあり。粘性やや弱い。径5mm以上の黄色ブロックを含む。

表21 時期不明の溝一覧

遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	軸
SD 1-a	C 6～D 7	12.71	0.53	0.12	N-39°-W
SD 1-b	D 7～E 7	12.13	0.51	0.11	N-70°-E

### 3 土坑

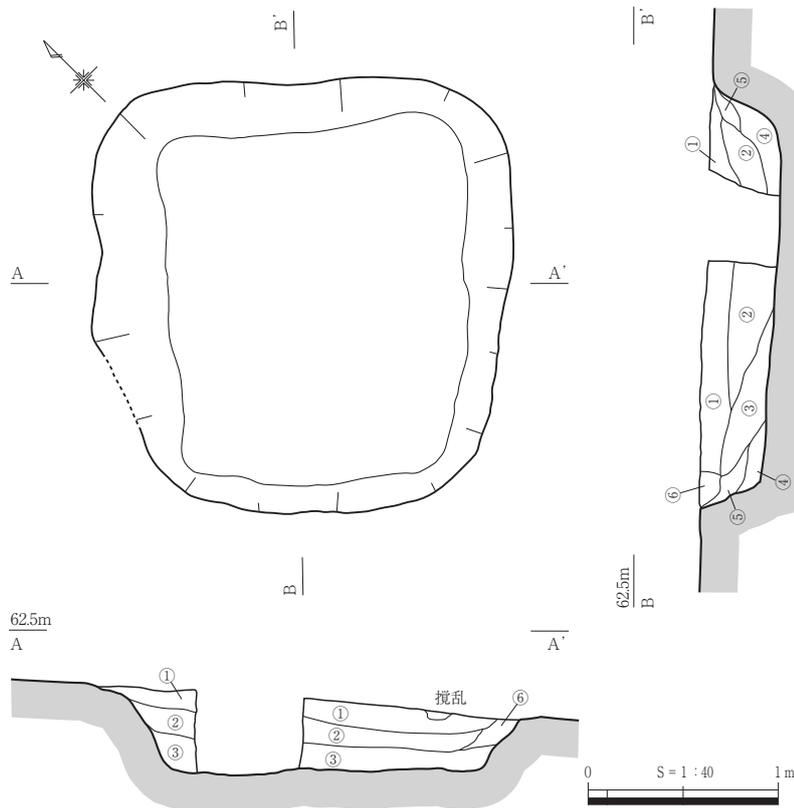
#### SK14(第66図、P L .20)

E 3グリッドの東端、標高62.2mの東に向かう緩斜面に位置する。西側3.9mにSK13がある。平成20年度の確認調査で遺構の一部を調査した。V b層上面で、にぶい黄褐色土の方形の広がりを検出した。平面形は方形、長軸2.26m、短軸2.15m、検出面からの深さは0.45mを測る。埋土は6層に分けられ、灰色から黄褐色系を主体とする。平面・断面形及び埋土はSK13に類似する。出土遺物はない。

#### SK15(第67図、P L .20)

G 5グリッドの南東隅、標高58.6mの東に向かう緩斜面に位置する。SI 6の南隣に位置す

第65図 SD 1



- ①にぶい黄橙色 (10YR6/4) 4~5 cmの褐色土ブロック (10YR4/1) を含む。
- ②灰黄褐色土 (10YR4/2) 5~10 cmのにぶい黄褐色土ブロック (10YR5/4) を含む。粘性なし。ややしまる。
- ③褐灰色 (10YR4/1) 2~3 cmの黄褐色土ブロック (10YR8/6) を含む。粘性なし。ややしまる。
- ④③と同じであるが、ややしまりが弱く、もろい。ブロックも多い。
- ⑤灰黄褐色土 (10YR5/2) 2~3 cmの黄褐色土ブロック (10YR8/6) を多く含む。
- ⑥黄褐色土ブロック (10YR8/6) 粘性なし。もろい。

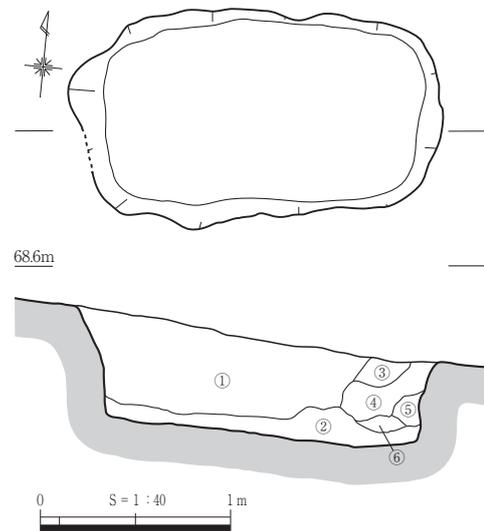
第66図 SK14

る。V b層上面で楕円形状の黒色土の広がりを検出した。平面形は長方形、長軸1.74m、短軸1.08m、検出面からの深さは0.55mを測る。埋土は6層に分けられ、黒色土を主体とする。底面付近にはしまりの弱い褐灰色土が堆積していた。

遺構は埋葬を目的とした形状に類似するが、遺物の出土もなく特定はできない。

P 1

G 5 と H 5 グリッドの境、SI 6 の東に位置する。埋土は黒褐色土ではあるが周辺の攪乱土坑と同様の土で、図化していないが埋土上層から須恵器片が出土した。径は0.57~0.65m深さは最大で0.30mを測る。時期は古墳時代後期以降で、性格は不明である。



- ①黒色土 (10YR1.7/1) 径2~5mmの黄褐色土 (10YR8/6) ブロックを多く含む。径2~3cmの同ブロックを含む。粘性なし。ややもろい。
- ②褐灰色土 (10YR5/1) 径2~5mmと径3~4mmの黄褐色土 (10YR8/6) を多量に含む。やや粘性あり。ややもろい。
- ③黒色土 (10YR2/1) 径2mm~1cmの黄褐色土ブロックを多く含む。粘性なし。ややもろい。
- ④褐灰色土 (10YR4/1) 径2~5mmと径2~3cmの黄褐色土 (10YR8/6) ブロック含む。粘性なし。もろい。
- ⑤黒褐色土 (10YR3/1) ブロック含まない。粘性なし。もろい。
- ⑥褐灰色土 (10YR4/1) 径2~5mmと径1~2cmの黄褐色土 (10YR8/6) ブロックを多く含む。粘性なし。もろい。

第67図 SK15

表22 時期不明の土坑一覧

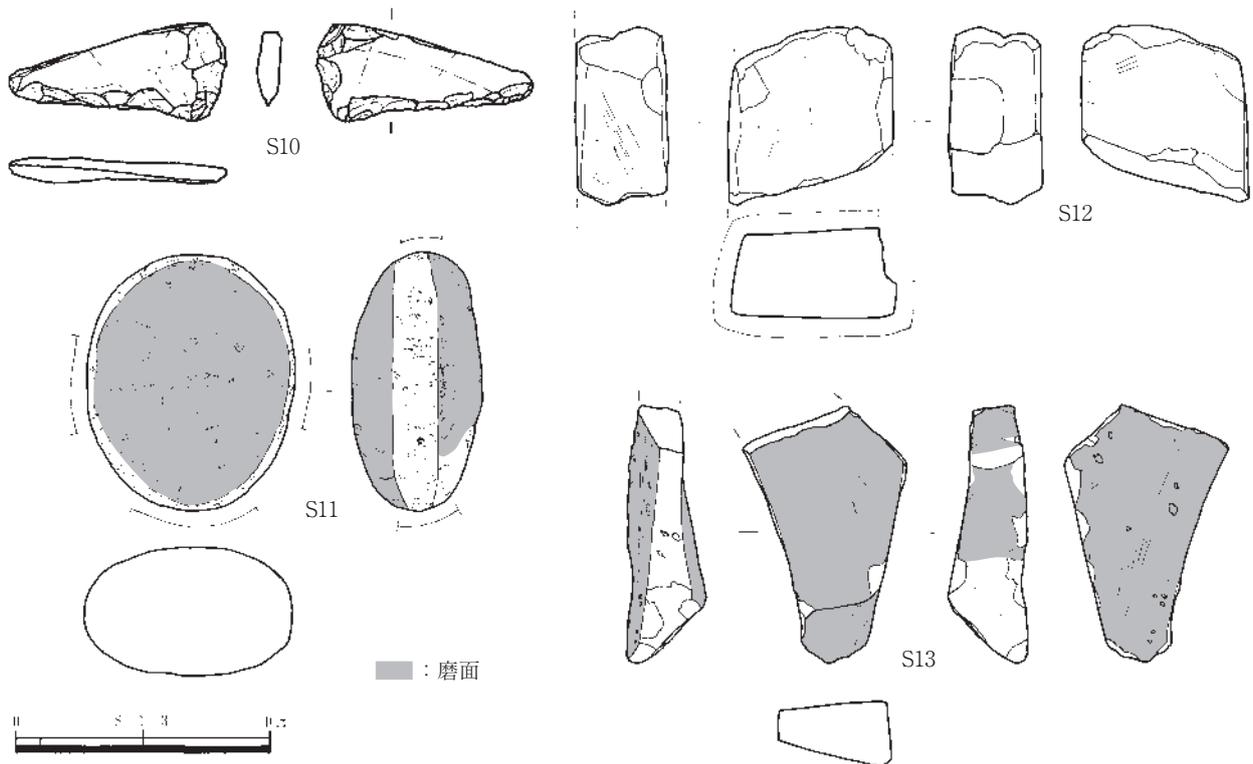
遺構名	平面形	規模 (m)	深さ (m)	底面規模 (m)
SK14	方形	2.15×2.26	0.45	1.55~1.87
SK15	長方形	1.08×1.74	0.55	0.95~1.68

表23 時期不明のピット一覧

番号	径 (m)	深 (m)
P 1	0.57~0.65	0.30

遺構外出土石器

遺構外から出土した石器のうち、時期の特定できないものについて、ここに掲載する。S10はサヌカイト製のスクレイパー、S11は磨石。全面が磨面として用いられている。S12・S13は砥石である。



第68図 遺構外出土遺物(石器)

表24 出土土器・陶磁器観察表(1)

☆: 21年度調査時の番号

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	397	G 6-NW 黒褐色土	第40図 PL.21-1	縄文土器	器高:△3.6	外面:山形文(上5段・下5段)。 内面:ナデ。	やや密	良好	内外面:明褐色	
2	438	J 4-SW 黒色土	第40図 PL.21-1	縄文土器	器高:△	外面:山形文(上3段・下3段)。 内面:ナデ。	密(径1mm以下の石英・長石を含む)	良好	外面:褐～明褐色 内面:黒褐色	
3	541	J 4-NW 層不明	第40図 PL.21-1	縄文土器	器高:△4.5	外面:ポジティブ楕円押型文(原体:長軸10～11mm、 短軸6～7mm) 内面:ナデ。	密(径3mm以下の石英・長石を含む)	良好	外面:橙色 内面:にぶい褐色	
4	416	I 4-NE 水路中	第40図 PL.21-1	縄文土器	器高:△5.8	外面:ポジティブ楕円押型文(原体:長軸4～6mm、 短軸3～4mm)。 内面:ナデ。	密(砂粒を含む)	良好	内外面:明黄褐色	
5	450	J 4-SW 黒色土	第40図 PL.21-1	縄文土器 鉢	器高:△4.2	外面:波状の口縁部に沈線はなく、RL縄文のみ。 内面:口縁部に沿い、5～7mm幅のヘラミガキ。	密	良好	外面:にぶい黄褐色 内面:にぶい橙色	
6	430	J 4-NW 黒色土	第40図 PL.21-1	縄文土器 鉢	器高:△4.0	外面:粗いナデ。 内面:口縁部付近横方向の条痕。	密	良	内外面:にぶい黄褐色	
7	20	谷部	第40図 PL.21-1	縄文土器 鉢	器高:△3.5	外面:口縁部中位に1条の沈線。上下に各1条の沈 線があるも全周するかは不明。 内面:ナデ。	密(径3mm以下の石英・砂粒を含む)	良	外面:橙～にぶい褐色 内面:にぶい褐色	
8	384	SI 2 P 1	第43図 PL.22	土師器 甕	器高:△4.8	内外面:ヨコナデ。	やや密	良好	内外面:にぶい黄褐色	
9	259・378 379	SI 2-SW ・P 7	第43図 PL.22	土師器 甕	口径:※15.0 器高:△4.5	内外面:ヨコナデ。内面頸部以下左方向のケズリ。	密(径1mm以下の砂粒を多く含む)	良	内外面:にぶい黄褐色	
10	335・337 368・376	SI 2 ⑦層 ・床面上・P 5	第43図 PL.22	土師器 甕	口径:※15.0 器高:△5.4	内外面:ヨコナデ。内面頸部以下ケズリ。	密	良好	内外面:浅黄褐色	ビット と下層・ 床面上 が接合
11	228・304	SI 2-NE ⑥層・暗褐色土	第43図 PL.22	土師器 甕	口径:※14.2 器高:△6.5	外面:ヨコナデ。 内面:口縁部ヨコナデ。指頭圧痕あり、頸部以下左 方向のケズリ。	密(径1mmの砂粒を含む)	良好	外面:にぶい黄橙～橙～ にぶい褐色 内面:にぶい黄橙～にぶ い褐色	
12	239・327	SI 2 ⑦層	第43図 PL.22	土師器 甕	口径:※13.0 器高:△7.5	外面:ヨコナデ。 内面:頸部以下右方向のケズリ一部後ナデ。口縁部 ヨコナデ。	密(径1mmの砂粒を含む)	良好	外面:にぶい黄橙～黒褐 色 内面:にぶい黄橙～黄褐 色	
13	340	SI 2 ⑦層	第43図 PL.22	土師器 甕	口径:※20.8 器高:△6.2	外面:ヨコナデ。 内面:ヨコナデ。頸部以下右方向のケズリ。	密(径1mmの砂粒を多く含む)	良好	外面:にぶい黄橙～黒褐 色 内面:浅黄褐色	炭化物 付着
14	332	SI 2 ⑦層	第43図 PL.22	土師器 甕	口径:※16.4 器高:△7.8	外面:体部横方向のハケメ。頸～口縁部ヨコナデ。 内面:体部右方向のケズリ。口縁部ヨコナデ。	密(2mm以下の石英・長石をわずかに含む)	良好	外面:にぶい橙色 内面:にぶい黄褐色	炭化物 付着
15	231・303	SI 2-SW ⑥層・東西ベルト 床面上	第43図 PL.22	土師器 甕	口径:※21.8 器高:△6.7	外面:口縁部ヨコナデ。肩部以下縦方向のハケメ。 内面:ヨコナデ。頸部以下右方向のケズリ。	密	良好	外面:浅黄褐色 内面:明褐色～黄褐色～ 黒褐色	
16	302	SI 2 西側ベルト 床面上	第43図 PL.21-2	土師器 甕	口径:14.2 器高:△14.2 最大胴径:※ 22.9	外面:口縁部ヨコナデ、肩部波状文、体部横・斜め 方向のハケメ。 内面:口縁部ヨコナデ。頸部以下右方向のケズリ。	密(径1～3mmの石英・長石を含む)	良好	外面:浅黄褐色 内面:にぶい黄褐色	
17	201・202 277	SI 2-NW 黄褐色土・SW 攪乱	第43図 PL.21-2	土師器 甕	口径:※16.3 器高:△16.3 最大胴径:※ 23.6	外面:口縁部ヨコナデ、体部縦後横方向のハケメ。 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下右方向のケズリ。	密(径2mmの長石をわずかに含む)	良好	内外面:にぶい黄褐色	
18	303	SI 2 西側ベルト⑥層	第43図 PL.22	土師器 高坏	器高:△3.6	外面:縦方向のハケメ。 内面:剥落により不明瞭。	密	良好	内外面:浅黄褐色	
19	190・208 212・213 240・273 282・284 315	SI 2-SW・S E・南ベルト ⑤⑦層・黄褐色 土・中層	第43図 PL.21-3	土師器 高坏	口径:※17.0 器高:△5.8	外面:横方向のハケメ、口縁上部ヨコナデ。 内面:不定方向の密なミガキ。	密	良好	内面:橙～にぶい褐色 外面:橙色	
20	124・265 292・303 306	SI 2-SW・東側 ベルト 中層・⑥⑦層・カ クラン	第43図 PL.21-4	土師器 低脚坏	口径:※18.5 器高:4.8 底径:※4.9	外面:口縁部付近横方向のミガキ、以下ナデ。 内面:底面放射状、口縁部付近横方向のミガキ。	密(径1mmの砂粒を含む)	良好	外面:浅黄橙～橙～黒色 内面:浅黄褐色～灰黄褐 色	
21	307	SI 2-NW⑥層	第43図 PL.22	土師器 器台	器高:△4.4	外面:縦方向のミガキ。 内面:ヨコナデ。	密	良好	内外面:淡黄色	
22	374	SI 2 床面上	第43図 PL.22	土師器 器台	口径:※4.1 器高:△15.2	内外面:剥落により調整不明瞭。	やや密	やや 良好	内外面:浅黄褐色	
23	302	SI 2 西側ベルト床面上	第43図 PL.22	土師器 器台	器高:△4.6	内外面:剥落により調整不明瞭。	やや密(径1.5mm以下の砂粒を含む)	やや 良好	内外面:明黄褐色	
24	218・339 345	SI 2-S E ⑦層・暗褐色土	第43図	土師器 器台	器高:△5.7 底径:16.9	外面:ヨコナデ。 内面:左方向のケズリ。	密	良好	内外面:にぶい黄褐色	
25	202・246	SI 2-NW 黄褐色土・暗褐 色土	第43図 PL.22	土師器 器台	器高:△2.4 底径:※16.4	外面:ヨコナデ。 内面:右方向のケズリ。	密(径0.2mmの石英を多く含む)	良好	内外面:淡黄色	
26	☆369	SI 5 ④層	第46図 PL.23-1	土師器 甕	器高:△4.1	内外面:ナデ。	やや粗	良	内外面:浅黄褐色	

第4章 倉谷荒田遺跡の調査

表25 出土土器・陶磁器観察表(2) ☆:21年度調査時の番号

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
27	☆368	SI 5 ①-③層	第46図 PL. 23-1	土師器 甕	口径:※13.8 器高:△3.9	外面:ナデ。 内面:口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	内外面:浅黄橙色	
28	☆366	SI 5 ④層	第46図 PL. 23-1	土師器 甕	口径:※14.8 器高:△4.9	外面:ナデ。 内面:口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	外面:にぶい黄橙色 内面:黄橙色	
29	☆402-2	SI 5 ④層	第46図 PL. 23-1	土師器 甕	口径:※14.8 器高:△5.1	外面:ナデ。 内面:口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	外面:にぶい黄橙色 内面:黄橙色	
30	☆407	SI 5 ④層	第46図 PL. 23-1	土師器 甕	口径:※15.8 器高:△4.3	外面:ナデ。 内面:口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	内外面:黄橙色	
31	☆462	SI 5 ④層	第46図 PL. 24-2	土師器 甕	口径:※14.8 器高:△8.2	外面:口縁部~頸部ナデ。胴部ハケ。 内面:口縁部~頸部ナデ。頸部指押さえ。胴部ケズリ。	密	良	内外面:にぶい黄橙色	
32	51	SI 5 - S E 中層	第46図 PL. 23-1	土師器 高坏	口径:※16.4 器高:△3.9	内外面:縦または斜め方向の密なミガキ。	密(径0.2~2mmの長石を多く含む)	良好	外面:にぶい黄橙~黒色 内面:にぶい黄橙色	一部黒斑あり
33	☆517	SI 5 ⑤層	第46図 PL. 23-1	土師器 器台	口径:※19.0 器高:△3.6	外面:口縁部ハケ後ナデ。受部ハケ。 内面:ナデ。	密	良	外面:浅黄橙色 内面:にぶい黄橙色	
34	☆226 ☆333 ☆335 ☆476	SI 5 上層・中層・⑥層	第46図 PL. 23-3	土師器 低脚坏	口径:11.3 器高:△4.7	外面:縦・斜め方向のミガキ。 内面:横方向のミガキ。	密(長石・雲母を含む)	良好	内外面:浅黄橙色	
35	95・133 151・157 167・ ☆502	SI 5 - S E・N E 床面上	第46図 PL. 23-2	土師器 小型丸底壺	口径:※11.2 器高:△6.4 最大胴径:11.5	外面:頸部縦方向、口縁部横方向のミガキ、体部横方向のハケメ。 内面:頸部横方向、口縁部縦方向のミガキ、体部ナデ。	密(径1mm以下の砂粒を含む)	良好	内外面:橙色	
36	125・126 ☆327	SI 5 - N E 中層・上層	第46図 PL. 24-2	弥生土器 高坏	器高:△15.9 底径:※11.8	外面:坏部縦方向のミガキ、柱部6条、脚端部6条の凹線文。脚の端面に3条の凹線文。 内面:坏部縦方向のミガキ、脚部左方向のケズリ。	密(径0.5~2.0mm石英を多く含む)	良好	外面:淡黄色 内面:浅黄橙色	外面 赤色塗彩
37	☆422	SI 5 ⑤層	第46図 PL. 23-1	弥生土器 高坏	器高:△8.0	外面:9条の平行沈線、8条の平行沈線。 内面:脚部上位ケズリ。下位ナデ。	密	良	外面:にぶい黄橙色 内面:浅黄色	
38	☆348	SI 5 ④層	第46図 PL. 23-1	弥生土器 壺または甕	底径:※5.0 器高:△2.0	外面:底部ミガキ。底面ナデ。赤色塗彩。 内面:底部ナデ。指おさえ。	密	良	外面:明黄褐~淡赤橙~赤色 内面:浅黄橙~にぶい黄橙色	
39	☆501	SI 5 ⑤層	第46図 PL. 23-1	弥生土器 壺	口径:※36.8 器高:△4.4	外面:口縁部4条凹線。口縁部ナデ。頸部ハケ。 内面:口縁部3条凹線の後、波状文。頸部ハケ後ナデ。	密	良	内外面:浅黄色	
40	88	SI 5 にぶい黄褐色土 (中層)	第46図 PL. 23-1	弥生土器 壺	口径:※22.8 器高:△6.2	外面:ヨコナデ。口縁部に7条の平行沈線。 内面:ヨコナデ。頸部付近横方向のハケメ。	密	良好	外面:浅黄色 内面:明黄褐色	
41	539	SI 6 南北ベルト北側 ④層	第50図 PL. 25-1	土師器 甕	口径:※10.8 器高:△3.4	外面:口縁部ヨコナデ。 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下左方向のケズリ。	やや密	良好	内外面:明褐色	
42	560	SI 6 P 5埋土	第50図 PL. 25-1	土師器 甕	口径:※13.8 器高:△3.6	内外面:ヨコナデ。	密	良	内外面:明黄褐色	
43	524	SI 6 - S W ④暗褐色土上層	第50図 PL. 25-1	土師器 甕	口径:※14.2 器高:△2.9	内外面:ヨコナデ。	密(径0.3~0.5mmの石英を含む)	良好	内外面:橙色	
44	513	SI 6 - N W ③暗褐色土	第50図 PL. 25-1	土師器 甕	器高:△7.0	外面:頸部~口縁部ヨコナデ、肩部以下縦方向のハケメ。 内面:頸部~口縁部ヨコナデ、頸部以下左方向のケズリ。	密(径2mmの長石をわずかに含む)	良好	内面:にぶい黄褐色 外面:黄褐色	
45	536	SI 6 ④層	第50図 PL. 24-5・6	土師器 高坏	口径:17.4 器高:△5.8	外面:縦方向のミガキ。 内面:底~口縁部横または斜め方向、口縁部横方向のミガキ。	密	良好	内外面:明黄褐色	
46	535	SI 6 ④層	第50図 PL. 24-3・6	土師器 高坏	口径:17.6 器高:△5.4	外面:底付近縦方向、口縁部横方向のミガキ。 内面:口縁部縦方向、口縁部横方向の一部に横方向のミガキ。	密	良好	内外面:橙色	
47	3・538	SI 6 東西ベルト東側 ・表土	第50図 PL. 24-4・6	土師器 高坏	器高:△9.2 底径:8.4	外面:坏部接合部付近横方向、口縁部縦方向のミガキ。柱部縦方向の面取り後、接合部付近横方向のミガキ。 内面:柱上部に絞目、裾部斜め方向のハケメ。	密(径1~2mmの砂粒を含む)	良好	内外面:橙色	
48	42・102	SK13 - S E・ 南北ベルト	第56図 PL. 27	弥生土器 甕・壺	器高:△3.1	外面:口縁部7条の平行沈線文。 内面:ヨコナデ。	密(径0.1mmの長石を含む)	良好	内面:淡黄色 外面:淡黄~にぶい橙色	
49	66	SK13 - N W 下層	第56図 PL. 27	土師器 甕	器高:△5.1	内外面:ヨコナデ。	密(径0.1mmの長石を含む)	良好	内外面:浅黄橙色	
50	211	SK13 ビット	第56図 PL. 27	土師器 壺	口径:※11.6 器高:△4.0	内外面:ヨコナデ。	密(径2mm以下の石英をわずかに含む)	良好	内面:浅黄色 外面:にぶい黄橙~黒灰色	
51	172	SK13 底面上	第56図 PL. 26-3	土師器 甕	口径:※16.4 器高:△7.7	外面:口縁部ヨコナデ、肩部以下横方向のハケメ。 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下右方向のケズリ。	密(長石・雲母を含む)	良好	内外面:浅黄橙色	炭化物 付着

表26 出土土器・陶磁器観察表(3)

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
52	69-108	SK13-SW 土層	第56図 PL.27	土師器 高杯	器高:△3.8	外面:口縁縦方向のハケメ後ミガキ、端部付近ナデ。 内面:横方向のミガキ。	密	良好	内外面:にぶい黄~黒色	
53	136	SK13 底面上	第56図 PL.27	土師器 高杯	口径:※20.6 器高:△5.2	外面:接合部付近縦方向のミガキ、口縁部付近剥落のため調整不明瞭。 内面:縦方向のミガキ。	密(径1mm以下の砂粒を含む)	良好	内外面:明黄褐色	
54	142	SK13 底面上	第56図 PL.27	土師器 高杯	器高:△5.0 底径:※15.0	外面:柱部縦方向のハケメ、裾部縦方向のミガキ。 内面:柱部ナデ、裾部横~斜め方向のハケメ、端部ナデ。	密	良好	内面:浅黄色 外面:にぶい黄褐色	
55	140	SK13 底面上	第56図 PL.27	土師器 高杯	器高:△4.2 底径:※19.4	外面:ハケメ後縦方向のミガキ。 内面:縦方向のハケメ。工具痕あり、裾端部ナデ。	密	良好	内外面:にぶい黄褐色	
56	147-175	SK13 底面上	第56図 PL.27	土師器 高杯	器高:△7.2 底径:※27.6	外面:縦方向のハケメ後ミガキ。 内面:裾部中位縦方向のハケメ、裾上部および端部付近ナデ。	密(径1mm以下の砂粒を含む)	良好	内外面:明黄褐色	
57	175	SK13 底面上	第56図 PL.27・ PL.26-6	土師器 器台	器高:△3.4	内外面:ヨコナデ。	密	良	内外面:にぶい黄褐色	剥離したように欠落。熱ではじけた痕跡か。
58	135	SK13 中層	第56図 PL.27・ PL.26-6	土師器 器台	器高:△3.8 底径:※24.0	内外面:ヨコナデ。	密(0.5mm以下の石英・長石・砂粒を多く含む)	良好	内外面:にぶい黄褐色	剥離したように欠落。熱ではじけた痕跡か。
59	144	SK13 底面上	第56図 PL.27	土師器 器台	器高:△5.8 底径:※30.4	内外面:縦方向のミガキ。端部付近ヨコナデ。	密	良好	内外面:にぶい黄褐色	
60	141	SK13 底面上	第56図 PL.26-1	土師器 器台	器高:△6.0 底径:※20.6	外面:ヨコナデ。 内面:ヨコナデ。斜め方向のミガキあり。	やや粗い(砂粒を含む)	良好	内外面:黄褐色	
61	180	SK13 底面上	第56図 PL.26-2	土師器 器台	器高:△6.5 底径:※20.3	外面:ヨコナデ。 内面:台部右方向のケズリ。	密	良好	内外面:にぶい黄褐色	
62	143-173	SK13 底面上	第56図 PL.26-3	土師器 器台	器高:△7.3 底径:※16.8	外面:ヨコナデ。 内面:受部横~斜め方向のミガキ。台部右方向のケズリ、端部ヨコナデ。	密	良好	内面:明黄褐色 外面:にぶい黄褐色	
63	131	SK13 東西ベルト	第56図 PL.26-5	土師器 器台	器高:△7.7 底径:※15.6	外面:ヨコナデ。 内面:台部上部左方向のケズリ、台下部および受け部ナデ。	密	やや不良	内外面:橙~にぶい橙色	
64	405	F 4 東西ベルト 暗褐色土	第57図 PL.28-1	弥生土器 甕	器高:△5.9	外面:体部縦方向ハケメ。頸部ヨコナデ。口縁端面に2条以上の沈線。 内面:体部ケズリ、指頭圧痕。口縁部ヨコナデ。一部横方向のミガキ。	密	良好	内外面:明黄褐色	
65	268	E 4-NW 暗褐色土	第57図 PL.28-1	弥生土器 甕	器高:△	外面:体部縦方向のハケメ。頸部~口縁部付近ヨコナデ。 内面:体部ケズリ。指頭圧痕。口縁部横方向のミガキ。	密(径2mmの石英を含む)	良好	外面:灰黄褐色 内面:にぶい褐色	
66	12	D 6-SW 暗褐色土	第57図 PL.28-1	弥生土器 甕	器高:△5.0	外面:ヨコナデ。口縁部に7条の平行沈線。 内面:ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	密	良好	外面:にぶい黄褐色 内面:浅黄色	
67	458	J 4-NW 黒色土	第57図 PL.28-1	弥生土器 底部	器高:△2.2 底径:4.8	内外面:ナデ。	密(径1~2mmの石英・長石あり)	良好	外面:淡黄色 内面:浅黄色	
68	74-399	D 4-SW 層不明・攪乱	第57図 PL.28-3	弥生土器 高杯	器高:△10.3 底径:※15.9	外面:縦方向のミガキ。脚端面に3条の凹線、裾端部付近に4条の凹線、柱部下半に9条の凹線文。 内面:左方向のケズリ。端部横方向のナデ。	密(径1mm以下の石英・砂粒を多く含む)	良好	外面:橙~褐灰色 内面:橙~にぶい褐~赤褐色	外面 赤色塗彩
69	450	J 4-SW 黒色土	第57図 PL.28-1	土師器 甕	器高:△3.3	内外面:ヨコナデ。	密	良好	外面:にぶい黄褐色 内面:橙色	
70	112	E 4-NW 暗褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 甕	口径:※12.6 器高:△3.7	内外面:ヨコナデ。	密	良	外面:にぶい黄褐色 内面:橙色	
71	458	J 4-NW 黒色土	第57図 PL.28-1	弥生土器 甕	器高:△3.8	外面:ナデ。指頭圧痕。 内面:左方向のケズリ後ナデ。	密	良	外面:橙色 内面:褐灰~にぶい黄褐色	外面に黒斑、赤色塗彩
72	260	E 4-NW 暗灰褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 体部	器高:△2.3	内外面:ヨコナデ。	密(径1mm以下の石英・長石を多く含む)	良好	内外面:黄褐色	
73	101	E 4-NW 暗褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 低脚杯	器高:△1.8	外面:ナデ。工具痕あり。 内面:ナデ。	密(径1mm以下の長石・石英を含む)	良	内外面:にぶい黄褐色	
74	129	E 3-SE 暗褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 低脚杯	器高:△2.4 脚径:※5.2	外面:脚部ナデ。口縁縦方向のミガキ。 内面:ナデ。	密(径2mm以下の長石あり)	良好	内外面:黄褐色	
75	432	J 4-SW 黒色土	第57図 PL.28-1	土師器 高杯	器高:△	外面:縦方向の面取り。 内面:絞り目。左方向へケズリ。ナデ。	密(径1~2mmの砂粒を含む)	良好	内外面:橙色	
76	112	E 4-NW 暗褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 器台	口径:※26.2 器高:△4.1	内外面:縦または斜め方向のミガキ。	密	良好	内外面:にぶい黄褐色	
77	113	D 3-SE 暗褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 器台	器高:△5.0	外面:ヨコナデ。縦方向のミガキ。 内面:ヨコナデ。横方向のミガキ。	密	良好	内外面:にぶい黄褐色	

第4章 倉谷荒田遺跡の調査

表27 出土土器・陶磁器観察表(4)

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
78	29	E 3-SW 暗褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 器台	器高:△3.1	外面:ヨコナデ。 内面:台部右方向へのケズリ。	密	良好	内外面:明黄褐色	炭化物付着
79	112	E 4-NW 暗褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 器台	器高:△2.6	外面:ヨコナデ。 内面:受け部ミガキ。台部ケズリ左方向へのケズリ。	密(径1mmの砂粒を含む)	良好	外面:にぶい黄橙～橙色 内面:橙色	
80	28・29	E 3-NW・S W:暗褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 器台	器高:△3.8	外面:ヨコナデ。 内面:ヨコナデ。一部ケズリ。	密	良好	内外面:にぶい黄褐色	
81	260	E 4-NW 暗褐色土	第57図 PL.28-1	土師器 器台	器高:△4.9	外面:ヨコナデ。ミガキ。 内面:受け部ミガキ。台部右方向のケズリ。	密(径1mm以下の石英・長石を含む)	良	内外面:にぶい黄褐色	
82	392	G 5-SE 暗褐色土	第57図 PL.28-1	手づくね土 器	口径:※3.8 器高:△4.4	内外面:ナデ。	密	良好	内外面:明黄褐色	外面に黒斑
83	450	J 4-SW 黒色土	第57図 PL.28-1	手づくね土 器	器高:△3.6	内外面:ナデ。指頭圧痕。	密	良	外面:明黄褐色 内面:黒褐色	
84	432	J 4-SW 黒色土	第57図 PL.29-1	須恵器 坏蓋	器高:△2.2	内外面:回転ナデ。	密	良好	内外面:灰色	
85	429	J 4-NE 黒色土	第57図 PL.29-1	須恵器 壺	器高:△5.6	外面:回転ナデ。沈線及び波状文。 内面:回転ナデ。	密	良好	内外面:灰色	
86	456	I 3-SE 黒色土	第57図 PL.29-1	須恵器 体部	器高:△6.5	外面:平行タタキ。 内面:同心円状の当て具。	密	良	外面:灰白色 内面:褐灰色	
87	387	J 5-NE 暗褐色土	第57図 PL.29-1	須恵器 体部	器高:△4.7	外面:格子方向のタタキ。 内面:同心円状の当て具。	密	良	内外面:黄灰色	
88	436	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-1	土師質土器 坏	器高:△3.7	内外面:回転ナデ。	密	良	内外面:明黄褐色	
89	432	J 4-SW 黒色土	第58図 PL.29-1	土師質土器 小皿	器高:△0.9 底径:4.3	内面:回転ナデ。 外面:底面静止糸切り。	密(径1mm前後の砂粒を含む)	良好	外:にぶい黄橙～灰黄褐色 内:にぶい黄橙～暗褐色	
90	449	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-1	土師質土器 坏	器高:△1.4 底径:※6.1	内面:回転ナデ。 外面:糸切り痕。	密(長石少量混)	良好	外面:浅黄橙～黒色 内面:浅黄褐色	
91	492	K 6-NW 黒褐色土	第58図 PL.29-1	土師質土器 坏	器高:△1.2 底径:※6.8	内面:回転ナデ。 外面:回転糸切。	密	良	内外面:淡黄色	
92	449	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-1	土師質土器 坏	器高:△1.3 底径:※8.0	内面:回転ナデ。押圧。 外面:回転糸切。板目。	やや密	良好	内外面:にぶい黄褐色	
93	492	K 6-NW 黒褐色土	第58図 PL.29-1	瓦質土器 羽釜	器高:△9.3	外面:横方向のナデ。 内面:横方向のハケメ、横方向のナデ、一部押圧。	密(径2～3mmの砂粒を多く含む)	良	外面:黒色 内面:浅黄～黄灰色	外面に炭化物付着
94	477	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-1	瓦質土器 羽釜	器高:△7.7	外面:横方向のナデ。一部工具によるナデ。 内面:横方向のナデ。	密(径0.1mm以下の石英・長石を多く含む)	良好	内外面:灰黄色	口縁部に炭化物付着
95	458	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-1	瓦質土器 羽釜	器高:△5.9	外面:横方向のナデ。押圧。 内面:横方向のナデ、一部ハケ状工具痕。	良好	やや不良	外面:浅黄褐色 内面:にぶい橙色	
96	477	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-2	備前鉢	器高:△6.6	内外面:横方向のナデ。	密	良	内外面:黒褐色	
97	458	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-2	備前片口播鉢	器高:△7.4	外面:横方向のナデ。2本以上の沈線。 内面:横方向のナデ。6本単位の播目。	密(径0.5～1mmの長石・石英を多く含む)	良好	外面:褐灰～褐色 内面:灰色	
98	456	I 3-SE 黒色土	第58図 PL.29-1	備前播鉢	器高:△2.1	内外面:横方向のナデ。	密(径0.5～3mmの石英・長石を多く含む)	良好	内外面:にぶい赤褐色	
99	449	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-2	備前播鉢	器高:△5.0	外面:横方向のナデ。 内面:横方向のナデ。6本単位の播目。	密	良好	外面:灰黄褐色 内面:灰褐色	
100	30	表土	第58図 PL.29-2	陶器 播鉢	器高:△3.7	外面:横方向のナデ。 内面:横方向のナデ。8本単位の播目。	密(径2mmの砂粒を多く含む)	良好	外面:にぶい赤褐色 内面:暗赤褐色	
101	431・476	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-1	瓦質土器 播鉢	器高:△7.8 底径:※9.2	外面:横方向のナデ。 内面:横方向のナデ。6本単位の播目。	密(径0.1mm以下の砂粒を多く含む)	良好	外面:灰白色～灰色 内面:灰白色	
102	420	J 4-SE 黒色土	第58図 PL.29-2	須恵器 壺	口径:※18.5 器高:△3.8	内外面:横方向のナデ。	密(径0.5～1mmの黒雲母を含む)	良	内外面:灰オリーブ色	
103	47・443	F 3-SE J 4-SE 黒色土	第58図 PL.30-1	須恵器 壺	口径:※17.2 器高:△15.7 最大胴径:※31.0	外面:ヨコナデ。肩部に3本の沈線。 内面:ヨコナデ。	密(径1～2mmの長石をわずかに含む)	良	内外面:灰色	
104	477	J 4-NW 黒色土	第58図 PL.29-1	越前甕	器高:△6.2	外面:横方向のナデ。 内面:横方向のナデ。	密	良好	内外面:にぶい黄褐色	
105	429	J 4-NE 黒色土	第58図 PL.29-2	須恵器 底部	器高:△4.6	内外面:ヨコナデ。	やや粗い(径1～2mmの黒雲母、径1mm以下の砂粒を含む)	良	内外面:褐灰色	
106	429	J 4-NE 黒色土	第58図 PL.30-1	須恵器 底部	器高:△8.5	内外面:ヨコナデ。	密	良	外面:黄灰色 内面:黄灰～黄褐色	
107	436	J 4-NW 黒色土	第59図 PL.30-2	青磁 碗	器高:△4.8	内外面:回転ナデ。施釉。	密	良好	内外面:オリーブ灰色	

表28 出土土器・陶磁器観察表(5)

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
108	21	D 7 攪乱土	第59図 PL.30-2	青磁 碗	器高:2.9	内外面:回転ナデ。施釉。畳付:露胎。	密	良好	外:オリーブ灰色 内:オリーブ黄色
109	474	I 3-SW 黒色土	第59図 PL.30-2	青磁 皿	器高:△1.6	内外面:回転ナデ。施釉。	密	良好	内外面:オリーブ灰色
110	429	J 4-NE 黒色土	第59図 PL.30-2	青磁 皿	器高:△1.9	内外面:回転ナデ。施釉。	密	良好	内外面:灰オリーブ色
111	417	J 4-NE 黒色土	第59図 PL.30-2	青磁 盤	器高:△2.7	内外面:回転ナデ。施釉。	密	良好	内外面:緑灰色
112	488	H 5-NW 黒色土	第59図 PL.30-2	染付 皿	器高:△1.4	内外面:回転ナデ。絵付・施釉。	密	良好	内外面:灰オリーブ色 絵付:暗緑色

表29 出土石器観察表

☆: 21年度調査時の番号

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	種類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S1	428	谷部 暗褐色土	第40図 PL.28-2	凹基式 石鏃	黒曜石	1.7	1.5	0.35	0.4	
S2	85	G 5-NW 暗褐色土	第40図 PL.28-2	平基式 石鏃	サヌカイト	2.0	1.6	0.3	0.7	
S3	236	SI 2-SW 暗褐色土	第43図 PL.28-2	平基式 石鏃	サヌカイト	2.2	1.7	0.4	1.0	
S4	☆523	SI 5 床面直上	第46図 PL.23-4	敲石	デイサイト	12.7	7.9	5.5	642.9	敲打痕あり。
S5	☆405	SI 5 ④層	第46図 PL.23-5	台石	デイサイト	13.1	12.2	6.5	126.0	被熱赤化している。
S6	554	SI 6 ④層	第50図 PL.25-4	軽石	—	6.2	6.0	4.2	33.5	
S7	523	SI 6-NW ④暗褐色土上層	第50図 PL.25-4	軽石	—	4.0	5.6	4.2	18.5	
S8	558	SI 6 床面上	第20図 PL.25-2	台石	デイサイト	20.25	16.9	5.0	3,200	
S9	559	SI 6 床面上	第20図 PL.25-3	台石	花崗岩	27.2	20.5	8.5	6,270	
S10	255	F 7-NW 攪乱	第67図 PL.28-2	削器	サヌカイト	8.5	3.8	1.0	30.6	
S11	469	J 4-NE 黒色土	第67図 PL.30-3	磨石	デイサイト	10.3	8.2	5.1	642.5	
S12	580	不明	第67図 PL.30-4	砥石	花崗岩	6.6	6.5	3.6	211.0	
S13	489	H 5-NW 黒色土	第67図 PL.30-4	砥石	花崗岩	10.2	6.4	3.1	163.5	

表30 出土鉄器観察表(1)

☆: 21年度調査時の番号

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	器種	法量(cm)	形態・手法上の特徴	備考
F1	214	SI 2-NW 黄褐色土	第43図 PL.32	棒状不明品 (鍛造品)	残存長:2.3 最大幅:0.5 最大厚:0.5	断面方形の棒状品。両端部が欠損。	構成No:51 磁着度:1 重量:1 g メタル度:錆化(△)
F2	320	SI 2 ⑦層	第43図 PL.32	板状不明品 (鍛造品)	残存長:3.7 最大幅:1.1 最大厚:0.3	両端部欠損。	構成No:39 磁着度:1 重量:3 g メタル度:錆化(△)
F3	239	SI 2-SE 暗褐色土	第43図 PL.32	板状不明品 (鍛造品)	残存長:2.9 最大幅:1.8 最大厚:0.3	湾曲する板状品。両端部欠損。	構成No:40 磁着度:1 重量:2 g メタル度:錆化(△)
F4	☆461	SI 5 ③層	第47図 PL.31	鉈	残存長:11.7 最大幅:1.3 最大厚:0.5	先端部及び、基部が欠損。基部縦断面がやや湾曲する。	重量:27.60 g
F5	☆421	SI 5 ⑥層	第47図 PL.31	袋状鉄斧	残存長:8.1 最大幅:3.1 最大厚:1.8	完形の袋状鉄斧。基部幅と刃部幅がほぼ同じ。袋部の断面形状は楕円形になる。刃部の断面は湾曲する形状になる。	重量:49.37 g
F6	☆425①	SI 5 ⑥層	第47図 PL.31	鉄鏃	残存長:4.4 最大幅:3.4 最大厚:0.3	無茎の鉄鏃。完形。	重量:18.86 g
F7	☆425②	SI 5 ⑥層	第47図 PL.31	板状不明品	残存長:3.1 最大幅:6.2 最大厚:0.4	左側面が欠損する。	重量:26.45 g
F8	158	SI 5-SE 床面上	第47図 PL.31	板状不明品 (鍛造品)	残存長:3.8 最大幅:2.35 最大厚:0.3	両端部欠損。	構成No:52 磁着度:1 重量:8 g メタル度:錆化(△)

第4章 倉谷荒田遺跡の調査

表31 出土鉄器観察表(2)

☆: 21年度調査時の番号

遺物番号	取上番号	遺構地区 層位名	挿図 PL	器種	法量(cm)	形態・手法上の特徴	備考
F9	159	SI5-N E 床面上	第47図 PL.31	刀子か	残存長:2.9 最大幅:2.6 最大厚:0.4	一部に刃部が残存か。	構成No:53 磁着度:1 重量:5 g メタル度:錆化(△)
F10	☆420	SI5 ⑤層	第47図 PL.31	板状不明品	残存長:1.3 最大幅:1.7 最大厚:0.3	板状の鉄製品。	重量:2.05 g
F11	☆406	SI5 ④層	第47図 PL.31	棒状不明品	残存長:3.2 最大幅:0.5 最大厚:0.3	棒状の鉄製品。断面方形。上端部、下端部は欠損する。穿孔具か。	重量:1.58 g
F12	☆426	SI5 ⑥層	第47図 PL.31	棒状不明品	残存長:2.9 最大幅:1.8 最大厚:1.7	厚手の棒状鉄製品。基部、先端部は欠損する。鏝の身部か。	重量:16.98 g
F13	161	SI5-N E 床面上	第47図 PL.31	棒状不明品 (鍛造品)	残存長:1.8 最大幅:1.2 最大厚:0.75	断面三角状。	構成No:1 磁着度:1 重量:1 g メタル度:錆化(△)
F14	156	SI5-S E 床面上	第47図 PL.31	棒状不明品 (鍛造品)	残存長:5.4 最大幅:0.8 最大厚:0.3	両端部欠損。一部に木質が遺存する。	構成No:42 磁着度:1 重量:5 g メタル度:錆化(△)
F15	155	SI5-S E 床面上	第47図 PL.31	棒状不明品 (鍛造品)	残存長:6.4 最大幅:1.05 最大厚:0.2	両端部欠損。一部に木質が遺存する。	構成No:43 磁着度:1 重量:10 g メタル度:錆化(△)
F16	555	SI6 ④層	第50図 PL.32	鉤か (鍛造品)	残存長:2.8 最大幅:1.2 最大厚:0.3	両端部欠損。	構成No:44 磁着度:1 重量:3 g メタル度:錆化(△)
F17	502	G5-S E 暗褐色土	第57図 PL.32	鉄鎌 (鍛造品)	残存長:2.6 最大幅:3.45 最大厚:0.35	有茎式鉄鎌。茎部に木質が遺存する。	構成No:38 磁着度:1 重量:5 g メタル度:錆化(△)
F18	468	I4-N E 黒色土	第60図 PL.32	棒状不明品 (鍛造品)	残存長:5.3 最大幅:0.8 最大厚:0.5	両端部欠損。断面は長方形状。	構成No:45 磁着度:1 重量:7 g メタル度:錆化(△)
F19	457	I3-S E 黒色土	第60図 PL.32	釣針 (鍛造品)	残存長:4.8 最大幅:1.5 最大厚:0.3	断面は長方形状。基部は欠損する。かえりをもたない。	構成No:48 磁着度:1 重量:7 g メタル度:錆化(△)
F20	457	I3-S E 黒色土	第60図 PL.32	釘 (鍛造品)	残存長:6.9 最大幅:0.8 最大厚:0.65	断面は方形で頭部は折り曲げられる。先端部付近は欠損。	構成No:47 磁着度:1 重量:10 g メタル度:錆化(△)
F21	441	J4-S E 黒色土	第60図 PL.32	鉤か (鍛造品)	残存長:10.9 最大幅:1.6 最大厚:0.55	両端部欠損。断面は長方形状。一部木質が遺存する。	構成No:46 磁着度:1 重量:13 g メタル度:錆化(△)
F22	452	谷部北壁ト ンチ	第60図 PL.32	鍋 (鋳造品)	残存長:6.3 最大幅:4.0 最大厚:0.5	体部片か。	構成No:50 磁着度:1 重量:65 g メタル度:H (○)
F23	437	J4-NW 黒色土	第60図 PL.32	鍋 (鋳造品)	残存長:4.4 最大幅:3.4 最大厚:0.3	体部片か。	構成No:49 磁着度:1 重量:15 g メタル度:錆化(△)

表32 出土鉄関連遺物観察表(1)

遺物番号	挿図 PL	取上 番号	出土遺構 層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着 度	メタ ル度	備考
F24	第61図 PL.33-1	453	J4-NW 黒色土	炉壁(通風孔付)	2.8	4.8	4.0	33	1	なし	通風孔部壁面の一部が残る。炉壁小破片。通風孔部の径は現状で2.9cm以上を測る円孔となる。一般的に円孔は中世には消失する。
F25	第61図 PL.33-1	475	J4-NW 黒色土	炉壁(製錬炉)	5.5	6.0	2.8	68	1	なし	側部4面と外面が破面となった炉壁破片。内面は青黒・溶損し、わずかに滓が溶着する。胎土中には少々スサを混じえる。
F26	第61図 PL.33-1	581	谷部 層不明	炉壁(製錬炉)	8.1	8.3	3.7	267	1	H (○)	側部から外面が破面となった炉壁破片。側部内面寄りには粘土帯の接合部で、砂鉄が焼結する。砂鉄粒子は中粒で角張っており、表面に光沢をもつ青黒色。内面は溶化しているが、部分的にマグネサイト系の滓が形成されている。
F27	第61図 PL.33-1	465	H3-SW 黒色土	炉壁(製錬炉)	8.9	6.3	3.6	182	1	なし	側部から外面が破面となった炉壁破片。内面は溶化が進み、右側にはタレも生じていて、胎土中のヒビ割れが内面にも隙間から露出する。
F28	第61図 PL.33-1	453	J4-NW 黒色土	炉壁(製錬炉)	8.3	8.4	2.8	198	1	なし	下端部が水平方向に延びる粘土帯の接合部となった炉壁破片。残る側部から外面は破面となる。内面上半部は溶損が進み、下半部はタレが突出する。内面寄りの表層はやや厚い滓に覆われる。
F29	第61図 PL.33-1	437	J4-NW 黒色土	炉壁(補修)	7.7	9.5	5.9	316	1	なし	内面が重層した特異な炉壁破片。下面左側部には通風孔部壁面の炉壁破片が幅1.7cm程の範囲で残されている。通風孔部は円形断面の一部で、上端部は粘土帯の接合部の可能性あり。側部から外面は破面となっており、スサを交えた硬質の胎土が突出する。
F30	第62図 PL.33-2	453	J4-NW 黒色土	炉底塊(薄手)	12.0	9.5	4.9	1067	1	なし	上面に右方向に向く流れ皺が目立つ炉底塊長軸端部破片。底面は浅い舟底状で、粉炭痕が並ぶ。左右の側部と下部が破面。
F31	第62図 PL.33-2	453	J4-NW 黒色土	炉底塊(薄手、 工具痕付)	5.1	10.6	5.2	1028	1	H (○)	上面に工具痕状の強い凹みを残す炉底塊端部破片。右半分は流出孔と想定される。短軸側の両側面と左側部が破面となる。下面は重層気味。
F32	第62図 PL.33-2	453	J4-NW 黒色土	炉底塊(薄手、 工具痕付)	14.0	14.3	6.1	1154	1	錆化 (△)	上面の一部は半流動状となった炉底塊端部破片。左右の側面と上面の8面が破面となる。右半分は流出孔側か。上面左上手側の凹みは工具痕の可能性あり。

表33 出土鉄関連遺物観察表(2)

遺物番号	採国 PL	取上番号	出土遺構層位	遺物名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
F33	第62図 PL.33-2	453	J 4-NW 黒色土	炉底塊(薄手、工具痕付)	21.9	17.3	4.8	1815	2	H (○)	上面に4単位以上の強い工具痕を残す炉底塊側部破片。上面のみ生きており、側部は連続的に破面となる。滓にはやや密度が低く、浅い舟底状で、下面には木炭や炉床土様の被熱粘土塊が固着する。右側は流出孔滓側か。
F34	第62図 PL.33-3	453	J 4-NW 黒色土	炉底塊(厚手)	10.3	11.0	6.4	1515	1	錆化(△)	炉底塊コーナー部破片。左側部が大破面で、右上手側の側部は収束する。上面は流動状、右下手側の側部下半は流出孔状で、一部が突出する。
F35	第62図 PL.33-3	426	J 4-NW 黒色土	炉底塊(厚手)	12.5	17.6	8.5	2407	1	錆化(△)	短軸方向の幅が17cm前後を測る炉底塊端部破片。上面は浅く凹み、下面は左右方向に長手の舟底状に凹む。砂鉄粒子は緻密で、下面中央部が重層気味。
F36	第62図 PL.33-3	453	J 4-NW 黒色土	炉底塊～流出溝滓	9.4	10.7	6.4	724	1	なし	右側部上手側に工具痕状の凹みを残す炉底塊～流出溝滓破片。上面は流動状で、工具により突き崩されているためか、各所にヒビ割れが走る。
F37	第62図 PL.33-4	426	J 4-NW 黒色土	炉底塊～流出溝滓	11.5	13.5	7.2	1630	1	なし	基本的には前者(13)と似た炉底塊～流出溝滓破片。左側部下半はシャープな破面で、上面には幅広い流動単位が不規則に重層する。右側部は何らかの障害物に接した形で収束する。下面は丸味をもった舟底状。
F38	第62図 PL.33-3	453	J 4-NW 黒色土	炉底塊～流出溝滓	12.7	11.9	4.6	1227	1	なし	左側部が破面となった炉底塊～流出溝滓破片。上面は不規則な流動状で、右側の端部が収束する。下面は細かい粉炭面に覆われる舟底状。
F39	第62図 PL.33-4	422	K 4-SW 黒色土	炉内滓	7.1	9.85	6.75	503	2	なし	側部から上面肩部全体が破面となった炉内滓破片。上面中央と下面が生きており、破面の結晶は大きく発達する。左側部寄りの酸化土砂が厚い。
F40	第62図 PL.33-4	427	J 4-NW 黒色土	炉内滓	9.9	9.2	6.0	881	1	なし	側部3面が破面となった炉内滓破片。炉底塊の左上側肩部にもみえる。結晶の発達は前者(16)と似る。下面はごく浅い舟底状。
F41	第62図 PL.33-3	470	J 4-NW 黒色土	炉内滓	11.2	9.1	5.4	913	1	なし	左側部が破面となった、炉内滓または流出溝滓破片。短軸部の両側部と右側部が生きている。また右側部は滓が収束し、肩部に径1.9cm程の丸棒状の断面形をなす工具痕が残る。下手側側部は重層気味。
F42	第62図 PL.33-4	440	J 4-NW 黒色土	炉内滓(含鉄)	8.15	4.7	4.05	180	2	H (○)	濃茶褐色の錆色に覆われた炉内滓小破片。上下面や右側部が生きており、左側部上面が破面となる。含鉄部は上半の芯部に広い。
F43	第62図 PL.33-4	453	J 4-NW 黒色土	炉内滓(含鉄)	8.5	7.0	4.7	367	2	H (○)	側部4面が破面となった含鉄の炉内滓破片。上面は浅く凹み、下面は深い舟底状に突出する。破面に小木炭痕と黒錆が目立つ。含鉄部は上半の芯部に広い。
F44	第63図 PL.33-5	475	H 3-S E 黒色土	流出溝滓(細)	4.3	4.8	2.1	75	1	なし	左側部が破面となった流出溝滓。破片上面は流動気味で平滑、下面は粉炭痕と炉壁片の圧痕。
F45	第63図 PL.33-5	475	H 3-S E 黒色土	流出溝滓(細)	5.8	4.9	2.3	93	1	なし	上面中央部を幅2cm前後の流動単位が重層する流出溝滓破片。左上側部と右下側部が破面となる。破面の残りはやや変形する。
F46	第63図 PL.33-5	465	H 3-S W 黒色土	流出溝滓(細)	3.1	5.0	3.65	101	1	なし	左右の側部が破面となった、流出溝滓または流出孔滓破片。破面を除く側部が木炭痕に覆われているため、流出孔滓破片の可能性がやや強めか。
F47	第63図 PL.33-5	465	H 3-S W 黒色土	流出溝滓(細)	9.6	4.95	2.5	169	1	なし	左右の側部が破面となった、長さ2.5cm程の扁平な流出溝滓破片。上面は平滑で、下面は表皮の剥落が激しい。
F48	第63図 PL.33-5	470	J 4-NW 黒色土	流出溝滓(細)	13.2	4.3	2.1	186	1	なし	上下に強い流れ痕を残す細身の流出溝滓破片。左右の側部が破面で、滓は流動性が高い。下面は炉壁粉が圧痕として残る。
F49	第63図 PL.33-5	470	J 4-NW 黒色土	流出溝滓(中)	6.15	8.6	3.6	276	1	なし	上下に別単位の流動滓が重層する、幅6cm前後の流出溝滓破片。左右の側部が破面で、上下表皮は流れシワから平滑面となる。下面は浅い舟底状で、左側が突き動かされたためかヒビ割れている。
F50	第63図 PL.33-5	453	J 4-NW 黒色土	流出溝滓(中)	7.5	10.0	4.0	502	1	なし	表面全体が錆色で、酸化土砂に覆われた流出溝滓破片。左側部から上面左側は破面で、右側の端部も小破面となる。側部から下面は一部が突出する舟底状となる。
F51	第63図 PL.33-5	440	J 4-NW 黒色土	流出溝滓(中)	9.2	9.7	3.2	452	1	なし	右方向に流動する単位が目立つ、流出溝滓破片。左右の側部が破面で、上面主軸側の肩部には小単位の滓が寄り添うように走る。下面は舟底状。
F52	第63図 PL.33-5	453	J 4-NW 黒色土	流出溝滓(中)	7.2	10.8	5.9	592	1	なし	左右の側部が大破面となった流出溝滓破片。上面には薄く巻くような大ぶりの流動単位が5単位以上認められる。上手側は端部が欠落する。
F53	第63図 PL.33-5	453	J 4-NW 黒色土	流出溝滓(重層)	7.1	8.4	5.7	472	1	なし	上下2枚が重層した流出溝滓破片。左右の側部と下半の肥厚した滓の下半部が破面となる。上面は平滑で、下面はきれいな舟底状。
F54	第63図 PL.33-6	483	J 4-NW 黒色土	流出孔～溝滓	13.8	8.0	6.4	639	1	なし	左側部2面が大破面となった、流出孔～溝滓破片。両面には盛り上がった状態で下方に流れ下り、端部が収束気味。下面は強い舟底状で、右側は舟の軸先状。
F55	第63図 PL.33-6	427	J 4-NW 黒色土	流出孔～溝滓	21.2	10.9	7.9	2929	1	錆化(△)	右側部が4面にわたって破面となった大型の流出孔～溝滓破片。滓は右方向に流れて筋状の流れ痕を生じている。左側は短軸幅が狭まり、滓は収束気味。内面には工具痕らしき圧痕が複数認められる。下面は丸味をもった強い舟底状。
F56	第63図 PL.33-6	446	J 4-SW 黒色土	流出孔～溝滓	26.2	16.1	8.0	5340	1	錆化(△)	重層が目立つ流出孔～溝滓破片。流出孔滓は左下手よりの下面に突出し、上面や下面右側は別単位の滓が方向を僅かに変えて重層する流出溝滓。
F57	第63図 PL.33-6	470	J 4-NW 黒色土	流出孔滓	7.3	7.7	6.1	553	1	なし	短軸方向の断面形が不整形となる、流出溝滓破片。左右の側部が破面で、上面は流出孔上端部の壁面に隙間が生じていたように僅かに凹む。滓粒は緻密で、上面左側部に気孔が発達する。
F58	第63図 PL.33-6	453	J 4-NW 黒色土	流出孔滓	8.3	13.3	7.9	973	1	なし	左側の側部が破面となった、流出溝滓破片。上面には木炭痕が並ぶ。上面左側部は引きざられたように欠落する、不自然な破面となる。上面右手側から差し込まれた工具痕あり。側部から下面は強い舟底状で、一部が重層する。
F59	第63図 PL.33-6	431	J 4-NW 黒色土	流動滓	6.9	5.7	2.3	128	1	なし	側部4面がシャープな破面となった、扁平な流動滓破片。上面に平滑で、浅い皺を生じている。
F60	第63図 PL.33-6	453	J 4-NW 黒色土	流動滓	6.4	5.8	2.6	135	1	なし	側部3面が破面となった、流動滓破片。上面は平滑で、3単位以上の流動が確認できる。下面は木炭痕が残る舟底状。下面側部に中空部が広がる。

第7節 自然化学分析

倉谷荒田遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

倉谷荒田遺跡は、鳥取県西伯郡大山町倉谷字荒田(北緯35°30'30"、東経133°32'06"付近)に所在し、中国地方最高峰の大山(標高1729m)の北麓から派生する丘陵上の緩斜面部に位置する。測定対象試料は、SK9底面ピット出土炭化物(No.9 : IAAA-112263)、SK10<sup>⑩</sup>層出土炭化物(No.10 : IAAA-112264)、SK12底面ピット出土炭化物(No.11 : IAAA-112265)の合計3点である(表34)。これらの遺構はいずれも縄文時代の落とし穴と推定されている。

試料はすべて調査現場にて遺構埋土として採取され、後に水洗選別によって土の中から炭化物が取り出された。試料の状態と採取に関するデータを表1に、写真を文末に示した。

表34 測定対象試料

測定番号	試料名	試料形態	採取位置・量	色調	状態	付着物	残試料	備考
IAAA-112263	No.9	炭化物	炭化物 3×3×1mm以下約20個のうち、大きい2個を除いて他をすべて採取。	黒色	乾	表面一部に土	あり	調査現場で遺構埋土として採取。後に水洗選別で炭化物を抽出。
IAAA-112264	No.10	炭化物	炭化物 2×1×1mm以下約12個、球状の炭化物直径1mm1個のうち、前者をすべて採取。	黒色	乾	なし	あり	調査現場で遺構埋土として採取。後に水洗選別で炭化物を抽出。
IAAA-112265	No.11	炭化物	炭化物 4×2×1mm以下4個、その他碎片のすべてを採取。	黒色	乾	表面一部に土	なし	調査現場で遺構埋土として採取。後に水洗選別で炭化物を抽出。

2 測定の意義

遺跡内の落とし穴の時期を明らかにする。さらに遺跡内で特徴の異なる落とし穴の時期を比較し、時期ごとの様相を検討する。

3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA : Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表2に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

## 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 5 算出方法

(1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表35)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表35に、補正していない値を参考値として表36に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい(<sup>14</sup>Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表35に、補正していない値を参考値として表36に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表36に示した。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

## 6 測定結果

3点の試料のうちNo.9は、化学処理を進めたところ炭素含有率が極めて低く、通常の炭化物ではないと判断されたため、測定中止となった。以下、測定できた2点について検討する。

炭化物の<sup>14</sup>C年代は、SK10⑩層出土のNo.10が $8790 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK12底面ピット出土のNo.11が $5140 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、No.10が7939~7788cal BCの範囲、No.11が3979~3826cal BCの間に3つの範囲で示され、No.10が縄文時代早期前半頃、No.11が前期半ば頃に相当すると見られる。

試料2点の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められな

第4章 倉谷荒田遺跡の調査

い。

表35 測定結果(1)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-112263	No.9	遺構：SK19(新遺構名SK9) 底面ピット 層位：SK19(新遺構名SK9) ⑦層	炭化物	AaA			
IAAA-112264	No.10	遺構：SK26(新遺構名SK10) 層位：⑩層(最下層)	炭化物	AaA	$-32.81 \pm 0.44$	$8,790 \pm 30$	$33.49 \pm 0.14$
IAAA-112265	No.11	遺構：SK21(新遺構名SK12) 底面ピット 層位：SK21(新遺構名SK12) ⑥層	炭化物	AaA	$-15.51 \pm 0.52$	$5,140 \pm 30$	$52.77 \pm 0.18$

[#4823]

注) No.9 (IAAA-112263)は通常の炭化物ではないと判断されたため、測定中止となった。

表36 測定結果(2)

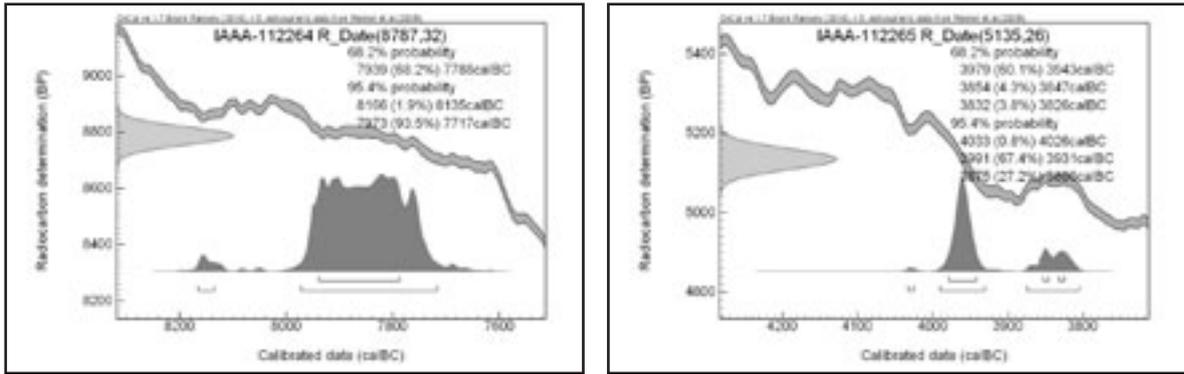
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112263					
IAAA-112264	$8,920 \pm 30$	$32.96 \pm 0.13$	$8,787 \pm 32$	7939calBC - 7788calBC (68.2%)	8166calBC - 8135calBC (1.9%) 7973calBC - 7717calBC (93.5%)
IAAA-112265	$4,980 \pm 30$	$53.80 \pm 0.17$	$5,135 \pm 26$	3979calBC - 3943calBC (60.1%) 3854calBC - 3847calBC (4.3%) 3832calBC - 3826calBC (3.8%)	4033calBC - 4026calBC (0.8%) 3991calBC - 3931calBC (67.4%) 3875calBC - 3806calBC (27.2%)

[参考値]

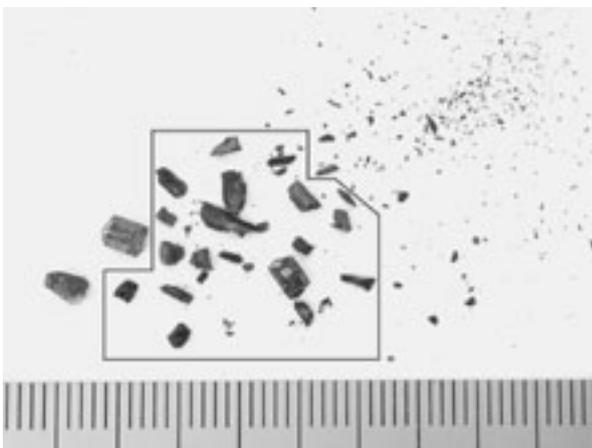
注) No.9 (IAAA-112263)は通常の炭化物ではないと判断されたため、測定中止となった。

文献

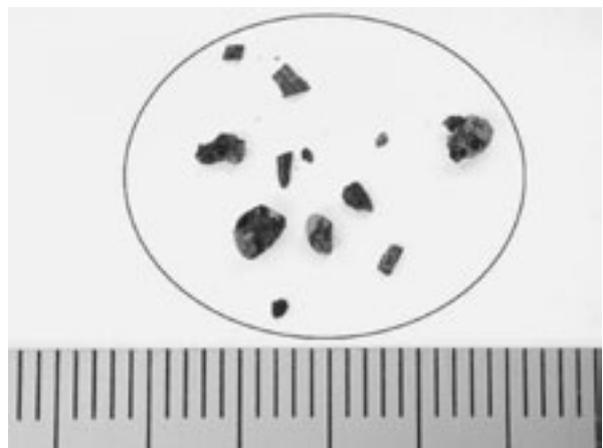
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363  
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360  
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150



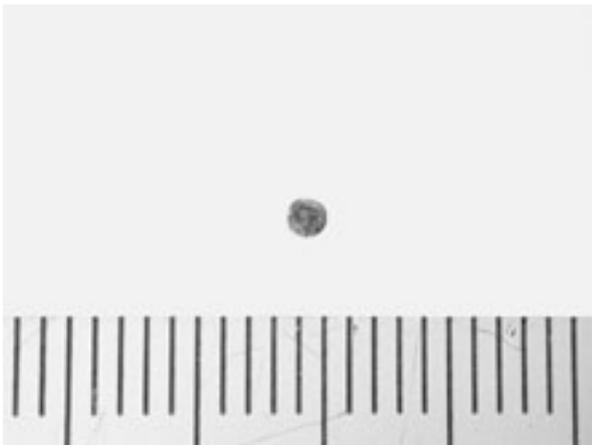
第69図 暦年較正年代グラフ



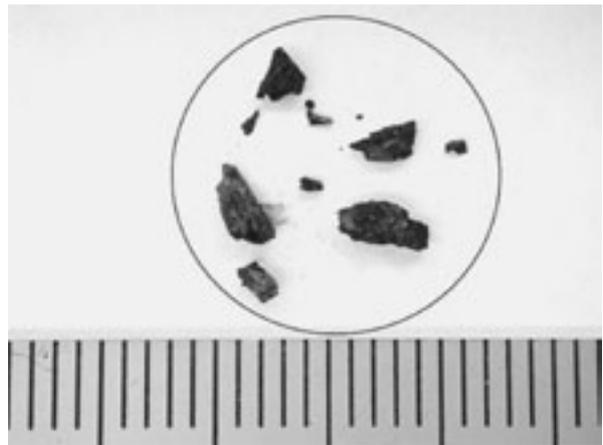
No. 9



No.10(使用した炭化物)



No.10 (使用しなかった炭化物)



No.11

写真4 測定対象試料(線で囲んだ部分を試料とした)

第8節 倉谷荒田遺跡の総括

今回の調査では、縄文時代の土坑6基、古墳時代前期～中期の竪穴住居跡3棟、土坑1基、古墳時代後期以前の掘立柱建物跡1棟、時期の特定できない溝1条、土坑2基を検出した。また、平成21年度調査において、縄文時代の土坑3基、弥生時代の竪穴住居跡1棟、古墳時代の竪穴住居跡2棟(1棟は今回調査と重複)、土坑1基、古墳時代以前の掘立柱建物跡1棟、土坑2基、近世以降の土坑2基を検出している。ここでは、平成21年度調査も含めた倉谷荒田遺跡について時期ごとに総括を行う。

1. 縄文時代

平成21年度と今回調査を合わせ丘陵上及び斜面部に計7基の落とし穴を検出した。平面形はSK9が楕円形を呈するほかは円形で、底面ピットを伴うものと伴わないものの二者がある。底面ピットの有無による顕著な分布の傾向は認められず、等高線や稜線に沿った分布を示しているとも断定しがたい。落とし穴相互の間隔は20m程度と周辺遺跡に比してやや広く、分布がやや散漫な印象を受ける。今回調査した落とし穴のうち2基で放射性炭素年代測定を行っており、底面ピットを伴わないSK10が縄文時代早期前半、底面ピットを伴うSK12が縄文時代前期半ばとの結果を得ており、底面ピットを伴うものが後出する可能性がある。

2. 弥生時代

平成21年度調査において弥生時代中期後葉の竪穴住居跡(SI4)を検出したが、今回調査においては遺構を検出していない。出土遺物も包含層や遺構埋土上層から少量出土した程度で、丘陵頂部から東側の斜面部にかけては集落は展開していなかったと考える。SI4は直径約4m、中央ピットのみで柱穴を伴わず、床面には貼り床が施されている。調査地外西側の状況は不明であるが、丘陵頂部を中心とした南北それぞれ約30mと、今回調査した東側には同時期の遺構が全くみられないことから、複数棟からなる集落が展開していたのではなく、何らかの機能を与えられ単独で設けられた施設であった可能性があるだろう。柱穴が存在しない特徴的な構造も、与えられた機能と関連した結果と考える。

3. 古墳時代

古墳時代は前期の竪穴住居跡3棟(SI2・SI3・SI5)、土坑1基(SK13)、中期の竪穴住居跡1棟(SI6)、後期以前の掘立柱建物跡1棟(SB2)を検出した。

古墳時代前期の3棟はいずれも調査地北側に位置しており、この時期の集落の中心は調査地外の北側に広がっていたと推測する。時期的には、SI3が古墳時代前期前葉(天神川Ⅱ期)、SI2・SI5が古墳時代前期中葉(天神川Ⅲ期)で、これら3棟の竪穴住居跡は、柱穴のあり方がいずれも異なっていることが特徴的である。

SI3は三分の一程度が調査地外に広がっており、床面全域を確認することはできないが、床面を検出した状況から柱穴は存在していないと推定できる。住居中央に中央ピットがあり、その傍らの床面直上に被熱赤化した痕跡のある台石が出土している。

SI2は四隅付近に柱穴が4基あり、四本柱の建物と推定する。床面中央に中央ピットをもつ。

SI5は住居の東西軸の中央に柱穴が2つ存在する。また、東壁付近にもピット(P3)がある。壁際

に設けられるピットは「特殊ピット」と呼ばれ、埋土に炭化物を含んだり、底面に焼土がしばしばみられるが、SI5のP3にはそのような痕跡は認められない。掘り込みも中央のピットより深いため、補助柱もしくは壁際に設える構造物ための痕跡と考える。

以上のように、支柱穴の有無・位置が異なることから、住居の構造が異なっていた可能性がある。SI3とSI2・SI5とで時期が異なっており、時期差による変化も考慮しなければならないが、それぞれ集落の一部を単に構成していたのではなく、集落における役割や利用者など、建物の位置づけの差があったことも想定できる。

同時期の遺構としては、竪穴住居跡の他に古墳時代前期中葉(天神川Ⅲ期)の土坑(SK13)を検出した。SK13は焼土や炭化物など被熱の痕跡を顕著にとどめ、土器も被熱によって破損したとみられることから、火を用いた施設と考える。具体的な用途は明確にしがたいが、集落の中心が調査地北側に広がっていたとすれば、SK13は集落の南端に位置することになり、この地域で強風の吹く西風や北風で火が住居側へ与える影響を考慮して配置された可能性も指摘しておきたい。

古墳時代中期の竪穴住居跡は中期前葉(天神川Ⅴ期)の1棟(SI6)のみ確認しているが、SI6の北側周辺は後世に大きく削平されており、他にも住居が存在していた可能性がある。SI6の位置する斜面裾部は調査地外にも南北に続いており、同様の地形を利用した集落が調査地外にも広がっていたことが考えられる。SI6は支柱が4本から2本へ3段階で変遷したと推定しており、少なくとも最終段階には西壁際に接して仕切り溝を伴うピット(P9)が設けられている。P9埋土には炭化物が含まれており、炉としての機能も想定できる。谷部には古墳時代後期以前の掘立柱建物跡(SB2)も検出しており、位置関係から同時期の建物跡と推定する。

古墳時代は前期には丘陵上を、中期には丘陵裾から谷部を利用しており、住居の立地が明確に異なることが指摘できる。

#### 4. 古代から中近世(第70図)

古代から中近世については遺構は検出していないものの、谷部の自然流路埋土を中心に中世の土器や陶磁器、古代から中世の鉄関連遺物が出土した。いずれも周辺から移動してきた遺物と考える。ここでは遺物の分布を検討することで、周辺の遺跡も含めて当該期の遺構の状況を推察することにする。

##### 【中世の土器・陶磁器】

遺物の多くは自然流路内の黒色土内から出土した。ここでは分布状況を検討するため、中世遺物を種類に応じて、供膳具(土師質土器小皿・坏)、調理具(瓦質土器羽釜、陶器及び瓦質の播鉢)、貯蔵具(壺・甕)、青磁(碗・皿・盤)に分類し、4分の1グリッド単位(北東:NE、北西:NW、南東:SE、南西:SW)で点数を数えた。

供膳具は、Jラインを中心とした自然流路内の北側と調査地南東隅から出土した。いずれも器高が低く口径と底径の差が小さいことから、時期は概ね中世Ⅳ期、14世紀頃で、調査地の東隣の豊成叶林遺跡でも同時期の土師質土器が出土している(第5章第6節)。

調理具は、供膳具とほぼ同様の分布範囲である。煮炊具である瓦質羽釜はいずれも鏝が退化して口縁部も内傾ではなく、直立あるいは外傾することから中世ⅣからⅤ期、14世紀後半から15世紀にかけてのものである。播鉢には陶器と瓦質があり、陶器の播鉢は備前系と産地不明がある。備前系播鉢は乗岡ⅣA期、14世紀中葉から後半の範疇に収まり、ほかの年代観とも矛盾しない。瓦質の播鉢は在地

第4章 倉谷荒田遺跡の調査

産とみられる。

貯蔵具は供膳具、調理具とはやや異なり、Jライン北側ほか、FからGライン中央付近である谷部西側斜面部から出土した。器種としては壺及び甕で、焼成により分類すると須恵器、陶器に分かれる。このうち須恵器は当時焼成をしていた勝間田や亀山、備前ほか周辺の生産地いずれにも該当せず、在地での生産と考える。肩部には三筋壺を意識した沈線が入ること、口縁端部が玉縁状になることなど、概ね13～14世紀の様相を備える。陶器は越前の甕があり、口縁部の形状から判断すると木村編年Ⅲ-2期に該当し、概ね13世紀末から14世紀中頃で、ほかの遺物の年代観とも矛盾していない。越前の大甕は平成21年度の調査で、倉谷西中田遺跡の井戸からほぼ完形になる個体が出土している。

青磁はいずれも谷部5ラインよりも北側、黒色土からの出土である。いずれも龍泉窯系ではあるが、鎬連弁のない無紋の碗皿、盤であり、時期的には14から15世紀に下るものである。周辺は大きく掘削されており、その範囲の流入土からの出土である。ほかに鉄関連遺物ではあるが、中世の鉄鍋片が自然流路内の黒色土から出土した。

供膳具、調理具は自然流路の上流側(調査地南側)や中世の遺構・遺物が確認されている豊成叶林遺跡に由来を求めることができる。一方、貯蔵具は谷部だけでなく谷部西側斜面部からも出土しており、調査地外の丘陵上に何らかの遺構が存在している可能性も考えられる。

このように中世の土器及び陶磁器類は、東側の豊成叶林遺跡との関係も指摘でき、また、時期的に倉谷西中田遺跡と同時期であることから、倉谷西中田遺跡を中心とした鎌倉から室町期の遺跡の広がりの中、当該遺跡周辺が居住など、何らかのスペースとして利用されていたと考える。

【鉄関連遺物】

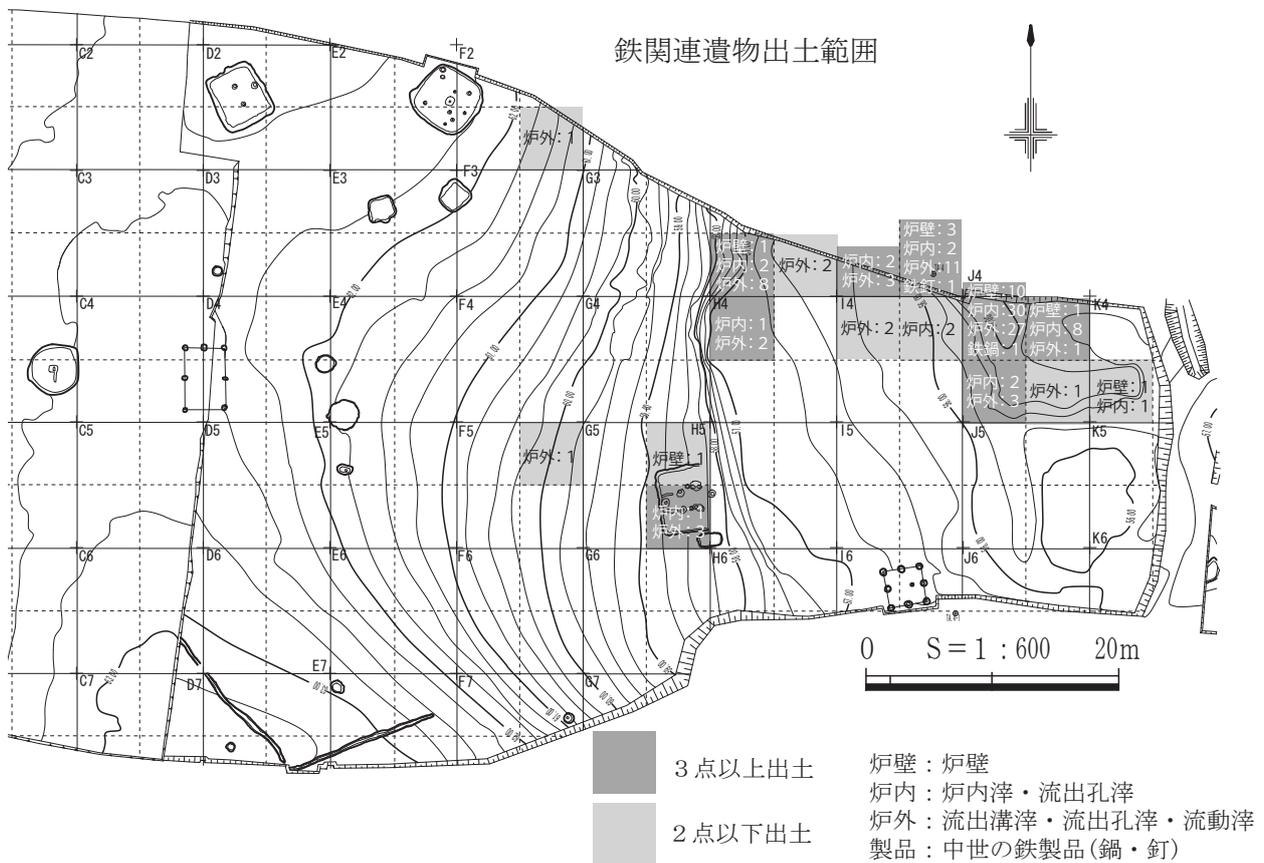
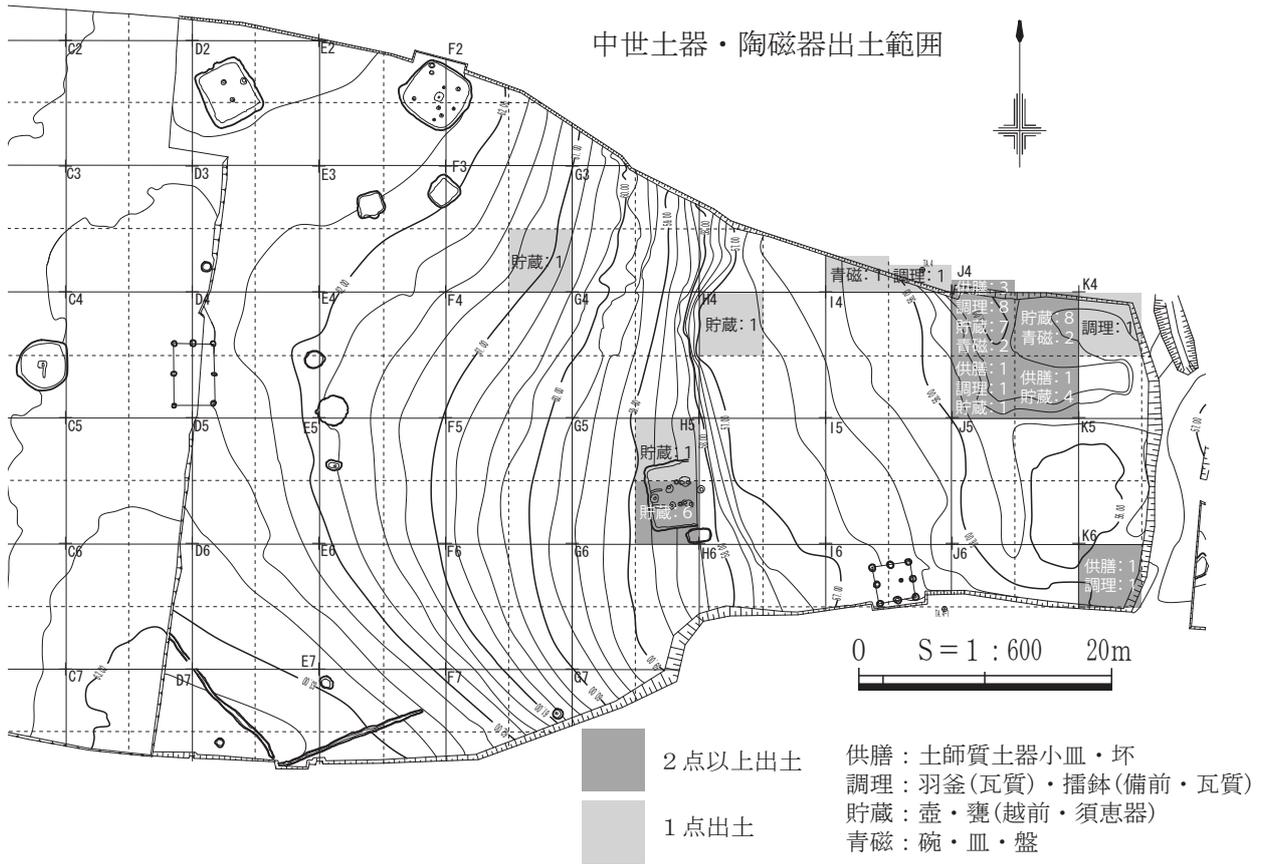
鉄関連遺物の総重量は約45kgであった。これら遺物は古代から中世以前の時期であり、それ以上細かな時期は特定できないものの、分布状況を整理・検討するためにこれらを4分の1グリッド単位で出土点数を数えた。(表36)。また、これらを「炉壁」、「炉内」、「炉外」、「製品」に4大別して出土位置を示している(第70図)。

表36 中世遺物グリッド別出土点数

※ 表中の略号は以下のとおり。鉄関連遺物の上段は出土点数、下段は重量を示す。

須：須恵器、越：越前系、備：備前系、瓦釜：瓦質羽釜、瓦鉢：瓦質鉢、瓦鉢：瓦質鉢

		D7-SE	F2-SE	F3-SE	F5-NE	G5-NE	G5-SE	H3-SE	H3-SW	H4-NW	H5-NW	H6-NE	I3-SE	I3-SW	I4-NE	I4-NW	J4-NE	J4-NW	J4-SE	J4-SW	K4-SW	K4-NW	K6-NW	
土器・陶磁器	供膳具																	坏:3	坏:1	皿:1			坏:1	
	炊飯具																		瓦釜:2				瓦釜:1	瓦釜:1
	調理具											備:1							瓦鉢:1 備:4 陶鉢:1		瓦鉢:1			
	貯蔵具	須:1		須:1		陶:1	須:5 越:1			越:1								須:7 越:1	須:4 越:3	須:4	須:1			
	磁器													青:1				青:2	青:2					
鉄関連遺物	炉壁					1 120g			1 182g			1 54g	3 57g				1 194g	10 907g				1 16g		
	炉底塊								1 504g								3 1406g	12 13604g						
	炉内滓					1 110g		1 51g	1 45g				2 304g	2 190g	2 56g		5 1039g	18 6353g		2 744g	1 503g			
	流出溝滓	1 100g				1 50g	2 168g	5 957g	1 39g	3 345g		2 297g				1 39g	1 257g	19 9686g		2 5448g				
	流動滓				1 52g	2 20g	3 73g	1 153g	2 16g	9 233g	3 37g				1 46g		8 562g	1 121g	1 119g					
	鉄製品												釘 10g						鍋 15g					



第70図 古代～中世遺物出土位置図

## 第4章 倉谷荒田遺跡の調査

滓の大きさは近世の鉦で出土するほどではなく、炉壁に含まれる混和物などからも中世以前の鉄関連遺物と考える。自然流路内からは中世の土器及び陶磁器類も出土しているが、時期的な関係については明らかではない。

炉底塊、炉内滓、流出溝滓等はいずれもI～Jライン北側を中心に自然流路の深部の黒色土内からの出土であるが、ほか炉壁や小型の鉄滓類は、調査地中央付近も含め、比較的広範囲に広がりをもつ。

まず炉壁は自然流路のほか、Hラインの斜面上側、調査地中央部の斜面上側など、谷部西側の斜面の一部にも分布範囲が認められるほか、炉内・炉外も同様に自然流路の外、谷部西側の斜面の一部にも分布する。

自然流路内の遺物は二次的に大きく動いていると考えられるが、谷部西側の斜面の上からも炉壁をはじめとする鉄関連遺物が出土している。これらの鉄関連遺物は調査地の北西斜面上に由来する可能性があり、付近はカナクソ溜池の縁辺部で、池の名称も鉄生産に関わる名称であることも付近に製鉄炉の存在を想定する上で興味深い。

当遺跡から直線距離で約300m西に倉谷西中田遺跡がある。ここからは平成21年度の調査で、約56kgの椀形鍛冶滓、鍛冶滓、再接合滓、鞆羽口等の鍛冶関連遺物が確認されており、中世の鍛冶関連遺構は確認できていないものの報告では鍛冶工房を方形区画の南側の丘陵上に求めている。倉谷西中田遺跡は堀によって囲繞された中世の屋敷地であり、当遺跡の範囲もその影響下にあったであろうから、当遺跡の鉄関連遺物が倉谷西中田遺跡との関係で生産された可能性も考えられよう。

### 参考文献

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 重根弘和 2003 「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』近藤喬一先生退官記念事業会
- 八峠興 2004 「山陰の中世土器に関する覚え書き」『中世土器研究』XVIII
- 乗岡実 2005 「備前」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』同実行委員会
- 石井啓 2006 「備前」『江戸時代のやきもの～生産と流通～』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 木村孝一郎 2008 「越前焼の編年研究ノート」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会